
In The Material ?

音十 充実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Material ?

【Nコード】

N2600M

【作者名】

音十 充実

【あらすじ】

何だこれは……。俺がやったのか？

主人公の中学校での表の顔と、部隊での裏の顔。

本当は能力は凄くてもそれを隠し通す！

この世の原理？物理？なにそれ？

そんなの関係なし。この世の物理に逆らいまくる能力。

なので一応核でも死なない能力？

ほんの少しだけ禁書を参考にさせてもらっていますが、

あくまで参考なので設定とか能力名とかは自分で1から考えました。

全登場人物能力表は、投稿した日までのものなので、あしからず。

……主人公義手も入りました！

R15 指定追加は、念のためです。（今更）

世界観（前書き）

これが私の初めての小説！
お気に召すかどうか……。

世界観

2012年の第三次世界大戦が起きてから21年。

人々は世界政府を作り、ようやく平和への道を歩み始めた……。

しかし、終戦直後より奇怪な噂と、それと連動して様々な事件が起きた。

人々は、所謂、神の啓示を受けた者たちがこれらを引き起こしていると噂した。

事件の中には普通の人間には到底不可能な、異形の者でしか為せない物もあつたからである。

人々は神の啓示を受けた者達を畏怖の念を込めてこう呼んだ。

能力者と……。その謂れは、人の身から外れた能力を持つことを意味する。

彼らの中にはその、人の身に余る力で新たな争いを無限に生み出す者もいた。

能力には上限が無く、その発生源も不明。

世界政府は能力による新たな戦争を恐れて手を打った。

人間との共存の姿勢を表す能力者達を中心にして集めた、対能力者用の能力者部隊。

その部隊の発案者であり、総隊長である者の能力の名前から取られた部隊名。

それが、正式名称、世界政府直属対追放者処理特殊部隊。通称

”UnInstall”

これらの仕事は能力犯罪者の駆逐と、未だ発見されていない能力者の保護である。

そして世界のあらゆる国の国際都市には、その国の国籍を持つ能力者を集めた、

高層ビルが密集した特殊地域がある。

そこに集められた、または連れてこられた能力者達は、必要があれば再教育しなおされ、

そして訓練し、将来の”Uninstall”部隊の隊員として送られる。

その場所は人々からこう呼ばれた。

『HEAVEN』と

世界観（後書き）

文才などというモノは知らない輩ですが、どうぞよろしく願います。

第一話 非、日常（前書き）

第一話、丁度良い長さがわからなくて困りますね……。。

第一話 非、日常

これは何だ？ と俺は心の中で反芻する。ここは路地裏。時代の変化についていけない犯罪者や、世間を嫌う不良達がいる場所。

今、俺の目の前にはナイフを持った大柄な男がいる。こちらにジリジリと近づいてきている。

その男の口は、狂喜のあまり融けたように横に広がり裂けている。

そう、まるで猛獣が久しぶりの獲物を見つけた時のような……。

その顔を見た瞬間、俺は恐怖に駆られた。

（やばい……こいつはマジでヤバイ！！）

少年の本能がそう告げる。

そう思った瞬間、男はこちらに走ってきた！

身の危険を更に感じた俺は

必死になって逃げようと、男に背を向けて今までに無いスピードで駆けていく。

が、相手は予想以上に素早かった。

まるで小鹿が虎に追いかけている様にジワジワと、しかしここは路地裏。途端に追いつかれてしまう。

そして肩に見たこともない変なナニカが通り、激痛が走る！

「いぎい……ぐう……」

今まで感じた事の無い痛みが少年を襲い、悲鳴もあげられないようだ。

そして男はおもむろにナイフを少年の首元に……

（俺は死ぬのか？）

少年はもう諦めかけていた。もういいと、心のどこかでそう思っていた。
そして言う。

「あの時の約束も守れずに……」

つい呟いたその言葉に疑問を抱く。

「なんだ？……約束？」

少年は思い出そうとする。記憶の底にあったそれを見つけた時、何か……。

「そうだ！　なぜ忘れてた？　あの約束が……まだ俺は……駄目だ！」

男は呟く少年を見て、気でも違ったのかと嘲笑する。

「まだ俺は死ねない！　あの約束を守るためなら、何だってすると決めたのに……！」

少年は覚悟を決めた。

もう迷わない。

もう諦めない。

絶対に、だ。

「死ねない……俺はまだ死ねない……死ぬわけにはいかない。

……その為に、お前は死んで

くれ……」

少年は叫び続けた直後、何かが吹っ切れたような雰囲気ですぐ男のもとへ歩く。

他ならぬ自分の足で。

瞬間、少年は男に飛び掛っていた。男の顔が驚きに包まれる。

男は咄嗟のことに口走る。

「まさか、テメエも……」

俺は男の言葉の意味も考えず、いや、考えようとしなかった。

俺の脳が薄々感づいていたからかもしれないが、その思考を早々に切って捨てた。

そして、未だ驚いて動けない男の隙だらけの首をつかんで……。俺は腕にありつた力の力を込めて……解き放った！！

その時、俺の頭の中で何かが弾けた……。

脳裏に瞬間的に浮かぶのは人々の恐怖、畏怖の眼差しと、こちらを優しく見てくれる紅い2つの瞳……。

そして……………

「ぎ…いやあああああああああああ！！！」

突如、悲鳴がこだまする。しかし、それは少年の悲鳴では無かった。もっと低い、年齢を積んだ者の声。

では、誰の？ 少年はただただそこに呆然と立っている。

今、自分がやった事を顧みる。

思いつきり相手に飛び掛ったあとの記憶が無い。
だが何をしてしまったかは、分かる。

前を見る。

少年の足元に何かが転がっている。いや、融けていると言った方が
良いか。

最初、少年はそれが何かわからなかった。

そこには、ただただ恐怖と驚きに目を見開いたまま、
首や腹や、体のあちこちが、文字通り融けてしまっている肉塊があ
った。

周りには銀色に輝くナイフと、
そして肉体の一部であったはずのドロドロとした肌色の泥沼と、
さらにはそのスキマから赤黒く細長い固形物が…。

「う…お…うぐ……」

途端、俺は吐きそうになった。しかしそれを必死に我慢する。

そしてもう一度惨状を見て

初めて見るその残酷な光景に

そしてそれを見てもあまり心が揺らがない自分に恐怖し

俺はその場から逃げる様に走り去った。

それを紅い瞳に見られていることも知らず……。

俺は走りながら、まだ落ち着かない脳で考える。

なぜこんな事になってしまったのか、それは今日の朝に遡る。

「ピッピッピッピッピッ……」

目覚まし時計の甲高い音が鳴る。

しかしその目覚まし時計が起こそうとする人は起きない。
だが、時間が経つと音がどんどんその音量を大きくしていく。

そしてやっと。

「うるさい……」

直後、バチンと快音が鳴ると時計は役割を果たした。
そして布団からソイツが起き上がった。

少年は眠そうに、欠伸をしながら、

「うつ…ねむ……二度寝決行？」
と呟く。

（いきなりだが俺、『御神 哀』は一応言っとくけど一人暮らしだし、

女みたいな名前だけど女じゃない。

たまにこの顔と長い髪で女と間違えられるけれど。

よし、自己紹介終了。あれ？ 誰に対してだっけ？）

理由も見つからないし、すぐめんどくさくなり、二度寝を実行に移す。

結果……は言うまでも無いが、一応言っておこう。

二度寝をしたのは

昨日決めた「明日からは遅刻しないよう目覚ましを超早く仕掛ける！」

という、いかにも浅はかな案をけしかけたのが理由である。

ちなみに目覚めた時間は……

ながいはりが4を、みじかいはりが8と9の間を彷徨っていた。

「遅刻だ……」

俺は急いでどこぞの2次元女子よろしく、食パンを啜って家を出た。

ちなみに俺は中学生なので最速移動方法は……ずばり、自転車。
中学生だがバイクが欲しいくらいだよ。

と、呟いても空しさが増すだけなので、叫んでみよう。
心の中で……。……。

（おらあああああああー！ー！）

そんなことを思いながら全速力で自転車を漕ぐ。

何分か経過……

（学校に到着。さあ問題の判定写真を見てみましょう。）

もちろん写真などないが。

ちなみに言つとHRは8時30分に始まる。今の時間は……8時40分……

俺は冷や汗をたらしながら誰にも出くわさないことを祈った。

俺は急ぎ足で教室に向かうと、途中の廊下で人に軽くぶつかった。

「おい……思いっきり遅刻だぞ御神！ 中二にもなって10分遅れか！」

げっ……今まん前にいるのは担任だ。時間にうるさいやつ……。俺は説教に付き合わされる前に謝罪の意を表明し、教室へ逃げ込んだ。

教室はもちろんHRが終わっていてザワザワしていた。俺は普通に自分の席についた。

だが誰も気にかけない。

（ヒドッ）

と思いながらも仕方のない事だと思う。

昔から思ったことは、ムカつくことだけ直ぐ相手にいたり、なにに褒め言葉とかは言えないし。

自分の心に逃げ込みがちな性格で、友達はいない。もう中2なのに女と間違えられると無言で相手を潰すし、やっぱり嫌われてるな。

そう思っていると、1限目のチャイムになる。

授業が始まって暇過ぎるし、いつも寝るけど先生方はもうこれを

諦めてらっしやる。

しかしやっぱ今日も寝た。

そしてやっと昼のチャイムが鳴り響く……。

俺は適当に学食で買ったパンを食いながら、
誰も来ない屋上で近頃のことについて考えた。

（なんか近頃物騒だよなー。なんだっけ？ あの世界が認知してる
……能力………だっけか？

あれの犯罪者がこっち側にいるって言うけど、実感わかねーな。
………あーいうのがあれば俺も変わるのかな？

まっ、馬鹿なこと考えないほうがいーよな。どうせ俺には関係無い
し。）

そう、この時少年自身も知る由が無かった。

まさか自分がそんな非日常に首を突っ込む事になろうとは……。

午後の授業が終わり、俺は早々に帰る。もちろん独り一人で。
独りとか言っな！ 空しさ100倍だから。

途中、なぜか俺を女と勘違いしてきてナンパしてきた不良^{バカ}。

ム力つくから潰したら、路地裏からワラワラと湧いてくるよ。

お仲間が、その数ざっと、12人。……575か・ん・せ・い！

（めんどくさっ）

もちろん、1人ならともかく12人とやり合う根性は俺には無い。

1対12とか、どんな羞恥プレイだよ！

「逃げるが勝ち！」

俺は、律儀にも他人を巻き込まないように、路地裏に逃げ込んだ。偉いだろ。

しばらく走りまくった。

路地裏は多少入り組んでいるので逃げ切れるだろうと鷹をくくっていたのが間違이었다。

よく考えれば相手はここ一帯をしきる不良達だ。

特に路地裏などに逃げ込めば相手の思う壺ではないか。すぐ考えつかなかった自分に苛立ちを覚える。

今、俺の前と後ろにはさっきの奴らがいる。そう、ごく丁寧に遠回りしてきた奴らと

後ろから走ってくる奴らに挟まれたのだ。

（クソッ、俺は男に犯される趣味はねえつつうの！）

そんな事を考えていると、不意に不良達の視線が空に釘付けになる。何事かと俺も空を見ると、いきなり隣のビルの屋上から、そこら辺のヘタな格闘家よりでかい大男が飛び降りてきた。凄い砂埃が舞って視界が狭まる。

（おいおい！ 何が起こった？ あいつ人間かよ！）

4階建てのビルの屋上から地面にダイブしてきた男を見てそう思った。

しかし、砂埃が無くなってくると、異変に気づいた。
音がしない。不良達が1人残らずこの場を立ち去っていた。

そして男がおもむろにこちらを向く。

その顔は……………狂喜に歪んでいた。

今、少年の目の前にはナイフを持った大柄な男がいる。こちらにジリジリと近づいてくる。

その男の口は、狂喜のあまり融けたように横に広がり裂けている。

「くくくくっくけかっ！」

そう、まるで猛獣が久しぶりの獲物を見つけた時のような……。

（やばい……こいつはマジでヤバイ！！）

少年の本能がそう告げる。

そう思った瞬間、男は少年めがけて走ってきた！

（絶対に捕まっちゃいけない！ あれはそういうモノだ！ 考えるな！）

身の危険を更に感じた少年は
必死になって逃げようと、男に背を向けて今までに無いスピードで
駆けていく。

が、相手は予想以上に素早かった。

まるで小鹿が虎に追いかけられている様にジワジワと追いつかれてしまう。

そして肩に見たこともない変なナニカが少年の肩に通った。

「いぎい……ぐう………」

今まで感じた事の無い痛みが少年を襲い、悲鳴もあげられないようだ。

そして男はおもむろにナイフを少年の首元に……

（俺は死ぬのか？）

少年はもう諦めかけていた。もういいと、心のどこかでそう思っていた。

そして言う。

「あの時の約束も守れずに……」

「なんだ？……約束？」

少年は思い出そうとする。記憶の底にあったそれを見つけた時、何か……。

「そうだ！　なぜ忘れてた？　あの約束が……まだ俺は……駄目だ！」

男は呟く少年を見て、気でも違ったのかと嘲笑する。

「まだ俺は死ねない！ あの約束を守るためなら、何だってすると決めたのに……………！」

「死ねない…………俺はまだ死ねない…………死ぬわけにはいかない。
…………その為に、お前は死んでくれ…………」

少年は叫び続けた直後、何かが吹っ切れたような雰囲気ですと男のもとへ歩く。

他ならぬ自分の足で。

瞬間、少年は男に飛び掛っていた。男の顔が驚きに包まれる。男は咄嗟のことに口走る。

「まさか、テメエも追放……………」

俺は腕にありつた力の力を込めて…………解き放った！！

その時、俺の頭の中で何かが弾けた……………。

脳裏に瞬間的に浮かぶのは人々の恐怖、畏怖の眼差しと、こちらを優しく見てくれる紅い2つの瞳……………。

「ぎ…………いやあああああああああああああああ…………！！」

突如、悲鳴がこだまする。しかし、それは少年の悲鳴では無かった。

もつと低い、年齢を積んだ者の声。

では、誰の？ 少年はただただそこに呆然と立っている。

少年の足元に何かが転がっている。いや、融けていると言った方が
良いか。

最初、少年はそれが何かわからなかった。

そこには、ただただ恐怖と驚きに目を見開いたまま、
首や腹や、体のあちこちが、文字通り融けてしまっている肉塊があ
った。

周りには銀色に輝くナイフと、
そして肉体の一部であったはずのドロドロとした肌色の泥沼と、
さらにはそのスキマから赤黒く細長い固形物が…。

少年はその場から逃げる様に走り去った。

所変わって、ここは屋上。

御神^{アイツ} 哀のやった事が全部見えてる場所。

私は携帯をとって総隊長に報告する。

「見つけました。久々の保護対象です。」

総隊長と呼ばれた電話の相手は言う。

「？ 紫、たのしそうだね。何かあったの？」

紫と呼ばれた少女は答える。

「いえ、何も。それでは、一時帰還します。」

「ああ、分かった。」

私は携帯をしまう。

今、私は笑っているのだろう。だって……

「久しぶりだね……アイ。」

第一話 非、日常（後書き）

更新は不定期ですが、なるべく早くしたいと思います。

第二話 引越し（前書き）

第二話投稿。

また滅茶苦茶だし一話に比べて半端なく短い。

第二話 引越し

俺は走っていた。

必死になって走っていた。

ネオンが照らす街中をずっと走った。

……どこにだつて？ 家に決まってるだろ！

何でだろう……。

人を殺したのに、初めて殺してしまったのに
何で何も感じないんだ！ どうしたんだよ俺……。

（俺は……何をした？ あれは何だったんだ？）

俺は、さっき見た光景が未だにこの世のモノとは思えない。

それはあまりにも残虐で、俺だつて信じたくない。

あれは何だったのか、本当に俺がやったのかと考えていたが、
その思考は最後まで続かなかった。

なぜなら……

家に向かって走る俺の前、視線の先に

警察とも、はたまた軍隊ともとれない怪しげな制服……

もとい軍服を着た、奴等^{ヤンラ}がいた。

（なんだ？ あんなの見たことねーぞ）

そう思っていると、突然奴等^{ヤツラ}が一斉に動き出した。
その統制のとれた無駄^{バカ}の無い動き。
先程の不良どもとは比べ物にならない。

そして気付くと、いつの間にか俺は取り囲まれていた。
本当に軍隊程の統率力と、警察程の機動力がある奴等だ。

俺を取り囲んだ奴等の一角が割れ、いかにもリーダーという
雰囲気^{バカ}を纏った人が前にでてきた。

「あなたが保護^{セイバー}対象？」

「……………は？」

ちょっと驚きすぎで変な声だしちまった。

勿論『保護^{セイバー}対象』という言葉の意味も分からないが、何より
驚いたのが

（女だったんだ…………）

ということ。

どっかの特殊部隊のマスクをしてたから分からなかった。

「…………何か失礼な事考えてるでしょ。」

「いっ…………いえいえ何も！」

一瞬でも放たれたとす黒い殺気に当てられ、背筋が寒くなる。

（何こいつ！ 勘良過ぎ！）

（つーかりーダー」男だと思ってたよ俺！ なんて事を
してしまったんだ！ よく見れば分かった事なのに！
俺のバカー！）

何か自暴自棄になりそうに悶絶していた……。

と思っていると視界の端に、彼女らの制服（軍服？）の上腕部分に
あるマークを見つけた。

マークは、黒い羽の堕天使の片方の羽が風化しつつあるという
なんか何処かで見たようなものだった。

（なんだっけ？）

と記憶の中を探る。そして、見つけた。

そう、あのマークは、全世界で知らない者の居ない”UnInst
all”部隊のものだった。

……マジで？

「嘘だーーーーー！！！！！！！！！！」

「いきなり何？ 気でもおかしくなっちゃった？」

彼女の言うことを無視して問う。

「もも、もしかすて、あなたたちは……」

ちよつと噤んじまった。

すると予想通りの返答が返ってくる。

「そうよ。お察しの通り私たちは、かの有名な”UnInstall
1”部隊の人間よ」

「じゃあ、あなたは……」

「自己紹介がまだだったわね。私は、”UnInstall”支援
2 隊長、佐屋 ^{ゆかり} 紫よ。
久しぶりねアイ。」

そう言つて、マスクをとる。

その下にあつた素顔は……一言で言うならば、美人だった。
街を歩けば10人に10人が振り向きそうな容姿。
少しの間、見とれていた。

（つて、なんか違う！　なんだ久しぶりって？）

「あの、俺に会ったことあるんですか？」

俺がそう言つと、彼女は「えっ……そう、やっぱり」とか
言つて悲しい顔をしたがやはり俺には検討がつかない。

何か空気が微妙に重くなってきたので、この場面を
切り抜けようと真面目になつて本題に入る。

「それで、その支援隊長サンが何の用ですか？」

「紫でいいわ。何が目的かというと、端的に言うわ。

あなた、御神 哀は明日から『HEAVEN』で働いてもらいます。言い訳はできないわよ。あなたが『追放者』としての能力に目覚めたのは

私が目撃しているわ」

俺は一気に捲し立てられて、もう逃げ道が無いことを悟った。もう、諦めよう。

「分かり……ました。俺は元々こちらには何の未練もありませんし新しい自分を受け入れることにします」

「へえ、もっと抵抗があると思っていたのに意外と順応性が高いのね」

「数少ない取り柄のひとつですから」

「分かったわ。明日、朝8時にそっちに迎えに行くから。それと、元の中学校の退学手続きもしとくから大丈夫よ」

「ありがとうございます」

そして、紫さんは部下2人を俺の家までの護衛としてつけて、夜の闇にまぎれて行った。

その後、家について2人に礼をして、家の片付けを始めた。

なぜか不本意に承諾したはずなのに、俺の心はまるで
旅行の前日のように嬉しく感じていた。

第二話 引越し（後書き）

今回も駄文でしたが、これから私は進化する！……はず。

登場人物紹介（能力は秘密）（前書き）

ここで能力を出すより後々出すほうがいいと思うんで
……自己紹介なのにな。

登場人物紹介（能力は秘密）

哀、紫の紹介。

主人公、御神^{ミカミ} 哀^{アイ}

身長171cm 体重55kg

面倒くさがり屋で内心いろいろ文句言ってる。

その長髪と端正な顔と名前で、よく女と間違えられる。

『HEAVEN』の学校では、能力の秘匿性が最上級なので能力の一部

を使って違う能力に見せる。

武器は無い。いつも素手なので、初見の相手にはよく馬鹿にされる。

能力暴走時は残虐な思考に支配される。

その能力暴走で、ある能力犯罪者を殺す。これによって、

『HEAVEN』行きとなり、いきなり部隊に配属される。

サヤ
ユカリ
佐屋 紫

身長170cm 体重「言ったら殺す」

ちよつとクールだが、優しいところも？（哀限定）

能力を使って相手を苦しませるのが好きなS。

”UnInstall”部隊の、支援2隊隊長だが、主人公が

中学に入るときに、お目付け役としてちゃっかり入学。実は同じ年。能力は垂れ流しなので、制御するために常時手袋着用。

能力は、生まれた時から持っていて、幼いころから『HEAVEN』にいる。

小さい頃の哀を知っているような口ぶりだが……？

登場人物紹介（能力は秘密）（後書き）

能力の内容は言っていないのにその

内容をほのめかす。まさに生殺し状態。

……すみません。次かその次で能力でるはずですから。

第三話 俺の能力（前書き）

また滅茶苦茶に……。

第三話 俺の能力

今は朝。さすがに今回はかりは寝坊もできない。
迎えが来るまであと少し。

「もうこの日常とはさよならか……」

いけね、何か急に感傷に浸ってきた。

嗚呼、脳裏にある思い出……

女と間違えられて相手を潰した日。

女と間違われて不良に追いかけられた日。
バカ

そのせいで皆から怖がられた日々。

……碌ろくな思い出がねえ……。

あれ？ 目から何かが出てくるよ。

いや、忘れる！ 明日からの新たな日々を目指して！

「ファイトーオオーーー！」

「……お取り込み中失礼……」

「うおっ、いつの間に！」

叫んでいて気付かなかったが、いつの間にか正面に
紫さんがいた。

「あゝいつから？」

「もうこの日常とは、のどこから」

「最初っからじゃないすか！

……それでもう行けるんですか？」

恥ずかしかったから話を逸らしとこ。

「ええ。これから『HEAVEN』の日本支部に向かいます」

「支部？ ああそうか、本部はアメリカだっけ……」

そう、『HEAVEN』の始まりはアメリカだ。そこから派生して全世界の『HEAVEN』があるというわけだ。ちなみに、本部はアメリカなのに

初めて発見された人類に協力する能力者が日本人らしい。

だから、世界のどこに行っても部隊名は”UnInstal”だ。

「じゃあ行きましょうか」

「はい」

俺と紫さんが家を出ると、一台のリムジンが止まっていた。

「……あの、これで行くんですか？」

すると紫さんがさも当然のように、

「当たり前じゃない。『^{セイバー}保護対象を本部に送る時はあくまで丁重に』が隊長の指示なもの」

「は……はぁ……………」

俺は黙ってリムジンに乗る。内装すげえ！
そう思っていると車が出発した。

「あの、隊長って言いましたよね？」

「ええ、そうよ、私の隊長、つまり総隊長のことね」

そこで俺は疑問を持った。

「あの、総隊長ってどんな人なんですか？」

「……………」

直後、沈黙が流れた。

（やばっ！俺なんか悪いこと言ったか？）

「……………クスッ」

「え？」

（何で？何で笑われてるの？）

「総隊長を知らない人なんて始めて知ったわ。
……………いいわ、説明してあげる。」

総隊長は、かの有名な能力者。
彼が初の人類に協力した能力者。全世界の”UnInstall”
部隊を束ねる存在……」

（まさかまさか！ この流れはまさか！）

「そう、あの伝説の能力者。『△ガイゼロ無骸 零』よ。
その能力、『アンインストール完全削除』から部隊名が取られているわ」

「なに—————!」

「わっ、やっぱり驚いた？」

「そりゃ驚きますよ……やっぱり強いんですか？」

「まあ、私の能力は攻撃に向いてないとは言え、勝負にならないわね」

「？ 紫さんの能力って？」

「それは後のお楽しみ。あと、”さん”はつけなくていいわよ。
同年だし」

「はあ—————!？」

それで、話が終わって、俺は驚き疲れたから寝た。

「……きて。……て」

うん？ 誰だ？ この声は確か…

「起きて！」

「うわぁ！ 紫！ そんな大きな声出さなくても！」

「だってあなたが起きなかったから……」

まあ、それはともかく着いたわよ！」

俺は車を降りた。

そこに広がっていたのは、まさしく天国だった。

俺がもと居た街とは比べ物にならないほど

清潔感のある町並み。綺麗な整備されてヒビ一つ入っていない道路。そして楽しそうに歩く制服を着た生徒達。

「すっげえ……」

「そう？ まあ外と比べたら良いところだけだね。

それより、早く行きましょ。まずはあなたがどんな能力が調べなきゃいけないし」

「ああ……分かった」

俺は町並みに目を奪われながらも歩き出した。

10分ほど歩くと、部隊の本部らしき場所に着いた。

「ここが”Uninstall”部隊日本支部よ！

早速だけど、この街で暮らすには、まず能力を測るわ。

ランク付けがあつて、上から

S>A>B>C>D>E>F

となるわ」

「ランクが高いと何かあるのか？」

「高ランク保持者ほど、生活支援金が沢山貰えるわ。

支援金は、最低のFランク保持者でも最低限生活できる額よ。

つまり、暮らしを楽しみたかったら、ランク上げをがんばるのね」

「よし、俺も頑張るぞ！」

「ふふ、その息よ」

話しながら歩いていると、新住民登録係という札が目にとまった。

「ここでまずは能力を調べさせてもらうわ」

「ああ」

「さあ、こっちよ」

部屋に入ると、受け付けと、奥にまた扉があった。

「ちょっと登録したいんだけど」

紫が受け付けのお姉さんに言う。

「はい。後ろの方が御神 哀様ですね。
それでは、奥の部屋へどうぞ」

俺と紫は奥の部屋に入った。

そこは、100m x 100mぐらいあるだっ広い空間だった。
すると放送が聞こえる。

『では、目の前にある岩に触れて能力を使ってみてください』

「ん？ いつの間にか岩が！」

「ああ、これは転送システムね。空間干渉系の能力者のメカニズムを利用したものよ。

そんなことは良いから、能力使ってみて。

岩にふれて、こう、なんと言つか心の中の第二の目を開くような感じ？」

「ああ、分かった。やってみる」

俺は紫のアドバイス通りに、岩に触れて集中してみる。
すると蒼い光が岩全体を覆う。

その瞬間、岩は、その、なんと言つか……………

岩が粉々になり、砂になった……。

その時、紫と俺は呟いた。

「「嘘……」」

第四話 俺の能力……の正体（前書き）

なんか短いすねやっぱ。
やっと能力が出てきます。

第四話 俺の能力……の正体

「「嘘……………」」

しばらく部屋内に沈黙が流れた。

放送を流していた受付のお姉さんにもこちらは見えているのだろう。向こう側からは何も聞こえない。

「「……………」」

最初に沈黙を破ったのは、紫だった。

「ちよつと、あなた何をやったの？」

「いや、だから、その、紫にアドバイスされたように集中して能力を使おうとしたただけけど……………」

いや、俺は本当にそれしかしていないのだが……………
はつきりいつて俺は無自覚だ。俺は無実だ！

「……………まあ、まずはこの岩をどうするかだけだ。
知ってる？この岩って実は能力測定用に、極めて人工的な素材で強力にできてるの。
結構なお値段だと思うわよ。何しろ『HEAVEN』内だけの技術だからね」

「……………」

その言葉を聞いた瞬間、俺の精神はフリーズした。

「？ おおーい！ 大丈夫？」

紫は話しかけるが反応が薄い。

「ははははは……弁償……」

そんなことを考えている俺に紫から救いの手が！

「あのー、アイ？ もしかしたら、本当にもしかしたらだけど
あなたの能力で粉々になったのなら、また元に戻せるんじゃないの
？」

「はあっ！ その手があつたっ！」

「えっ。ちょっと、まだできると決まっただけじゃ……」

俺は紫が何か言っているのを気にせず、元は岩だったものに手で触れ、集中した。

その瞬間、また蒼い光が包み込み、砂が輝く。

そして光が最高潮に達したとき、それは起こった。

「「は……？」」

また俺と紫が同時に呟く。受付のお姉さんはもう何かを諦めているようだ。

そこには……

液体があつた。

今の一言では何も分からないだろう。

詳しく説明すると、俺がさっきまで触れていた砂が

茶褐色の液体になっている。熱してもいないのに、まるで無理矢理物質同士の結合を引き剥がしたような曖昧な液体。いや、粘体だろうか？

ともかく、言うならば固体と液体の真ん中ぐらいにある物質ということ。

……………多分。

「あなた……………やっちゃったわね……………」

紫に死の宣告をされたも同然の言葉を言われた。

その言葉に俺が悶絶して呻き声をあげていると、部屋の隅から誰かの言葉が聞こえた。

「ほう。これはすごいじゃないか。私でも始めて見る能力だ」

その声に紫は反応して、後ろに振り向く。

俺は紫の視線を追ってその方向を見ると、一人の男が立っていた。

（えっ、いつの間に？）

と俺が考えていると、紫が言った。

「えっ、あ、は？ あっ総隊長？」

「は……え……総隊長さん……？！」

俺がつい大声を上げていると向こうから挨拶してきた。

「やあ、はじめまして。私が”Uninstall”部隊総隊長の
無骸 零だ。

新入りくん。君が御神 哀君だね？」

「あっ……はい」

「あの、総隊長、どうして此处に？」

「ああ、仕事も一段落ついたので、久しぶりの登録者に興味を持っ
たんだよ」

「ん？ 俺にですか？」

俺がそう問うと、総隊長さんは、ああ、と言って話を続ける。

「君の能力を見せてもらったよ。さっきも言ったが、その能力は
私でさえ見たことがない。」

そこのだが……紫くん。君の能力の使用を許可する」

紫の能力？ と俺が疑問に思っている

紫が少し逡巡した顔を見せたが、こちらに来た。

「あなたの能力は未知数よ。機械が測定できない程に。

能力の正体が分からないと、とても危険なので最後の手段として私の能力、『精神喰人』^{マインドイーター}をつかわせてもらいます」

「『^{マインドイーター}精神喰人』？」

俺がちよつと物騒な能力名に身震いしていると、

「大丈夫よ。ちよつとあなたの精神の奥深くまで行って能力の情報を引き出すから。

たとえ心がそれを認知していなくても、脳にはちゃんと情報が記録されてるの」

紫が説明してくれた。俺の能力がどういったものか分からない今、紫の能力が必要だった。俺は決心した。

「頼むよ、紫」

「ええ、任せておいて。ちよつと気持ちは良くないかもしれないから、我慢してね。

プライバシーの問題もあるし、なるべく他の情報は覗かないようにするから」

「じゃあ、よろしく」

そう言うと、紫がいつも着けている手袋をはずす。
その手は紫の綺麗な肌よりも、もっと白いように見えた。
そしてその手が俺の腕に触れる……。

その瞬間、俺は何か体の中を這い回られている感覚を覚えた。
しかし紫の言っていた通り我慢する。

1分ぐらいだろうか？紫がおもむろに手を離す。
そうした途端、体の変化は収まる。
だが、紫は呆然と立ち尽くしている。

「おい？ 紫？ おーい」

と紫に声をかけるとやっと戻ってきた。
それをずっと見ていた総隊長が口を開く。

「紫くん。報告を」

「あ……はい。」

御神 哀の能力は、判定Sランク。その内訳

・攻撃範囲C ・攻撃威力SSS+ ・攻撃射程E です。

能力の内容は……

この世に存在する全ての物質を粒子単位で自由自在に操作、変換できる能力。

（自分の皮膚が、身に着けている物に触れている物質限定）

……………ありえない」

それを聞いた総隊長さんと俺が沈黙する。

その空気を破るように放送の向こう側から驚き声が響き渡る。

『なんですってーーーー！！！！』

どうやら俺の能力はとんでもないシロモノらしい……………。

すると総隊長さんが言った。

「御神くん、紫くん、そして君もこっちについて来なさい」

その中には受付のお姉さんも含まれていた。

俺たちと、緊張で口が開かないといった感じのお姉さんは総隊長について行って、第3会議室と書かれている所に着いた。

隊長が中に入っていく、俺たちが後についていく。

そして総隊長さんがドアを閉め、話し始める。

「本人は勿論のこと、紫、それに君もこのことを知ってしまった」

そこで俺は口を開く。

「何か問題が？」

「通常、判定内訳は確かに最高SSS+だが、それを出したことなど歴史上一度も無いことだ。このようなケースの場合、まずは機械の故障を

疑うが、今回は『精神喰人』^{マインドイーター}で調べたため結果は明らかだ。

そして、その能力が本物だったら、それは『HEAVEN』の最高機密に指定される。

そういう規則があるんだ。しかし、それを紫や一般人に知れてしまった。

よって、紫はしょうがないが、その君にはこの事を忘れてもらう
そう総隊長さんが言った瞬間にお姉さんは倒れた。

「えっ、総隊長さん、何を……」

「いや大丈夫。御神くんが来たときから今までの記憶を消しておいただけだ。

紫くん、その子を受付に座らせてきて。今は誰もいないから」

「はい……よつと」

紫がお姉さんを抱えて外へ出て行った。

「さてと、次は君だが、先程も言ったように君の能力は最高機密だ。通常、君には学校に行ってもらった後に将来、部隊にはいるものだし、しかし君の能力は危険だし、最高機密だ。ここに特例として現時点で部隊に

入る事にしてくれ。

拒否権はない。その能力の危険性は君にも分かるはずだ」

俺は言葉に詰まった。総隊長さんの言うことには一理あったからだ。

俺はしょうがないと割り切ってその提案を受け入れることにした。
……元々拒否権などないのだが。

「……部隊に入るということは、部隊全員に能力の正体が
知れ渡るのですか？ それと、学校はどうすれば……？」

「まず、最高機密なので、能力の正体は最低でも大隊の隊長までに
しか

知らされないから安心してくれ。

それと学校だが、その歳で行ってないということも不自然なので
私としては行ってもらって、任務がある場合にはこちらにきてくれ
ればいい」

「……少し大変そうですが、こちらの学校にも興味はあるので
学校には行ってみようと思います。でも、学校では能力の授業の時は
どうすればいいのですか？」

「それは大丈夫だ。君は、測定の時こそ不安定だったが今では
能力は本能のように使えるだろう。能力とは人に使い方を
教えてもらうものではないからな。

学校では、君のその応用が利く能力を使って別の能力として
隠し通してくれないか？」

ちよつと難しそうだけど頑張ってみるか……。

「はい、分かりました。これからよろしく願います」

そして俺は総隊長さんに言われて指定されたマンションに住むこと
になった。

学校は明日から転入生としていくらしい。

第四話 俺の能力……の正体（後書き）

なんか展開はやいですか？

それとも遅い？

次から学校に転入します。

主人公は何回女に間違われるでしょうか？

第五話 能力研究……BY家（前書き）

毎日更新！

これからもそうでありたい！

第五話 能力研究……BY家

俺は総隊長さんに教えられた住所に向かう。
もう夕方だ。遠くでカラスの鳴き声が聞こえる……。

「はー！ー疲れたー！ー」

いや、本当に疲れたよ？

だってさっきまで居たのは一応じゃなくても”UnInstall
”部隊の総隊長

だったし、俺はそこまで無神経じゃないよ？

けどマンションってどんな所かなー？

一人暮らしはもう慣れてるけど、今まで一軒家だったから。

はっ！もしかしたらさっきの能力判定でSランクって出たから
高級マンションとか？ありえるかも！

生活支援金もたっぷり出るって言っし、実力至上主義最高！

とか色々考えながら街中の道路を歩いていた。

そろそろ空が薄暗くなってきたな。もうすぐか。

教えられた住所までもうすぐ着くという所で、ビルとビルの間の
路地裏から何か声が聞こえてきた。

「いやっ！ちょっとやめてよ！」

（ん？何か女の子の声が……なんかヤバそうだな。
よし、ちよっくら人助けに行きましょう！）

俺の主義。女の子は大切に。

俺がちよつと駆け足で路地裏に入ると視界に2人の男と1人の女の子がいた。

どうやらお約束らしいな……。

男は無理矢理女の子を夜の街へ連れて行くとしている。

「おい、お前らその子を離せよ」

俺が男達の背後から低い声で脅すと、男達は

一瞬ビクツとするが、こっちを見るとすぐその下卑た笑みをこぼして、

「おいおい、まあたいい女見つけちゃったよ!」

とか抜かしやがる!

怒りゲージ20から55へ上昇……

するともう一人が、

「こいつも連れて行きましようよ!」

とか言っちゃってるよ。

完全に俺を女だと思ってるらしいな。

怒りゲージ55から120オーバー!

……..
ぷちっ

もう許せんよ?当たり前じゃん。

男を女と間違える者には死を……..
……..

「ヲイ、テメエらわオルエをくわんゼンニオコラせたらしいな……」

みんなー！ 虐殺TIME始まるよ

10秒経過……

「ふうっ」

今俺の目の前にはさっきのバカどもがぼろ雑巾になってる。

俺が潰しといた。言っとくけど俺は喧嘩強いよ？

けどこっちに来てても女と間違われるのはかわんねーな。

原因っぽい髪切ろうかな……。

今の俺は男なのに髪が肩を普通に越えてる長さなのだ。それも絶対原因の一つだ。

そんな事を考えているといきなり後ろから話しかけられる。

「あのっ、あ、ありがとうございました……………」

さっき絡まれてた女の子だ。っーか美少女だな。

その短い茶髪は、紫の黒くて長い髪とは違う綺麗さがあるし、顔も間違いなく美少女と称される部類だ。

俺がそう思っていた次の瞬間、

「お姉さん！」

その瞬間、俺の周りの空気が止まった。
俺は全力で叫んだ。

「お、れ、は、女じゃ、ねえーーーー！！！！！！！」

「えっ、あの、その、すみませんでした」

女の子は泣きそうになっている。
それを見て、我に返った。

「……すまん。怒鳴って悪かったな」

俺は恥ずかしさで胸がいつぱいなので、さっさと撤収しよう。

「じゃ！　そういう事で！　本当にごめん！」

と言って走る！

女の子が何か言おうとしているのが視界の端に映ったが、走る。
俺はマジで逃げた。

気付くと、やけに大きいマンションの所にきた。

「ここが俺の住むところか。いいところじゃねーか！」

無理にでもさっきの事を忘れよう。

部屋に向かう。鍵はすでに渡されている。
このマンションは全部20階建てのようだ。

「えーと、俺の部屋は……最上階の部屋か」

通常一階ずつには10個ほど部屋が並んでいて、どれもすごい広いのだが

最上階は部屋が3つしかない。その分どこかの5ツ星ホテルのスイートのような部屋だ。

なんでも、部隊に入っていて、さらにランクSとなった俺の所持金は凄いことになってるらしい。

部隊の給料は何もない月でも、毎月、7桁はあるし、Sランクの生活支援金がそれと同等の額なのだ。つーかもう”支援”じゃない……。

部屋に入ってみると（鍵はカードキー＋指紋認証。指紋認証は初めて部屋入るときに登録した）

それはそれは……なんかもう言葉では言い表せないものだった。いい意味で。

話によれば7部屋＋2L＋D＋Kらしい。ちなみに洋室。必要最低限の家具はもうあった。

メインリビングのでかいテーブルの上には生活に必要な、この街だけの

住居人証明書と能力証明書。それと真っ黒なクレジットカードがあった。

「……こんな大事な物机の上に置いとくなよ」

そんな独り言を呟きながら持ってきた荷物……とは言っても、気に入ってる服とか

その他は下着とかただけだけど、をもつてきた。

俺は寝室へ向かった。そこには……キングサイズのベッドがあった。俺はその大きさに驚かされながらも荷物をどっかに投げてベッドに横になる。

（あゝあ。やっと終わったあ。明日から学校とか言ってたけど制服は自由らしい。

最初の頃出回った制服があったらしいけど俺は私服でいいや。）

そして俺は寝ようとしたが、大事な事を忘れていた。

（やべえ……学校で使う能力何にしよう……）

ちなみに言うと、俺の能力は自分でも分かるとおり凄く応用が利く。一回使ったせいなのか、紫が言った通りもう自分の体の一部として使える。

しかし、何でも操れる為、応用が利きすぎて、なににしようか迷っている。

俺の能力の欠点は、自分に触れていなければ使えないというもの。

確か同じ物質なら間接でも遠くに使えるらしい。

たとえば。

俺 鉄 鉄その2を操れる……みたいな。

それで思い当たった。

同じ物質なら間接的でも大丈夫で、それでいてこの地球のどこにでもある物質。

空気だ。

空気を操ることにしよう。そうすれば能力を隠しながらも

能力の大半を使うことになる。結構強そうだし。

俺はその考えに思い当たると、早速空気を操ろうと空中に手を伸ばす。

その瞬間、寝室の中の空気の流れが俺の手を中心に回る。

それを肌で感じて、俺は満足した。

意外と簡単だな。

総隊長の話によれば、俺は1tまでの質量なら操れるらしい。

……空気1tって……なんてチート

よし、やっぱちょっと制限して100kgまでにしよう。

あんま目立ちたくないし。

俺は目覚ましをかけ、明日に期待を膨らませながら、寝間着に着替えて寝た。

第五話 能力研究……B Y家（後書き）

ちょっと短いですね。はい
わかってますよ。

ついにヒロインが出揃いましたよ。

まあ、後の方は次に出てくると思うんで。（多分）

第六話 学校へ！……の前に。（前書き）

ちよつと遅れましたね。

第六話 学校へ！……の前に。

朝……うん、いい天気だ。空は雲ひとつ無い。

え？ 寝坊しないのかって……こんな大事な日は寝坊しないから、さすがに。

けど、朝早く起きちゃったな………暇だな………。

あっそうだ！ ちょっと能力の訓練しよう。

……だって学校で笑われんの嫌じゃん？

俺はいつもの服（全身やけに黒が多い）に着替えると、朝飯を作ることにした。

今日はパンに、目玉焼きでいいや……。

俺はさつさと料理すると、さつさとパンをほおばって、目玉焼きを食って

あらかじめ用意していた荷物を取り、家を出る。

まだ朝は早い。

昨日、この街について質問していたら、街中で許可なく能力を使うのは

厳罰ものらしい。

許可を特にとらなくてもいい場所は学校か、部隊の演習場らしい。

そこで俺は部隊の演習場に行くことにした。

俺はエレベーターで1階に行き、自転車置き場で自転車に乗った。

……なんで自転車があるのかは、俺が紫に連れて行かれる前に、これだけは持つて行きたいと頼んだら、俺とは別ルートでマンションに来たらしい。

ちなみに、『HEAVEN』の中は、外よりも科学技術が発展しているらしい。

だが、自転車や車、その他日用品はあまり変わらないそうだ。

俺は自転車をこいで部隊演習場に行った。

10分位ごと、昨日行った日本支部の隣にあるデカイ建物が目にはいった。

中はトレーニングの為だけに色々機材が置いてあるらしい。

それと地下には能力訓練専用部屋がある。

能力判定の時の100m×100mぐらいのデカイ部屋だ。

なんでもその部屋の壁も同じようにあの岩からできているらしい。

……俺の能力じゃ練習できねえじゃん！

はあ、しょうがないから空気を操るだけにしとくか……………。

そう考えながら、駐車場に入っていく。

建物に入ると（もう自由に部隊関係の建物は入ってもいいらしい）

受付にいる人に

黒いカードを見せる。

この黒いカードは、昨日見たときはクレジットカードだと思ったがそれ以外にも部隊の証明証となるらしい。

このことは一般人には知られていない。

俺はエレベーターで地下2階のボタンを押す。

エレベーターが降りる感触がする。

そしてすぐチーンと音が鳴ってドアが開く。

俺は降りて目の前にある部屋のドアを開ける。

その瞬間3人程の視線がこっちを向いた。

どうやら先客がいたらしい。

しかし俺はそれに構うことなく、部屋の奥に行って荷物を壁際に投げて訓練を始めようとする。

しかし、いきなり後ろから声が聞こえる。

「おい、アイ」

ん？ この声は……

「なんだ紫か」

紫がいた。その後ろには2人の男がいる。

一方は熱血漢のような筋肉質な男で、もう一方がちょっと痩せてる紫や俺より

若い少年。

「なんだとはなんだ。アイも訓練か？」

「ああ、ちょっと朝早く起き過ぎたからな……
それよりお前どうしたんだ？ 学校は？」

「それを言うならアイも同じだろう？」

私は毎朝ここで訓練して基礎体力をつけてるんだ。
あっそうだ。後ろの2人を紹介しよう」

すると後ろの2人がこちらへ来て、自己紹介してくる。

まずは筋肉質な男。いや漢？

「俺は突撃1隊隊長の飛騨^{ヒタネンカ} 燃故だ！
能力は『^{バーニングロード}直線狂走』だ！

お前さんが紫の話してた新入りか！
俺の事は飛驒さんとも呼んでくれ！」

次に痩せ気味な少年。

「僕は支援2隊隊員の佐屋^{サヤアキラ} 明です。
能力は『^{シンキングストップ}夢想破壊』です

僕は一応姉さん達の中で一番年下ですがよろしくお願いします。
僕のことは明でいいです」

「俺は御神 哀。

能力は……まだ名前考えてない。
普通に呼べばいい。以上」

ちなみにAランク以上だと自分で能力名を命名するんだそうだと
ところで……さっきからなにか引つかかるような……あっ！

「今、姉さんって……」

すると明君はこう言った。

「ええ、あなたの言う紫さんは僕の姉です」

「そうなのか……」

なるほど。紫には弟がいたのか……。
そう思っていると、紫がいきなりこんなことを言い出した。

「アイ、もうすぐで訓練終わるけど、一回模擬線やらない？」

「……いいよ。俺は元々能力を練習するために来たんだし」

それに一回他の人と闘ってみたかったし。

ということで俺たちは能力を使った模擬戦をやることにした。
なに？ 危なくないかって？

大丈夫だよ。俺は空気を操る練習をするだけだし、それに向こうには
3人もいるし……。

「って、ちょっと何でそっちに3人もいんの？
普通2対2でしょ？」

すると紫が、

「私たちの能力はどれもあんまり戦闘には向いてないのよ。
どっちかって言うとな能力を併用したCQCってところかしら？」

「なるほど、だけど俺は能力を使わせてもらっぜ」

「当たり前よ。あなた、まだ近接戦闘できないでしょ。
せいぜい路地裏の喧嘩ぐらいだし」

ぐっ、なんかむかつくけど言い返せない。

「さ、とつとと始めようぜ」

と飛騨さんが言ってきたので俺達は戦闘態勢に入る。

「先攻はお前にくれてやるよ」

「いいんですか？ そんな事言って」

と俺は挑発しながらこの部屋内の空気を掌握していく。
途端、部屋内の空気の流れの向きや速さが大量の情報として
頭に流れ込んでくる。

……これは、ちょっとしんどいな。

と考えつつも情報を整理し、能力を使う。

紫の言った、脳が能力の使い方を覚えてると言ったのはこのことだろうか？

俺は先攻をくれてやると言った飛驒さんめがけて、まずは
風速20mもの突風をくれてやる。

ちなみに風速20mは普通の台風ほどの風だ。

まあ、けど一応隊長クラスだし、問題ないだろ。

と黙っていて飛驒さんの方に目を向けると、そこには
飛驒さんは居なかった。消えたのだ。

何も無いところに突風が吹き、そのすぐ横にいる佐屋姉弟は風の余
波で飛ばされないようにしている。

俺は視線を真正面に戻すと、そこには、
飛驒さんがいた。

遠いとかじゃなく、すぐ目と鼻の先に。

飛驒さんは俺が呆然としている隙に

俺の鳩尾めがけてパンチを繰り出してきた。

俺はそれをとっさに手で防御するが、

相手は結構な大男だ。

力が足りず吹き飛ばされてしまう。

俺は受身を取り、体勢を戻す。

が、しかし、地面から顔を上げたその瞬間。
そこには、また真正面の目と鼻の先に、飛驒さんがいた。

俺はそのことにまたも驚き、防御の手を緩めてしまうが、攻撃せずに後ろへステップでひいた。

俺がなぜ？と考えるより早くその答えが帰ってきた。

俺は本能でその場から横へ飛んだ。

その瞬間、そこをパンチが通り過ぎる。

後ろを見ると、佐屋姉弟がいて、次々に攻撃を仕掛けてくる。

俺は紫のキックをかわす。

しかし、それに油断した俺は明に手のひらで触れられる。

そして、次の瞬間、俺は倒れた。

なにが起こったのか分からない。

俺は起きようともがくが、できない。

いや、分からないのだ。

その他は全て思考は普通なのに、まるで脳にある

情報の中から『立つ、バランスをとる』という行為のやりかただけ切り取られたような、そんな感覚。

すると明の声が聞こえる。

「僕の能力は『^{シンキングストップ}夢想破壊』。それでも一応Aランクですから。

能力の効果は、この手のひらで触れた対象の『思考』を10秒だけ抜き取る能力です。

もうそろそろ立ち上がれますよ」

そう言われたので立とうとしたら、あっさりと立てた。

「……すげえな。俺の完敗だよ」

俺は完璧に3人の連携にしてやられた。

能力などの問題ではない、単純に力量の差だった。
しかし、一つ腑に落ちない事がある。

「でも、飛騨さんの能力はなんだったんだ？」

そうすると飛騨さんが答えてくれた。

「あれが俺の能力の『バーニンググロウド直線狂走』だ。
どういふものは、ちよつと予想してみろ」

そういわれても……いきなり目の前に来たと思ったらパンチで
吹っ飛ばされて、そしたらまた目の前に居るし。
あれはなんだろう？

そう考えるが、俺はやはり分からない。

「レポート空間移動系能力ですか？」

すると飛騨さんは首を横に振る。

「なんで俺の能力を初見した奴はみんなそう言うのかね……。
俺の能力をあん『逃げ』の能力と一緒にするなよ」

しかし空間移動系を『逃げ』とは、なんか飛騨さんらしい。

「俺の能力はな、自分のいる位置から直線上なら
最高の速度の走りができるってやつだよ。さっきのは時速80km
な」

滅茶苦茶な能力ばかりだな～と思いつつ紫と学校に行く
準備もする。

「じゃあ、一緒に行くか！」

「うん。じゃあ行こうか。」

俺と紫は飛驒さんに挨拶して訓練場をでた。

第六話 学校へ！……の前に。（後書き）

やっと戦闘がかけました。

初めてなんでなんか変なところがあったらいつてください。

ちなみにCQCは近接戦闘用体術みたいなもの
思っていただけば……。

第七話 学校（前書き）

やっと学校ですね。一応中学2年ですがちょっと大人っぽい所あるかも。全体的に。

第七話 学校

俺は今、訓練場を出て、自転車で学校に向かっている。
勿論、紫もいるよ？

本当は俺は自転車を手で押して、紫と歩いて学校に行こうとしたよ？
けどね、ちよつと訓練（という名の新人イジメ俺対象ver）が長
引いて学校に遅れる……。

おい！ どうかの君、早起きしたのにそれじゃ本末転倒だろ。
とか思ってたんじゃない？

紫は自転車の後ろに座らせて急ぐ！

「アイ！ もうちよつと早く！」

「まてよ！ これ以上無理だつて！」

因みに言うと、後15分ぐらいでHRが始まるらしい。

紫の話だと、ここから天道中学とか言う所まで17分ぐらいらしい。
やばいな……と俺が思っていると、紫が

「もう少し早くできないんだつたら、トラウマ見せるよ？」

と右手を見せる。

紫の能力の効果を思い出して背中が寒くなった。
マインドイーター

「すすすすみませーん！！！！」

「分かればよろしい」

俺は恐怖に耐え、必死になって自転車を漕ぎまくった。

自転車が今までの1・5倍ぐらいの速さになる中で俺は思った。

（ああ、火事場の馬鹿力って本当にあるんだ……）と。

一生懸命漕いでいると学校が見えた。

校門らしき入り口の横には天道中学校と書いてあり

中は凄い広い。急いでる俺にもわかる。

視界の端に自転車置き場が見える。俺は勢いを殺さずに自転車から紫と一緒に飛び降りた。

自転車はそのまま駐輪場へ突っ込み、砂煙をあげる。

（すまん！ 我が自転車^{とも}。命運を……）

と謝り、紫と一緒に校舎に向かった。

校舎は全部で2棟あり、あと1つは寮らしい。紫によれば職員室と2学年のクラスは一緒らしい。

玄関で職員室の方向を教えてもらい、紫は自分のクラスで向かった。因みに時間はHR2分前。紫はどうか間に合いそうだ。

俺は職員室に向かった。

職員室、俺は中に入ると転校生ですけど、と言った。

すると、先生の内の1人が、職員室の隣にある校長室に一緒に行ってくれた。

もしかしたらこの人が担任なのかと予想した。

女の先生だ。結構な美人で、髪は金髪の長髪だが、顔は日本人に近いので

どうやらハーフのようだ。

校長室、隣にいる先生が校長室のドアを開く。

その先には机があり、そこには……………
誰もいなかった。
隣の先生から

「はあ……………またですか」

と聞こえてきた。

先生は校長のものらしき机に近づくなりそこにある手紙をとり、
内容に目を通し、またため息をついてこちらに渡してきた。
俺はその内容を読む。

（えーと、なになに……………」如月 明日香先生へ”か。あの先生の名
前だな。

” 今日転入してくる生徒は部隊からの推薦なのでSクラスにしとい
てください。

あなたは担任だから大丈夫でしょう。私はちょっとパチンコに行く
ので昼まで帰りません。

では、後のことはよろしくお願いします。因みに生徒の名前は御神
哀です。

校長より”……………なんだよ！ これ！

文の丁寧さと内容の横暴さがかみ合ってねえ！ 俺の名前はついで？

……………つつか、『H E A V E N』にパチンコあるのかよ……………何の
ために。

すると如月先生が話しかけてきた。

「あの……………御神君、それではクラスに向かいましょう。
もう分かったかも知れないけど、私が2・Sクラスの担任の如月で
す。

くれぐれも問題は起こさないでね？」

先に釘を刺されてしまった。そんなに信用ないかな……。

俺達は階段を昇る。クラスは2階らしい。

クラスの前に着く。

先生はここで待っていて、と言いつつ、クラスに入る。すると中から声が聞こえる。

「えー、皆、今日は転校生が来ます」

その瞬間、クラス内は騒ぎ始めた。

「うおー！ー！ー！ー！きたきたきたあ！」

「どんなかなー？ 先生、男ですか？ 女ですか？」

「うーん……それは見てのお楽しみで！」

じゃあ入ってきてー」

……なんか事前にあんな騒がれるとやりにくいな。

よ思いつつも教室に入る。

そのまま教壇の上に立つと一瞬、クラスが静まり返った。

（なんだ？ 俺なんかしたか？）

次の瞬間、生徒が一気に騒ぎ始めた。

女子からは嬌声が大量に重なって聞こえる。

男子からは、一瞬の殺気と、「やべえ！ 俺なんか変な趣味びーえるに目覚めそう……」

という声が……ちょっとまで、なんだそれは！

「じゃあ、自己紹介してね」

自己紹介なんて慣れないけど、最初が肝心だ。
これに失敗したらこの前の学校と同じだな……と思う。

「えーと、御神 哀です。

みんなこれからよろしく……」

といい、ちよつと微笑んでみる。

すると大多数の女子が机に突っ伏し、なにかを呟いている。
そうでない女子も頬をすこし赤らめている。

男子は……俺の顔が女に似ているからだろうか……

なんかこつちを見る奴がいる。やめろ！俺はソツチじゃない！

俺は視線をさまよわせていると、一番後ろの窓際の席に紫がいるの
が見えた。

紫はこつちを見て笑ってる。

チクショウ、面白がりやがって………。

「じゃあ、御神君は紫さんの隣、空いてるから座って」

よりもよって紫の隣かよ……。

まあ知らない奴の隣よりはいいだろ。

俺は紫の隣の席に座る。

「アイ、あなた以外と人気上々じゃない。良かったわね」

「どこがだよ。俺は目立ちたくないんだよ」

と言いついて、如月先生がHRの終わりを告げる。
そうして、クラスが騒がしくなってくる。

そして俺の机に人が押し寄せて、

……なんの為につて？ そりゃあ質問攻めだよ。

色々な質問をされて俺はあまり答えられないで困っている。

そうしていると大声がきこえた。

女子だ。

「みんな！ 1限目は能力測定よ！ 早く訓練場行かなきゃ！」

と言う。

そしたら、俺を囲む輪は次第に薄れていった。

声のもとなしき女子が近づいてくる。

「ごめんねー。みんな転校生なんて始めてなのよ」

黒のベリーショートベリースHORTの髪型の、姉御姉御！と呼びたくなるような人がいた。

「いや、たすかった。ありがとう」

「いやいや、別になんでもないことよ。気に…「おい！ 早く行こうぜ！」……おいバカ！

人の話に割り込むな！」

するとキックを男子に振る。

男子はそれを難なく避ける。

「よう！ 転校生……御神だったか。よろしく。

俺は荒祇アラキリョウジ 聊爾シラスイソウカだ。で、こいつが不知火 奏華。

俺たちは紫の友達だ。」

女子の方はこいつって言うな！と怒っている。
なんというか……こういうの久しぶりだな。
と思っていると、彼らの後ろから女子がきた。

「あの……」

「あつ……君は……」

すると不知火が

「なにになに？ 琴雪と御神知り合いなの？」

といってくる。

「私は涼風スズカゼコユキ 琴雪です。先日は暴漢に襲われた所を
助けて頂いてありがとうございます」

「へー……。御神！ あんたもやるじゃない！」

何がだろうと思う。

涼風は顔を赤くするし……。
すると紫が言った。

「皆、訓練所行きましょう」

と言う。

とりあえず俺達は訓練所に向かうことにした。
……ちよつと急ぐつ。

第七話 学校（後書き）

一気に主要キャラでできましたね。
次の話で主人公の手加減された能力で
いろいろ凄くなります。

登場人物紹介2（能力説明有）（前書き）

登場人物紹介です。

この前のとは違い、能力の説明があります。

登場人物紹介2（能力説明有）

Sクラス、荒祇 聊爾

身長 176cm 体重63kg

なんか元気すぎて、熱くて、真面目な性格。
友達に甘い。

『HEAVEN』の学校では能力訓練と実践の授業だけダントツ
トップ。空間そのものを操作する能力。無論S判定。
空間を開いている間は本体が隙だらけなので、許可を
とっている刀で身を守る。

能力は皆無と言っていいほど暴走なし。だが過去に1度
だけあったらしいが、そのことはあまり話さない。
将来の夢は部隊のいち隊長になること。

能力名「ロストメビウス空間歪曲」

空間を断ち切ったり、曲げたり、境界を開いたり、

あと、境界同士を無理矢理繋げて移動したりする。
応用技として、曲げた空間が元に戻ろうとして放つ
衝撃波も攻撃に使う。

制限あり。

制限距離 2・31km まで。遠距離に空間を開く場合
には、それまで。

自分の周囲 1m の空間をいじるには時間がかかる。

無意識では発動しない。意識してからのタイムラグ
は 3 秒ほどと長い。だが、一度意識すれば問題無い。

「お前の後ろからスパツといくぜ！」

癒し系、涼風 琴雪

身長 169cm 体重「言わないで！」

人見知りが結構あるが優しい面もある。

学校の中で 1 位 2 位を競う程の可愛さ。癒やし系。

『HEAVEN』の学校では、能力訓練に関しては光るもの
がある。それだけでなく、勉強は普通にトップ。

能力は物質に限り、全てを凍らすこと。体術は苦手なので軽銃2つを持っている。

能力が暴走したことは一切ない。しかし……。将来、部隊に入ることが光栄に思いうらしい。好きな人がいるらしいがそれは……？

能力名「絶対零度」
アブソリュートゼロ

自分の触れているものから、周囲50mの任意の物質の振動を完全に停止させる。温度の調整ができ、すぐ溶ける0 から絶対零度（-273,15）まで調節可能。たとえ100 でも一瞬で凍りつく。能力を使おうと思えば、意識しなくても周囲3mの物は勝手に凍りついていく。

制限あり。

もちろん、周囲50m以上離れば無理。

ある事から、人間に対しこの能力は直接使えない。ただし、凍らせた物を使うのは大丈夫。

「あなたの熱はもう奪ったよ。」

姉御な人、不知火 奏華

身長174cm 体重「言っなよ！」

クラスの頼れるリーダー役。

男からも女からも尊敬される人間性。

能力訓練は忠実にこなす。

部隊には尊敬する人がいるらしく、その人を追って日々鍛錬している。

武器はない。しかし体術がやばい。

能力はよく使いすぎて溶岩を噴出させる。
今でもその癖は残っているらしく、測定の時は、張り切りすぎる。

能力名「ランドナバーム大地噴火」

自分が触れている地面から周囲10mの地面や、その奥にあるマントル、溶岩、マグマを自在に操れる。

なお、周囲10mと言うが、深さは測りきれない。

彼女はもっぱら足で地面を蹴って能力を発動させている。

制限あり。

暑い。

「私は女だっ！」

登場人物紹介2（能力説明有）（後書き）

とりあえず3人。

第八話 みんなの能力（前書き）

やあつと能力がいつぱい！
例によりその他キャラは省る。

第八話 みんなの能力

俺達は今、クラスのあるA棟の隣にあるB棟の訓練所に向かっている。

やはり、能力の使用は間違えば危険を招くので、どこの学校も部隊と同じように地下が必ずあるらしい。

訓練所についたと同時に授業開始のチャイムになる。

どうやら間に合ったようだ。

部屋の隅からなんかごつい先生がでてくる。

その隣には如月先生がいる。

するとその先生は言う。

「これから能力測定を始める。まずは番号順に名前を呼ぶので、前に1人ずつ出て来い！」

「まず最初に、荒祇 聊爾！」

すると荒祇が立つ。

「じゃ！俺は図ってくるぜ！」

と言い、皆の见ている前に出る。

俺は紫に聞いてみた。

「紫、荒祇の能力はどんなのだ？」

「それは见てのお楽しみね。けど間違いなくこのクラスの第1位よ」

「マジかよ……」

俺は前に視線を戻す。

能力測定はクラスごとにやり、その中で順位を競うものだ。

ちなみに不知火の話によるとクラス全30人の中でもトップ5に入る人は

特に凄い能力者らしく、将来は高校に行かなくても部隊に入れるらしい……。

荒祇は手を伸ばし、誰も居ないところを指差す。

その瞬間、空間が割れた。

比喻ではなく、ただ純粹に空間を割ったのだ。

そのあとに荒祇は先生に指示をもらい、同時に裂け目を10個ほど作ったり、

どれぐらいの速さで空間を操れるかなどをやった。

その能力は凄く、空間の裂け目が元に戻るたびに衝撃波が飛びまくり、俺たちは

その場にとどまるのが精一杯だった。

最後に、的が出てきた。どうやら能力の攻撃性が問われるらしい。

荒祇は集中する。

「ハッ！」

といった瞬間に空間ごとの的がねじ切られた。

「評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力SS 攻撃射程S

総合Sランクだ！」

生徒からさすがだな、という声が聞こえる。

荒祇が俺達の所に戻ってくる。

「いやー疲れた！」

「お前すげえな……」

「いやいや、皆も凄いから見とけよ」

俺は皆と雑談しながら他の人の能力を見るが、やはり荒祇が凄いようだ。

そして何人がやったあとと呼ばれた。

「次、佐屋 紫！」

「私ね。行ってくるわ。アイ、ちゃんと見てなさいよ？」

「はいはい………」

紫はどうやら結構特別らしく、紫専用の装置が持つて来られた。脳干渉系の能力者専用らしいが、そういう能力者はいても、なかなかSクラスにあがれないものらしい。

紫はそれに手をあてて能力を使う。

すると装置が赤色の光を発する。

先生は結果を読む。

「評価！ 効果範囲 A 効果威力 S 効果射程 B

総合Sランクだ！」

紫がこっちに戻ってくる。

「どう？ アイ、凄いでしょ」

「すげーな……」

俺は素直に感嘆する。

「次、不知火 奏華！」

「私の番だね！」

不知火は前へでる。

…… なんとというか、後ろ姿がかっこいい……。

不知火は足を少し上げて地面を蹴る。

何をしているんだろう？ と思った時、

床から茶色の杭が無数に出てきた。

と思っていると形がくずれる。

そして今度はそれを操り槍にして上から地面に突き刺す。

最後にもう一度思いつきり地面を踏むと……

溶岩が出てきた。

……… 危なくね？ やばくね？ 俺死んじゃう？

と思い回りをみるが俺以外はいたって冷静。見慣れているみたいだ。

不知火がちゃんと溶岩を操っているようだ。

それもお手玉するくらい簡単に。

すげえな。

不知火は能力を使うのをやめると溶岩は地面の隙間に消えていった。

「評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力SS 攻撃射程C

判定Sクラス！」

「凄いでしょ！」

「てゆうかあぶねえな。あれ大丈夫なのか？」

「失礼な！ちゃんと制御するから大丈夫だよ」

そんなもんかと思う。

あれ？　そういえば紫の次は不知火だったな……。
佐屋、不知火ときたらやつぱり……………

「次、涼風　琴雪！」

「はっ、はい！」

なんとも頼りない声をあげて前に出る。

大丈夫かなあと心配していると声が聞こえる。

「大丈夫だろ、だってあいつすげえもん。マジで」

「そうよアイ、あの子はすごいもの。本当に」

「そうだよ。あんたも信じてあげな。本気で」

そつか？と俺は返す。ちなみに分かるとおもうが
上から、荒祇、紫、不知火である。

俺は前を見る。

その瞬間、背筋が震えた。

……なに、その反応。あたりまえだろ！

そこには、訓練場を一周するような氷の壁が一瞬できていて、さらにはそれだけじゃなく、涼風は自分の周りに氷のナイフを見た目100本ほど作っていた。

涼風の目は……怖かった。

もしかしてあれですか？能力使うと性格変わるパターンですか？

やばい、マジで怖い。

……と思っていたら先生が震えた声で結果を告げる。

「……ブルツ……ひ、評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力A 攻撃射程A
は、判定Sランク……ブルツ！」

……寒いから？ それとも怖いから？

「あのっ！」

「はっ、はい！」

「？ 御神君。どうでした？ 私の能力？」

「いや、すごいね。あんなのはじめて見たよ！」

これは本心だ。純粹に凄かった。

やっぱり涼風もSランクなんだな。

あれ？涼風がなんか顔赤くして俯いちゃったよ。

風邪かな？

俺は涼風の額に手を触れてみる。

「大丈夫？ 熱でもあるの？」

「……いつ、いえ………」

あれ？更に顔が赤くなったような……大丈夫かな？

涼風は皆の所へ行った。

荒祇や不知火になんか言われてる。

あつ、なんか倒れちゃったよ……。

俺は皆の所に行く。

「涼風……大丈夫か？」

すると涼風はまた真っ赤な顔になり、「琴雪でいいです……」
と行った。

「ほんと鈍感だな、御神！」

「だよねえ、分かってないわよねえ」

「アイは渡さないわよ………」

と聞こえた。

最後のは無視しとこう。

いつの間にかほとんどの生徒が終わっていた。

どうやら俺は転校生なので最後にやるらしい。

そして呼ばれた。

「最後だ。御神 哀！」

俺はやっぱり最後か……と思い皆の前に行く。

皆はやはり今まで見たことのない俺の能力が楽しみらしい。
このクラスには空気使いはいないから大丈夫だと思うけど。

俺は先生から、とりあえずお前の能力を適当に見せろといわれた。

俺は両手を横に大きく広げ、目を閉じ、意識を集中させた。
周りはどんな能力かと騒いでいるがそれも聞こえなくなる。

部隊の模擬戦の終わった後に紫に言われたアドバイスを思い出す。

”どんな能力も工夫しなければ攻撃にならない”

俺は風を当てるだけでは攻撃にならないと教えられた。

攻撃を作るには、その元となるイメージが必要だ！

俺はいつものように脳に流れこんでくる風の向きを変える。

瞬間、俺は能力を開放した！

部屋内の風向きが地下なのに急に変わる。

中心点は……俺の掌！

俺は掌を中心に2つの竜巻を作り上げた。

埃が舞い、竜巻の形が見える。

俺はそれを一瞬でやめ、その風を一気に、

今度はもつと細かく！

人差し指の先に空気を圧縮していく。

最大重量100kgを完全に圧縮するのに、10秒もいらなかった。

俺はそこにある空気を、いつの間にか用意されていた的に打ち出す！

不可視の風の弾が的に当たるコースで飛ぶ！

俺の手の動きで分かったのだろう。

驚愕の表情を浮かべながら的に視線を向けるみんな。

俺の放った弾が的に当たったその瞬間

ズゴオ！！！！と大きな音が聞こえ、圧縮された空気が解き放たれ、
そして……

訓練場の半分が、吹き飛んだ……。

嘘だろ？

的があつたほうから半分の壁が崩れ、地面が露出している。
この入り口はB棟にあつたのだが本体は校庭の下にあつたのだろ
う。

青空が見える。雲ひとつない青空が………あれ？
俺自身や皆が呆然としてしていると先生の声がこだまする。

「評価…… 攻撃範囲SS 攻撃威力SS 攻撃射程SS

…… 判定Sランク………」

俺は誰にも聞こえない声で呟いた……

「……手加減どころか、強くなってる？」

第八話 みんなの能力（後書き）

なんと、能力の応用によってオールSSに
目覚めました！

あ、別に主人公はイジメ大好き人間
ではありませんよ？

第九話 戦闘！！！！！（前書き）

短いすね、はい。

別に手抜きではありません、はい。

第九話 戦闘！！！！

俺は大変な事をした。

そう。訓練場の壁やら天井やらを……

なんというか、木っ端微塵にしました、ハイ。

どうしよう……と思って先生の方を向くと、先生は能力には驚いた様子だが、壁などは気にしていなかった。

「あの……先生？ これって弁償モノですか？」

「いや、大丈夫だ。

訓練場の建物だけ、『H E A V E N』から最先端技術を貸してもらって

壁など壊れたものは、自己修復系能力リカバリーの理論を応用しているらしい。だが、直るのはせいぜい3日だろうな。ここまで壊してもらったらそれぐらいだろ」

……今更だけど、『H E A V E N』すげえな。

何で能力があるのかも分からないのに能力を応用するとか……最高じゃん？

よくよく見ると、壁の断面が少しずつ直ってるような？

そんな気がする。

すると先生が言う。

「よし、これから模擬戦闘訓練を行う。

みんな、校庭に行くぞ！ くれぐれもこの穴にはおちるな！
その後は、戦闘系能力者と非戦闘系能力者に別れている！」

ここで一旦解散となり小休憩となる。
すると、紫達がこちらにくる。

「すげえな、御神！ 俺、後でお前と勝負してえよ！」

荒祇が言う。

「哀でいいよ……。けどお前に勝てるかはわからないな」

「じゃあ俺も聊爾でいい！」

すると紫と涼風、それに不知火が言ってくる。

「ふふ、アイ、あなたなら大丈夫じゃない？」

「きつと勝てますよ！」

「はっはっは！ まあ、いい勝負になるんじゃないの？」

「いやいや、さすがに無理だつて、紫」

俺がそう、紫に返すと沈黙がながれた。

？ なんか俺、地雷踏んだ？

すると沈黙を破り、涼風が真っ赤な顔で聞いてきた。

「あのっ！ 紫さんなんで名前で呼び合ってるんですか？」

「……いや、紫がそうしてくれていったから」

すると不知火が少し顔をにやけさせながら涼風の方に行き、何かを

話す。

すると、さらに涼風の顔は赤くなる。

なんだ？と俺が思っていると涼風がいきなり、

「あのっ！ その……え」と……私も、な……名前ですんで下さい！」

「いや、別にいいけど？ そしたら俺のことも哀でいいから」

そう言つと琴雪は顔を沸騰させ、気絶し、奏華に支えてもらう。

すると後ろからゾクツとする殺気が飛んできた。

俺は恐る恐る後ろを向くと、鬼……もとい紫が黒い笑みを浮かべてこちらを睨んでいた……。

マジで俺、フラグ立てちゃった？

………死亡フラグかもしれないけどね……。

俺は必死に紫の殺気に耐えながらも校庭に皆と向かう。

校庭には、もうすでにほとんどの生徒が2列に別れて座っていた。

俺達は、それぞれ自分の所に座ろうとすると、先生が呼び止めた。

「おい！ お前らはこっちだ！」

？2列じゃないのか？と俺が思っていると、クラスの面々が「またか……」みたいな

表情を浮かべていた。

俺は皆についていく。

ちなみに、俺達がいるのはクラスメイトの前。めっちゃ恥ずかしい。因みにここで言う俺達とは、

俺、紫、聊爾、琴雪、奏華だ。

俺はなぜここに居るのかを不審に思っていると先生が口を開いた。

「ここに居る五人は、このクラスで最高の成績をだした上位5人だ。しかし、能力の質そのものが普通ではないので、この5人でバトルろしあいロワイヤルをしてもらい、クラスの順位を決めたいと思う」

「？ クラスの順位？」

と俺が疑問符を浮かべると紫が説明してくれた。

「まあ、つまりこのクラスでの立ち位置よ。そのままの意味で順位」

「なるほど」

俺は解決したことに満足しながらも、今から戦うことに興奮をおぼえる。

（あの部隊の訓練はやばいけど、短時間でコツがつかめたんだ。頑張ろう）

すると、皆が離れていく。

そして100mくらい離れる。先生が拡声器で指示をする。

「では、いまから第1位決定戦を始める！
はじめえ！！！！」

え？てか、いきなり？

と俺が戸惑っていたのも束の間、周囲に砂煙が上がったと思うと……

俺は空中に飛ばされていった……。

第九話 戦闘！！！（後書き）

戦闘は次に持ち越し！

楽しみですね……。

………楽しみですよね………？

第十話 戦闘！！！！！（続き）（前書き）

やっと戦闘シーンですね。

第十話 戦闘！！！！（続き）

？何が起こった？

ああ……空が蒼いな……。

いや、まてまて、俺は上を見ていた覚えはないぞ？

俺はそう思った瞬間、空中から地面に落ちた。

あぶねーな。受身を咄嗟にとって良かった……。

そして、だからこそ思い出す。

この戦闘訓練でクラス第5位を決めるのだということを。

ああ、俺誰に飛ばされたんだ？

俺は元いた位置を見ると、そこにはポツカリと空虚な穴が不自然に開いていた。空にも同じのがある。

ああ、聊爾のか……と思っていたらいきなり横から溶岩がとんできた。

……？ 溶岩？

「うわっ！ あぶねえ！」

俺は体勢を崩しながらも避ける。

「よくかわしたね！」

俺が溶岩をかわすと不知火が声を発した。
20mほど前に居る。

「いや、よけないと俺が死んじゃうし……」

そう突っ込むが、聞いてないようだ。
いきなり土の拳が地面から飛んできた。

俺は自分に当たるものだけを風で吹き飛ばす。
すると不知火は言う。

「私達のバトルでの約束！

たった1つ、それは手加減無用だよ！

相手を殺す気でやることだよ。でないと私達の誰かがあなたを殺す
わよ！」

「……マジで？」

「……マジで」「」「」

聊爾は紫と琴雪相手に奮闘中だというのに、不知火と一緒に言葉を
返す。

「はあ……分かったよ。殺ればいいんだろ、殺れば」

「分かったならいいんだけど……。けど死にかけるときの
感触は怖いわよ。少なくとも私達4人は経験してる」

俺はマジか……コンバージョンと思いつつも集中。

空気を水素に『変換』する。地面に足をふれて、分からないように
炭素をとりだす。

炭素はさっきの溶岩攻撃で、離れた枯れ枝が炭化していたものを利
用した。

俺はばれないように本気を出すことにしたのだ。
本気の相手には本気を。これルール。

俺は炭素を無理やり『エヴァボレイション気化』させ、水素と無理矢理結合させる。

因みに俺の能力に物理法則など関係ない！このよのルール……自分で言ってるすげーな……。

俺は水素と炭素を原子レベルで結合させた。

そう、プロパンガスを作ったのだ。

俺は不知火にばれないように、風を操り、プロパンガスをのせて不知火の周りに展開。

不知火が言ってくる。

「おいおい、攻撃して来ないのかい？　ならこっちから行くよ！」

不知火は地面を蹴る。

その瞬間、小規模な地震がおこり溶岩が吹き出た。

「かかったな……」

俺は全力でプロパンガスを溶岩と不知火の間に解き放つ。

不知火がその独特のガス臭に気付いたときには、もう遅かった。

「しまっ……」

「恨まないでくれよ……」

そして、溶岩の熱の余波で大爆発が起こった。

『ドガアアアア！……！』

爆音がその時の音を支配した……。

吹き飛ばされた不知火はボロボロの状態で先生に運ばれどこかにい

った。

爆発場所を溶岩寄りにしといてよかったな……下手すりゃ殺してた。

俺はさっきの爆発を呆然として見ていた3人の内、まずは……紫をねらった。

俺は風を体全体の後ろから噴射し、紫の後ろに高速で回った。

この移動法はさっき思いついたものだ。
しかしここまで上手いくとはな……。

俺は紫を自分の手に乗せた小さな暴風に当たった。
しかし、小さくても暴風だ。どれくらいかという竜巻ぐらい。
紫は俺に触れて能力を使う暇もなく、後方に吹き飛ばされた。

次は……琴雪。

聊爾は厄介な相手だ。

今なら聊爾を放っておいて琴雪に集中できる。

琴雪は掌に氷の塊を作ってこつちを躊躇なく殴ってくる。

……やっぱ、性格変わってんな。

俺は少し離れて立ち止まる。するといきなり俺の服の一部が凍り始めた。

「ツクそつ！」

なんと遠距離も可能みたい……ってさっきやってたな。

俺は狙いを定めにくくするため風の高速移動を使う。

俺はもう竜巻を起こすことにした。

いや、もう面倒だから。……何？女の子相手に情けない？……うるせえー！

全ての俺が掌握している風を琴雪の周りに渦巻かせる。
琴雪は気付いたようだがもう遅い。

……けど、マジで琴雪ごめん。
俺は竜巻を作った。

「きゃあああああ！」

俺は竜巻で巻き上げられた琴雪が落ちてくるのを
確認する。俺は落下地点に行き、琴雪を受け止める。
すると、気絶していた琴雪が目をさまし、こちらを見てくるといき
なり頬が真っ赤になった。

……確認しよう。今、俺は琴雪を受け止めたままだ。
そしてその体勢は言わずもがな、お姫様抱っこ。

琴雪は「きゆう……」と気絶してしまった。

俺は琴雪を先生の所へ置いておく。

後は、聊爾か。

俺は後ろを振り向こうとしたその瞬間、
声がした。

俺の真後ろから。

「よう、俺を無視すんなよな？」

そして俺の視界は反転した……。

……またこれか。

第十話 戦闘！！！（続き）（後書き）

主人公補正で此の世のルール無視決定です。
以外に聊爾も強かったりする。

第十一話 手加減無用情け無用（前書き）

主人公はやっぱり強かった……。

第十一話 手加減無用情け無用

俺はすぐ体勢を立て直す。

また不意打ちでやられた。以外と能力を使つのに慣れてやがる。

俺は勢いよく立ち上がったって相手を睨む。

そこには直立不動となっている聊爾がいた。

「へっ、まったくよ、俺を無視すんなんて」

「どうやら紫が言つてた第1位つてのは嘘じゃないか……」

俺は聊爾の能力を考える。

多分、万年第1位だろうな……。

奴の能力は空間を操作していた。多分俺の体を空間の穴に入れて任意の場所から吐き出させたんだろう。

「しかし空間か……相性が悪すぎな相手だな」

俺がそう呟くと聊爾が返す。

「まあ、風を操れても空間の前じゃ意味ないしな。降参してもいいんだぞ？」

「いや……遠慮しとく」

俺はそう言い放ち気持ちを集中させる。

もうこうなったら俺も意地がある。絶対勝つてやる！

俺は竜巻を起こす。

3つの竜巻が聊爾に勢い良くせまる！

しかし聊爾が手を向けると、竜巻と聊爾の間に痕がはいった。そこに竜巻はぶつかり、そしてあっけなく消えた。

「無駄だぞ？ お前の風は俺には効かない！」

本当は風使いじゃなくて空気使い何だけどね……。もう本気だそ……。早く終わらせたいし。

「聊爾」

「あ？ なんだ？」

俺は聊爾を呼ぶと聴いてくる。

俺は言う。聊爾が無茶をしない様に。

「聊爾、俺はこれから本気をだす。死なないように気を付けろ」

聊爾は何のことだ？と首を傾げる。

俺は本気をだす。勿論今までも本気をだしていた。

しかしそれはあくまで今まで出した技の本気だ。

俺は空気を操ることで後1つできることがある。しかしそれを聊爾は気付いていない。

（その油断が負けを招く）

俺は両手を開き、前にかざす。

風を100kg分を圧縮して弾にする。

俺は死なないことを祈って相手の本気に合わせて本気で弾を撃った。

直後、音を置いて圧縮弾が音速以上で飛ぶ。

そう、俺が本気を出すとあの圧縮弾をマッハで飛ばせる。しかしこれは危険なため、訓練では使いたくなかった。

だが、本気で行かなければお互い満足できないと思った。だから聊爾にはやった。

聊爾はあらかじめ開いておいた空間のなかに弾が入るのを感じる。と、同時に『ゴウツツ！！！！』と物凄い音を立てて空気の余波が聊爾を吹き飛ばす。

「これが、哀の本気か！」

聊爾は吹き飛ばされながらも驚いた。

聊爾は受身を取り体勢を立て直し前を向く。

その瞬間後ろに風の流れを感じたとおもったら声が聞こえた。

「さっきの不意打ちのお返しな」

そして聊爾は気絶した。

後ろに俺が回って風を纏った手刀を放ったのだ。

……シーンと静まり返る周り。

？ おかしいなと思い、皆がいる方向へ目を向けると……誰もいなかった。

「……は？」

すると風に吹かれて紙切れが落ちてきた。
先生からのメモだった。

『勝ったほうは負けたほうを保健室に運べ。
そして勝った奴は俺の所に来い。以上』

「……逃げたのかよ」

俺は今日1番の深い溜め息をつき、気絶している聊爾を担いだ。

俺は今保健室にいる。

保健室の中にはベッドがありそれぞれに、不知火、琴雪、紫、聊爾が寝ている。

そして俺の目の前には……如月先生がいた。

保健室に入ったとき、如月先生がいたのは助かった。

どうやら如月先生は担任であり保健医でもあるという不可解な人事らしい。

なぜ担任なのに保険医をやっているかというと、先生の持つ特異能力、『リザレクション
永久復活』が原因らしい。

体に無理がなければ、体力のみ完全回復することができるという効果らしい。

勿論、体力のみであって、気絶や酷い怪我は回復しないとか。

そして俺は模擬戦の報告を細かく先生に伝え終わった所だ。

「それにしても御神君。転校してきたばっかりなのに第1位とは凄いわね。色々大変だろうけど頑張って」

「はい。分かってます……」

いつまで経っても皆が起きる気配はない。
ちよつと強くやりすぎたか……と思う。
すると先生が言う。

「もう今日の授業は終わりよ。地下の修繕を優先させるらしいわ。
自然回復じゃ遅いから、ですって。この子たちは私がみてるから帰
つていいわよ。
あなたも休んだほうがいいわ」

「……はい。では皆を任せます」

俺は皆のことが心配だったが仕方なく帰ることにした。
俺はすぐ教室に戻り、誰もいないそこから荷物を取り、自転車置き
場に行った。

……これからは少し能力の制御を身に着けたほうがいいな。

俺はそう思いながら自転車に乗ってマンションに向かった。

マンション。俺は部屋に戻ってすぐ汗をシャワーで流して風呂に入
ったあと

途中で買ったコンビニ弁当を食って、
寝室で今日のことについて思った。
皆に対してちよつとやりすぎたかもしれないけど、
本気で戦ったからいいよな？

俺は前の学校みたいになりたくないと思った。

そして俺は睡魔に誘われていった。

「アイくん、ほんとにいいの？」

少女が俺に話しかける。

「うん。おねがい」

俺は勝手に口を動かす。

「わかったよ……」

少女は悲しそうにし、手を俺の額にあてる。

「じゃあね……」

「ハッ!!」

……俺は勢いよく布団からでた。
今のは夢か……。

しかし妙にリアルな夢だったな……あの女の子も
見たことあるような？

俺はそう考えるといきなり机においてある携帯がなった。
俺は携帯を開けて気付く。

「まだ2時じゃん……通りで暗いわけだよ……」

俺は携帯の電話に出る。

「もしもし」

『やあ、御神君』

「総隊長さん？」

それは他でもない総隊長の声だった。
そしてその声は一言だけ告げる。

『任務だよ』

第十一話 手加減無用情け無用（後書き）

次が初任務ですよ！

もしかしたら色々あるかも……。

第十二話 初任務（前編）（前書き）

はっにんむです!!!

第十二話 初任務（前編）

『任務だよ』

電話でそう告げられた時俺は不安だった。

しかし、これも皆の役に立つ為と思えば気が楽だった。
眠気を振り払い、俺は冷静に、そして端的に聞く。

「……内容は？」

すると総隊長さんが言う。

『詳しくは本部に来てくれ。この時間だし、知り合いに
姿を見かけられることもないだろう』

「分かりました」

『では本部で』

そう総隊長さんは言い、電話はきれた。

俺はすぐに、動きやすい服に着替え、顔を洗って
あの黒いカードを持って部屋をでた。

俺は自転車にのり、本部へ急ぐ。
少し速めに漕ぐ。

本部に着いた。

本部はどこぞのコンビニのように24時間開いているらしい。
俺は自転車を置き、入り口に入る。

いくら部隊でもこの夜中なので、視界に入る人影は3、4人しかいなかった。

俺は受付に行き、カードを見せる。

受付はそのカードを見て、総隊長がいる部屋を教えてください。

俺は階段でその部屋に行く。

その部屋がある階にきたのだが、部屋が見つからない。

受付の人が間違えたのかと思い戻ろうとすると、後ろからいきなり声がかかった。

「やあ、御神くん」

「うおわ！！！！」

俺はいきなりの総隊長さんの出現に驚いた。

というか気配すら感じなかったぞ？

「こつちだよ」

と手招きされ、ついていくと、そこにはさっき通った時には無かった部屋があった。

どうなってるんだ？

俺はそう疑問におもいながらも部屋に入った。

そこには、誰もいない。

任務だから誰かいるだろうと思っていたのだからいない。

俺は不思議に思い聞こうとするが先に総隊長さんが言葉を紡ぐ。

「これから君にやらしてもらう任務の内容を言わせてもらう。
はつきりいつて緊急事態だ。君にとっては初任務なのに」

すこしきついと思うが頑張ってくれ」

「内容は？」

「ついさつき、『HEAVEN』近郊で能力者によるものと思われる殺人事件がおきた。その犯人と思われる者には目撃証言があり、分かっている。今までも傷害事件を数多く起こしてきた奴だ。

能力は不明。だがそいつは自分のことを奇術師とよんでいるらしい。^{マジシャン}私達の目的は奇術師の捕獲、または殺害だ。どちらにせよこちら側に運ばれることになる」

「殺害、ですか……」

俺は気になった言葉を繰り返す。

「私も君のような中学生に人殺しをさせたくないがこちら手一杯なんだ。どうしても君の力が借りたい」

「……分かり、ました。けど、なるべく殺さないようにします」

俺はそう言い、承諾する。

「そうか。 それでは、任務用の服を渡そう。こちらに」

俺は案内されて隣の部屋に行った。

「これが君用の制服だ」

そう言って渡されたものは、黒を元とした、
というか黒しかない服。

簡単に言えば、とうの昔に無くなった自衛隊の迷彩服の黒バージョンの動きやすい簡易型を思い浮かべてもらえば良い。勿論ヘルメットなどは無いが。

いつとくけど、中学生の俺からみたら滅茶苦茶かつこいい。

俺はそれをまた別の部屋で着替える。

サイズはぴったりだ。いつ図ったんだ……。

「おっ、似合うじゃないか、御神くん」

「ありがとうございます」

「それでは現場に行こうか。屋上に上がってくれ」

俺は総隊長さんと共に屋上に上がる。

なにでいくんだろうと思う。

屋上だからやはりヘリだろうか？

屋上にあがると総隊長さんが言う。

「ではこれから君を現場に送る」

「？ ヘリとかじゃ無いんですか？」

「……ヘリはうるさいし、隠密には向いていないからな」

「じゃあ何で？」

「私の能力で、だよ」

その瞬間、総隊長さんの目つきが変わった。
呟く。

「この座標から事件現場の座標までの距離の概念を一時削除」

そして、なにかが変わった。

見た目には分からないがなにかが変わった。そう疑問に思うと同時。
俺は総隊長さんに押されていた。

「そっちが事件現場だから、よろしく。
くれぐれも人に見つからないように」

その瞬間、俺は事件現場にいた。

「……は？」

何がなんだか分からなかった。
なんでいきなりここに居るのだろう？
すると制服の中にいれた連絡用の携帯にメールがとどく。
それを見る。

『疑問に思っな。任務を優先』

とだけかいてあった。

俺はしょうがないと思い、疑問を打ち切り、
搜索のため、能力を使う。

俺はアスファルトに手をふれる。

そして、能力を発動する。

アスファルトにはすぐそこにある現場の足跡の情報がある。

俺は犯人の物と思う一種類の足跡を見つけ、アスファルトの表面
に能力を使っていく。

犯人がアスファルトの続く上に居るとしたら、17分、アスファル
トの表面を搜索できる俺なら

足跡、歩幅などを計算して犯人を追いかける。

俺は能力を出し惜しみなく使っていく。

すると、すぐ、500mほど道の先にソイツを見つけた。
俺はその犯人を追ひ、裏路地を縫うように走っていった。

第十二話 初任務（前編）（後書き）

総隊長の能力詳細はまだナゾです。

第十三話 初任務（後編）（前書き）

やっとPV10000OVER!!!!!

ここまでくるのにがんばりました。

というかここでもうこんでいいのでしょうか？

第十三話 初任務（後編）

俺は奇術師^{マジシャン}を追い、裏路地を走った。

（あともう少しだ）

俺は近づいた気配に警戒し、そつと角から向こうを覗く。そこにはいた。

周りには人はいなかったのですぐ分かった。

見た感じは、人の良い老紳士と言った感じだった。

その白髪が年齢を教えてくれる。

本当にあの人が奇術師^{マジシャン}なのか？と思い、もう一回能力を地面に向けて放つ。

アスファルトに記録されている犯人の足跡と歩幅等のデータと目の前を歩く老紳士のデータを重ねる。

（……やっぱりだ）

その記録は寸分変わらず合致していた。

俺は目の前を歩く老紳士に、覚悟を決めてそつと後ろから忍び寄った。

あと数メートルといった所で違和感が襲った。目の前の老紳士の姿がユラユラと揺れたかと思つた次の瞬間、姿が消えた。

なんだ？ なにが起こった？ と俺が思い、周りを見渡してみると、また違う人気の無い裏路地に入っていく姿が見えた。ただの見間違いかと思ひ俺はまた裏路地に入る。

すると次の瞬間、後ろから声が聞こえた。

「マジックショーにようこそ……」

「!? くそっ!」

俺は急に聞こえた声に驚き、咄嗟に振り向き拳を振るう。
しかしそこには人影すらなかった。

俺は気配が前からしたのでまた前を向く。

そこには、さっきの老紳士がいた。

老紳士はこちらにゆつくりと気品に満ちた礼をしてくる。

「こんばんわ、『H E A V E N』の人」

俺になにか得体の知れない重圧がのる。

敵と向き合う緊張の汗が噴出す。

初めての戦闘だ。

俺は緊張しながら口を開いた。

「お前が、^{マジシャン}奇術師か?」

すると老紳士は返す。

「はい。その通りです。」

私が今回のマジックショーを開催させて貰う、通称、^{マジシャン}奇術師でござ

います」

「マジックショー、だと？」

俺はさつきから意味の分からない単語を言う老紳士に顔をしかめる。

すると老紳士は口を開く。

「はい、そうです。マジックショーです。

素晴らしい芸術の時間へご案内しましょう。

今回のお手伝いはあなた、です」

「お手伝い？」

俺はまた、意味の分からないことにイラつく。

すると、次の瞬間、また老紳士の姿が陽炎のように消えてしまう。そしてまた後ろから声が聞こえる。

「あなたは黙って私の芸術^{ショー}の引き立て役になればいいのです」

頭に重い衝撃がかかる。

俺はそれが杖のものとわかった。

それは、子供をしつけるほどの杖ではなく、殺すための杖。

先は尖って、人を刺せるようにしているし。

素材も鉄で出来ていて硬い。

「おやおや、意外と頑丈ですね。では、これなら」

そしてまた姿を消す。

俺は後ろに気配を感じて咄嗟に横に飛ぶ。
すると俺のわき腹をかすって杖の先端が通る。

「レポート空間干渉系能力か!？」

そう、考え付くのはそれだ。しかしそれは拒否される。

「おお、あたりです。凄い。

関心しますね。」

「うるせえ!」

俺は老紳士の懷に飛び込み、拳を突き出す。

しかしまた外れた。

今度は避けられた。

老紳士は左に避けてすぐ、姿を消した。

そして今度は俺の右後ろから杖による連続突きが繰り返される。

俺はそのうちの数発を肩や足にくらった。

さっきかすったわき腹からは結構な血が出ている。

足や肩も同じ状態。

(やばい……目眩が……)

少し貧血気味になってきた。

血を垂れ流して動き続けているのだから当然だろう。

早く相手の能力を解析し、攻略法を練らなければいけない。

「考え事はショーの後にして下さい」

それがいけなかった。

目眩と考え事で頭が一杯だった。

俺は後ろからくる杖の突きに対応できずに

腹に、穴ができた。

それは空虚で、ポツカリ開いて、中の色々なモノがぐちゃぐちゃと
している。

そこからは、赤いものが噴き出し、俺の体にも、相手の体にもかか
る。

視界が赤く染まる。髪も、どんな染料より赤く。

そこで俺は、意識を、俺のナ力で渦巻くモノに、堕とした。

マジシャン
奇術師 S I D E

私は芸術的に、あの子の腹を突いた。

それは真っ赤な血を噴出し、

私のショーの終焉を彩るものに相応しかった。
血が顔に当たる。

ああ、なんて暖かいんだ。

そこで、少年は倒れた。

私はもう終わ리と思つて、少年に背中を向けて歩き出す。
今日はラッキーデイだった。手伝いを2人も貰えた。

そう思い、満足して歩いていく。するといきなり肩を掴まれた。
なんだと思う前に、激しい痛みと一緒に、はじけた。

なにが起こつたのか。

私は理解できなかった。

私の肩の肉が骨だけのこして弾けたのが分かるのに、そう時間は要
らなかった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！！！」

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い！
！！！！

「ああああああああああ！　ぐうつあああああああ！！」

私は感じたことの無い痛みで倒れて悶える。

なんだこの少年は？

なんだこの能力は？

私は目の前にある恐怖から逃げたかった。

足音は近づく。私は最後の力を振り絞り、鏡に入った。

私の能力は『^{インサミラー}左右対称』。

設定座標を基準にして、私の位置と反対側に移動する能力。

私はそれを使い、恐怖の元の後ろに回り込み、杖で力の限り突いた。

私の杖は少年の腹に突き刺さ………らなかった。

そしてある異変に気付く。

私が刺そうとした腹はもう既に、穴を開けた。

なのに、それが、その傷が……無い。

私はもう諦めた。杖はなぜか弾かれ、もう体力が残っていない。

「は、はは、はははははは………」

私は目の前にきた恐怖をみて、笑った。

^{マジシャン}
奇術師 S I D E E N D

御神 S I D E

俺は頭痛で目が醒めた。

ここはどこだ？

そういえば任務があつた。

俺は奇術師^{マジシャン}に腹決られて……

はつと思つた瞬間、腹を見て、驚愕した。

傷が塞がつてる。完璧に、それも傷一つ残さず。

俺はその事実^{マジシャン}に驚いていたが、頭が冴えてきたら異臭が鼻につく。

俺は異臭の元を探つて周りを見る。

そしてそこにそれはあつた。

俺の後ろ、足元に、奇術師^{マジシャン}がいた。

いや、あつたと言つたほうが良いだろうか。

あの老紳士の面影は今はない。

顔の右目の部分は眼球がなく、代わりに石が詰まっている。

左目は、眼球が液状化して目からすこし垂れている。

そして、顔の左半分は、皮が剥がされ、赤い肉が見えている。

右頬は骨だけになっている。

唇は焼かれて平坦になっている。

体は……目を背けたい。

ところどころ骨だけだったり、液状化したり、皮だけだったりして、それは見るに耐えない光景だった。

なぜそれで奇術師^{マジシャン}と分かるのかは、その白髪と服で分かる。

俺は気持ち悪いと思つたが、なぜか同情心はなかった。

吐き気もしなくなった。俺が慣れている？

俺はそんな思考を打ち切り、死体に背を向けて携帯を出す。

俺は総隊長さんにメールをした。

『任務完了』

そして俺は、もう日が昇ってきた空を見て、歩き出した。

第十三話 初任務（後編）（後書き）

本格戦闘（のつもり）でした。

主人公の能力は応用すると凄い凶悪なんです。

第十四話 転校生（前書き）

外人です。

名前について気付いた人はいまいますかね？

第十四話 転校生

俺は歩いて、元きた路地裏に戻る。

そこには、朝日を浴びて立っている総隊長さんがいた。

「総隊長ともあろう人が出てきて良いんですか？」

「いや、この事は内密によろしくね」

俺は総隊長さんに近づく。

そして総隊長さんは言う。

「じゃあ……帰ろうか？」

「あの、死体はどうするんですか？」

俺は自分が殺してしまったのであろうものを言っている。
さすがにあのままにはできないだろう。

「大丈夫。そういうの専門が居るから」

「そうですか……」

「じゃあ、こっち来て。帰るよ」

俺は総隊長さんに言われ、総隊長さんの指差す方向に歩く。
そして、次の瞬間、俺は部隊のビルの屋上にいた。
行きと同じ方法だったので今度は驚かなかった。
すると後ろから総隊長さんが現れた。

「では、ここで良いから報告を」

俺は今までにあったことを全部報告した。

……俺が意識を失ったことは話していない。

使い慣れていない能力で失敗し、殺してしまったことにした。
話し終えてしばらく無言のままでいると、口を開いた。

「すみません。殺してしまつて」

「いや、良いんだよ。こちらこそすまない。

まだ中学生の君に人殺しをけしかけて」

「いえ……大丈夫です。

……今日はもう帰つても？」

「ああ。任務による特別給金はもう振り込んだいたから」

聞きなれない言葉を聞く。

「特別給金？」

「ああ。特別給金とは通常任務とは別に、このような緊急な任務の
時に、

任務関係者に部隊から支払われる給料の事だ」

「……そうですか、ありがとうございます」

「いやいや、当然だよ」

俺は挨拶をして、屋上から階段でゆっくりと下に降りる。

ビルを出てとめておいた自転車に跨り、マンションに帰る。

初めての人殺しで、少しロウテンション。

因みに言うと、今は朝5時。

約3時間の任務だった。

俺はマンションに着き、すぐに自室に入り、シャワーを浴びて着替える。

ハンガーに制服をかけ、朝食の準備をする。

夜更かし？をしたので少し眠いが我慢する。

俺は、朝食を食い終わった後、少し早いが学校に行くことにした。

学校に着く。

今度はちゃんと自転車を置いていく。

クラスに入るがまだ誰も居ない。

そりゃそうだ、HRが始まるまでまだ1時間ぐらいある。

俺は今までのことを振り返った。

ここに来てからまだ3日ほどしか経ってないのに、紫達のお陰で随分性格が丸く

なったような気がする。

だが、それと同時に何か俺の中で渦巻いてる感覚がある。

よく分からない。だが、奇術師を殺した時の、多分”ソレ”だ。

俺は今まで殺しなど勿論しなかった普通の中学生だ。

だが、なぜか俺は”殺し”に慣れている感触がする。
なにか分からない感覚。

俺はそれを、強引にでも気のせいだと思うことにした。
だって、これ以上考えたら俺が壊れてしまう気がしたから……。
俺は考える事をやめて、睡魔に従い、眠った。

「……ア……き……」

「……アイ、起き……」

「アイ！ 起きてよ！……！」

「うわぁ……！！」

耳元でいきなり大声をあげられて起きる。
目の前には紫がいる。

「紫？」

「まったく。いつまでも寝てるからそのままにしておいたけど、
HRが終わっても寝るなんて」

もうHRが終わってしまったのかと思い、辺りを見回す。
なんだか向こうの席に人ばかりが出来ている。

「なんだ？ なんかあったのか？」

俺は紫に人だかりの原因を聞く。

「今日、転校生が来たのよ。」

この3日間で2人も美少年転校生が来たことで学校中話題で持ち切りよ」

「美少年転校生？」

「そう。外国人だけど日本国籍の美少年よ。」

まあ、アイには劣るけどね」

どんな奴だろうと思う。

すると、人だかりの中から金髪の少年が出てきた。

背は俺と同じくらいで、目は蒼い。

髪は眩しい金色。顔立ちは10人に10人が振り返りそうなイケメン。

するとこちらに向かって歩いてくる。

「こんにちは、貴方には自己紹介がまだでした。」

私はハイト クラウドです。よろしく願いしますね」

と言って笑ってくる。

流暢な日本語だ。一応日本国籍だから長い間日本に居るのだろう。とか思いながらこちらも挨拶をする。

「俺は御神 哀。よろしくな。」

えっと……」

どう呼んだら良いのか悩むと相手が言ってきた。

「ハイトで良いです」

「そうか、じゃあ俺の事は哀でいいよ」

「そうですか。哀。これからよろしくお願いします」

そう言つて、軽く頭を下げる。

「いいつて。そう何度も挨拶しないでいいから。
俺達もう友達だろ」

するとハイトは顔を上げて笑う。
俺もそれにつられて笑う。

……なんか女子のほとんどから「絵になる」とか「哀クン×ハイ
トクン……」

とかいう声が聞こえたのは無視しておこう。
というかほとんどが顔を真っ赤にしている。気絶している人までい
る。

……これから大変そうだと思つて長い溜め息をついた。
すると後ろから声がかかる。

「ハイト君、私達と一緒に行動しない？
模擬戦とかで、ハイト君人気ありそうだから大変よ？
それに変な目でみる奴も居ないし」

と不知火が言う。

「いいですよ。理由は置いて、哀と一度戦つてみたいです」

「俺と？」

俺が問う。

「はい、そうです。哀は強そうで楽しそうですから」

「そうか………そういえば1限目はなんだ？」

俺は紫に聞く。

「今日は1ヶ月後にある能力武闘大会の代表決めよ」

「「能力武闘大会？」」

聞きなれない単語に眉をひそめる俺とハイトだった。

第十四話 転校生（後書き）

大会はやっぱ必要でしょ。

因みにこれがある事の区切りになるでしょう。

第十五話 代表決め（前書き）

みんな無茶苦茶な戦い……

第十五話 代表決め

「『能力武闘大会？』」

俺とハイトは同時に疑問を紫に言う。
すると紫はハアと溜め息をついてから言う。

「ハイト君が知らないのはしょうがないとしても、
アイまで知らないなんて……。
この学校の説明読まなかったの？」

「そんなもの知らないぞ？ それより大会ってなんだよ」

すると紫はまた溜め息えをついて説明し始める。

「能力武闘大会っていうのは、年に一度開催される『H E A V E N』
の中にある

学校が集まってやる、その名の通り武闘大会よ」

それにつづいて後ろから不知火が続ける。

「代表っていうのは、その学校の交流大会にでる、
それぞれの学校から選出される選手のこと。
どの学校からもSクラスから出るから、ウチらのクラスで代表決め
んの」

俺とハイトはその説明にナルホドと頷き、そしてハイトは言う。

「では、このクラスからでるような上位の選手は誰なのですか？」

するとさらに向こうから聊爾が自信に満ちた声で言う。

「そりゃあ、俺達だよ。だってクラスの第5位までいるんだし」

「そ、それは分からないよ……他の人だって頑張ってるし」

聊爾の発言に困った顔で言う琴雪。

そこで不知火が言う。

「まあ、とにかく訓練所行きましょう！

遅れるわよ！」

俺達は時間をみて、慌てて訓練所に向かった。

そこで俺は驚く。

「すげえ……もう直ってる……」

そう、俺がこの前ぶっ壊した天井や壁が綺麗に傷一つ残さず直っていたのだ。

いくらなんでも早すぎだが、それほど上手く直したのだろう。

俺達は先生と皆がいる所に走った。

「それではこれより代表決めを行う。

代表決めは、クラスでグループごとに6つに分けられており、力配分は均等にした。

因みに言うと、第1位から第5位はみんな違うグループだな！
ルールは気絶するか降参するか、こちらの判断で決めた勝敗だ」

その言葉を聞き、先生に対して野次が飛ぶ。
しかし先生はそれを無視し、言う。

「それでは、グループごとに前にでろ！まずは1グループ！」

「俺だな！」

そう言って聊爾が前に出て行く。
ハイトが聞く。

「聊爾さんは強いんですか？」

俺は答える。

「ああ、俺でもやばかったぐらい強い」

「それ、アイが言ったただの嫌味よ？」

紫に茶化される。

「うるせーな。それで、俺はグループどこだよ？」

「哀さんは4グループです」

琴雪が言う。

「聊爾くんが1、紫さんが2、不知火さんが3、哀さんが4、私が5、そしてハイトくんが6です」

「……本当にバラバラだな……」

俺はその事実には溜め息をつきながらも前を見る。

そこには、聊爾しか立っていなかった。

もう始まってたのかという疑問はさておき、他の奴らはどこ行ったんだと

周りを見る。このクラスは30人なので、残りの4人を見失うわけが無いのに。

すると、俺達の更に後ろに、居た。

4人が倒れて重なって、なんだかともないことになっていた。

「代表、荒祇聊爾！」

先生の声が響く。

聊爾がこちらに走ってきた。

「やっぱり言っただろ」

「はいはい、次は紫か」

「じゃあ、行ってくるわ、アイ」

紫はそう言い、前に出て行った。

先生が試合の始まりを宣言する。

その瞬間に、紫はもの凄い速さで1人の背中に行き、触れる。

そして、その生徒はもの凄い形相で訓練所から叫びながら出て行った。

その光景に呆然として隙がある残りの3人に次々と紫はその手で触

れていく。

1人はその場で泣き崩れ、1人は白目を剥き泡を吐いて倒れ、1人は顔を真っ赤にしてその場で身悶えている。

……………紫の能力ってやっぱり恐ろしい……………。

「だ、代表、佐屋紫！」

先生までもその地獄絵図を見て、同様している。
紫がうれしそうにこちらに駆けてくる。

「やったわよ、アイ」

「けどあれはやりすぎだろ……………一体なにを……………」

すると紫は黒く微笑して聞いてくる。

「ほんとに聞きたい？」

「いえ、やっぱりいいです……………」

俺は背筋が寒くなる思いで丁重に断った。

……………代表決め、なんかやばいな……………。

そう思い、更に気が重くなった俺だった。

次は不知火。不知火は多分まともにやってくれるだろう、と思っていたのだが……………

「代表、不知火奏華！」

「……はあ……」

俺は溜め息をつく。

なぜなら、不知火までもまともな勝負をしなかったのだ。

内容は、始まりの合図とともに地中から溶岩を回りに噴出させて、これまた黒い笑顔で脅した。

あの時の不知火は、いつもとなんか違った。

同じグループには、溶岩までも防御できる奴が居なかったので、あつけなく降参。

それで今に至る、という訳だ。

「やったぞ！」

不知火は喜んでいるが、他の奴には心的外傷トラウマになっただろう。

次は俺だ。

紫から、あなたも本気でやりなさいと言われていたので頑張ろう。

俺は前に出る。

そして先生が始まりの合図をする。

俺は風の向きを計算して、俺を中心に小型の、だが風速はある竜巻をつくり、

ほかの奴らを吹っ飛ばした。

「代表、御神哀！」

「……これもまとも、じゃないよな……」

俺はそう呟き、皆の所に帰る。

するとハイトがこっちに来て言う。

「凄いですね、哀」

「いや、ありがとう」

俺たちは皆の所に一緒に行くと、琴雪がゆっくりと立ち上がって、前に出て行く。

「……………行つて来る……………」

琴雪は……………いや、あれは裏琴雪か、はユラユラと前に出て行き、戦闘を始める。

しかし、裏琴雪が手をかざした瞬間、

他の対戦者がみんな凍りの牢にいられた。
その氷の牢は、中がどんどん凍り付いていく。
そして裏琴雪は言う。

「……………降参、しないと、氷付け、確定……………ふふっ……………」

背筋が凍った。

この気持ちを味わったのは俺だけではないだろう。
対戦者たちはみんな青ざめて、恐怖のあまり言葉を詰まらせながらも降参の宣言をした。

「……………代表、涼風琴雪……………」

その瞬間、牢は砕け散った。
琴雪はこちらに歩いてくる。

「やったよ！ 勝った！」

琴雪はうれしそうだ。

……良かった。『裏』じゃない。

………次はハイトか。

俺は見ることがない能力にたいして、期待を持っていた。

第十五話 代表決め（後書き）

琴雪がなんか怖いです。
あ、『裏』のほうね。

幕間（前書き）

ここでのなにかの思わせぶり

幕間

ここは、『H E A V E N』の外にある施設。

なかには、肉が腐った匂いがたちこめていて、おもわず鼻を覆ってしまう。

中には、一人の研究者風の老人がいた。

頭には白髪が数本残っているだけで、後は全部抜けている。

その身に纏う白衣は薄汚れていて、年月が経っているものだ と推定される。

そしてその男の顔には、狂喜の表情が映し出されていた。

「やったぞ！ 遂に長年の人類の夢が叶った！

私は天才だな！ 私の研究作品の公開はもうすぐだ……。

今は仕込みの時期。焦らない、焦らない」

老人はふと後ろを向き、階段を降りる。

その先には、巨大な試験管のようにも見える培養装置が所狭しと並んでいる。

そしてその中には、胎児と思われるものから、老人のもの、色々なナニカがその中に入っていた。

「もうすぐだな。やはり失敗作を残しておいて良かった」

老人はその培養装置の中の緑色の液体に浮かんでいる少年を見た。それは、中学生ぐらいにも見える少年。

それを、わが子を見るような目で見て、老人は笑った。

「……『H - C R 2』、早く見てみたい……」

そしてここはまた違う施設。

その中の一室、そこには大きなテーブルと、その周りに椅子がたくさん並べられていた。

そこには、男と女がいる。

「もうすぐ、だな。ここまで時間をかけた成果がもうすぐ出せる」

女が答える。

「はい。苦労しましたが、これもすべて安寧なる能力者の自由の世界のため……」

そして女は男に敬礼する。

男はそれに敬礼を返す。

「能力者の自由なる世界のため……か……」

幕間（後書き）

2種類の思わせぶりだったよ！
まあ、この事は色々予想してみてください。

第十六話 俺は……（前書き）

今回は晴れのち雨でしょう。

第十六話 俺は……

ハイトが前に出る。

「ハイト君って強いのかな？」

琴雪が聞いてくる。

「まあ……Sクラスに入ってるんだし、強いんじゃないのか？」

俺は曖昧に返事をし、改めて前を見る。

ハイトの他に4人出る。

そして皆が定位置についた所で、合図がされた。

「開始！」

そして、ハイト以外の4人は動いた。

1人は自分の周りに火を出す。

1人は物凄い速さで加速し、ハイトの後ろに回っている。

後の2人は、お互いで何かの能力を出し合って戦っている。

そして、ハイトの後ろに回りこんだ奴がキックをする。

しかしまだハイトは動かない。

何をしているんだ？と俺は思った。

しかし、その疑問は一瞬で拭い去られた。

なぜなら、次の瞬間。

全ての人の動きが止まった。

だれも、動きを中断して動こうとしない。

何が起こったのか分からない。

皆も啞然としている。

そして、4人は同時に降参を宣言した。

ハイトが何か言っていたような気がしたが聴こえなかった。
そして先生が試合の終わりを宣言する。

「代表、ハイトクラウド！」

俺はハイトに駆けて行って、言った。

「ハイト、何をしたんだ？」

俺は自分でも分かるくらい興奮して聞く。

「それは、秘密、ですよ」

「なんだよ……」

結局、ハイトは何も自分の能力に関して喋ってくれなかった。

俺はチラッと他の4人を見たとき、

皆、顔が青ざめていて、首に細い切り傷があったように見えた。

俺はハイトが、目に見えない何かをしたことまでは分かった。
しかしそれ以上が分からない。

俺はどうしてもハイトの能力が知りたくなって、
能力を調べる方法を、授業中ずっと考えていた。

そして、昼休み、俺は思いついた。

簡単に相手の能力が分かる方法があった。

試合を申し込むんだ。それ以外方法は無い。

俺は先生の所へ行き、事情を話した。しかし断られてしまった。
曰く、能力武闘大会が近いのに、代表同士戦わせて怪我されたら
学校に責任が取れないらしい。

どうしても模擬戦をしたい場合は、大会が終わってかららしい。

俺は、潔く諦めた。

そして俺も、大会の後の模擬戦目指して特訓をしていた。

……普通、大会の方を優先するのだが、それは置いとこう、うん……。

その日の授業が終わり、俺は一目散に家に帰った。

……次の日、話を聞かなかった罰として、みんなから色々されたの
は割愛。

だって心的障^{メンタル}害だもの。

そして、俺は今、マンションに居る。

先生の話だと、代表は、部隊の訓練室を特別に借りて、大会の準備
ができるらしい。

俺は明日に備えて早く寝ておこう。

そう思って俺はベッドに入った。

琴雪？

『おきて！ 哀くん！』

紫？

『お・き・て・ア・イ』

……ハイト？……

『ふふ、起きてください。哀君……』

「うわーーーーー！！！！　　っはあー！」

……なんだ？　何か恐ろしい夢を見ていたような……まあ、気にしないでおこう。

だって気にしたら負けだし。

俺は今日は皆と部隊の訓練所で特別授業だったことを思い出す。

俺は朝飯を食い、外にでる。

悪夢？つばいので早めに起きたが、俺も学習する。

二度寝はしない。俺は時間に余裕がありそうなので歩いていくことにした。

俺はまだ朝が早く、どこも開いてない商店街を歩いている。普通にこのまま行けばまだ早く着くだろうと予想していく。しかし、俺のその計算には誤算があった。

そう、『普通』でないことが起こってしまった。

「ぎゃああ……」

どこからか聞こえる男の小さい悲鳴。

その声の小ささと

まだ時間が早いからか誰も出てこない。

道には俺一人。

俺は気になり、また路地裏に入る。

というかこの頃路地裏トラブル多いな……と自分でも思う。

しかし俺のその冗談の考えは一瞬にして無くなった。

目の前には、3つの、首と胴体が離れている死体があったからだつた。

「っ……………」

俺はその死体の顔をみた。

まるで最後まで拷問されて殺されたように、ゆがんでいた。

俺は、いままでいろんな死体を見たからか、あまり吐き気とか、気分悪くなるのとかは、どんどん薄くなっていた。

これが『慣れ』だともった。

自分がこの前、人を殺したときよりもなにも感じない。自分が酷く冷たい人間に思えてきた。

しかしその俺の感情と同じようになっていたその静寂を、悲鳴が破った。

「きゃあああああああああ！」

俺は咄嗟に後ろを振り返る。

そこには、

琴雪がいた。

琴雪の顔は、こちらを見て、恐怖で固まっている。

死体に、それを無表情で見下ろす俺。

俺は琴雪が俺を疑っているのに、気付いた。

「違うんだ！ 誤解だ、琴……」

「近づかないで！ あっち行って！」

俺の言葉は信じてもらえなかった。

琴雪は俺がそれでも近づこうとすると、悲鳴をあげて逃げていった。俺の心には、なぜか酷い空虚感が広がっていた。

第十六話 俺は……（後書き）

こんど、すこし長くしてみたいですね。
因みに、まだハイトの能力は秘密です。
しかし、考えるなら低く考えたほうが無難ですよ？
ですが俺は……

第十七話 俺の殺人と無骸の蘇生（前書き）

総隊長の能力の詳細がついに！

第十七話 俺の殺人と無骸の蘇生

……俺は今、部隊のビルの一室にいる。

その部屋には、机が一つに椅子が二つある、尋問部屋だった。机を挟んで目の前には、部隊の下っ端らしきオッサンがこつちを睨んでくる。

しかし、俺はその視線を無視し、別の事を考えていた。

俺は、琴雪のことが気になっていた。

あの時、琴雪は絶対に俺を見て怖がった。

多分、あの時の俺は、人殺しの顔だった……と思う。怖い思いをさせたし、そして誤解を招いてしまった。

俺は溜め息をついた。

が、その仕草が勘に触ったらしく、相手が怒鳴ってくる。

「おらあ！ なんとか言えよ！ お前はあの場所で何をしていた！ さつさとそれを聞き出さないといけねえってのに、答えるよ、殺人犯！」

「……それはどこで決めた？」

俺は真っ先に俺を殺人犯と決め付ける相手に対して、すこし殺気を込めた。

それが俺なりの、『人殺し』ではないという逃げなのかもしれない。しかし、その殺気に気がつかない相手は更に罵倒の言葉を浴びせる。

「ああ？ そんなの決まってるじゃねえか！ 第一発見者の女だよ！」

しかし、殺気を放っていた俺は、その言葉で一瞬放心状態になった。

……琴雪が？ この疑いが晴れたらまた普通にしていける、と思ったのに……

俺は悲しくて、辛くて、あんなにも仲が良かった琴雪に、怖がられて、誤解されて、

それだけではなく、あまつさえ、真っ先に決め付けたのが琴雪？

「なんだよ、急に黙っちまって、なんだ？

その女の子に惚れてでもしてたのか？

はっはっは！ こいつはいい！ 例えそうじゃなくても友達に裏切られた気分はどうよ？」

その言葉を聞いて、俺はもう我慢ができなくなってしまった。

「黙れよ……」

「は？」

「黙れって言ってんだよおおおおお！」

俺はその事実から、例え本当に殺人などしていなくても、

琴雪に裏切られた事が、なによりも辛かった。

それは自分勝手のエゴかもしれない。

ただ、怖がられるのが嫌なだけかもしれない。

でも、俺は………

その時、声が響いた。

頭の中に直接響くような声。

ノイズがかかっている、壊れたスピーカーのような酷い音。
その声？は言った。最後の言葉だけハッキリと聞こえた。

『奪いたければ殺す。守りたくても殺す。逃げたくても殺す。それがニンゲンの本能』

そう、それは、まぎれもない……………

俺自身の声だった。

そして俺は気付く。

頭の中の声に気をとられていた。

時計を見ると、先程から5分も経っていた。

？なにかが時計のガラスについている。

それは蛍光灯の光を反射し、赤黒く輝いていた。
やけにヌメヌメとした脂っこい物体。

俺はそのまま上のほうにある時計を見ながら、立ち上がる。
しかし、足元が滑る。

なんだ？と俺は下に目を向ける。

そこには、

赤い海が広がっていた。

まさしく、血の海。目の前の壁には人型の皮袋が縮れている。そしてそれを中心に、血が流れている。

部屋が狭いので、本当に水溜りのようにたまっている。

そう。一言で表すならば、血が全て抜けた皮袋があった。

「そんな……俺が、また？」

「あー、またやってくれましたね、御神くん」

俺はその声に驚き、後ろを振り向く。

そこには、総隊長さんがいた。

「……俺がやったんですか？」

「そうだよ。その様子だとまた暴走したみたいだけどね……」

俺は総隊長さんに聞く。

「俺は、本当に関係ない人を殺してしまいました。

俺はどんな罰でも受けます」

俺は自分の気持ちを素直に言う。

しかし総隊長さんの答えは意外なものだった。

「なに、罪などではないよ。それどころか君はお手柄だよ」

「……はい？」

総隊長さんは人だったものを指差し、言う。

「この男はね、『スパイ』なんだよ。」

その名も能力者解放戦線『HUMAN』の、ね」

「『HUMAN』、ですか？」

「『HUMAN』とは、能力者を保護し、拘束することに反対し、
アンインストール
『Uninstall』どころか世界政府にまでテロやクーデター
を起こす奴らです。」

そいつらのスパイがコイツなんですよ」

そう言い、総隊長は皮袋を踏む。

「でも、俺が関係ない人を殺してしまったのは事実です。
俺はどうすれば……」

「じゃあ、死んでなければいいんだ。
私の能力を見せるよ。名は『完全削除』。
アンインストール
発動内容、対象の『死』という事実と『嘘』という概念を……」

「……」

『削除する』

その瞬間、世界の本当に小さい一部が改変された。

「信じられない……」

俺は呟く。目の前には、あの、スパイのオッサンと、能力を使って一息している総隊長さんがいた。

「これが私の能力。

全ての概念、森羅万象を、削除する力。

……まあ、削除しか出来ないのがチョットね……」

さりげなくサラリと凄いことを言う総隊長さん。
俺はその総隊長さんに心の中で、一生懸命感謝した。

「よかった。なにもなくて……」

しかし総隊長さんの目つきが鋭くなる。

「さて、次は……スパイに尋問をしようか……」

第十七話 俺の殺人と無骸の蘇生（後書き）

いろいろありますよ……。

展開早くないですかね？

何かあったら感想に書いてください！

第十八話 皆を信じるコト（前書き）

幕間と関連付けられるか、ですかね？

第十八話 皆を信じるコト

総隊長さんはオッサンを睨む。

そして、驚き顔のオッサンに告げる。

「そろそろ正体を現せよ。お前、能力者だろ？」

するとそれを聞いたオッサンは、いきなり立ち上がると、姿が変わった。

まるで顔から体まで全てが別人のように。

その正体は、なんと女だった。

容姿端麗、という言葉がよく似合いそうな女で、長髪は真っ赤に染まっていた。

「まったく、ばれてて、それでいて姿を見せないなんて無理だわ」

嘘がつかないことが分らないのか、その女は言う。

…… ああ、そうか。総隊長さんが女の『嘘』という概念そのものを消したからか。

だから女は嘘そのものを知らないと言うわけだ。

「お前は……『HUMAN』か？」

総隊長さんはいきなり核心をつく。

それに対し、女は言う。

「……そうね、そういうことになるのかしら？」

「その曖昧な答えはなんだ？」

「……私はこの部隊の誰かに変装して殺人をして、その罪を御神哀
つて奴に

擦り付けて、更に御神の能力を探ることよ。

その命令に従ったは良いけど、誰に命令されたか思いだせないし、
なにか途中で目の前が真っ暗になったと思ったら、この状況ってわ
け」

女は本当に色々教えてくれた。

しかしなぜだ？

この女の話し具合からすると、狙いは俺にあるみたいだ。

「お前は、なんだ？」

総隊長さんは女に聞く。

「私は、『H・CRO（ホムンクルス・コードリプレイnny）
』よ」

「ふざけるな！ 普通の名前を言え！」

「……私は……」

そう女がなにか言いかけた時、それは起きた。

女がいきなり爆発した。

それは、体内に強力な爆弾を仕掛けていたような
凄まじいものだった。

そして、それほどの爆発がこの狭い室内で起きたらどうなるか、
もうお分かりだろう。

「うわあああああ！」

俺は咄嗟のことに、能力を使うのを忘れ、叫んだ。

……しかし、爆発の衝撃はこない。

俺は前を見ると、爆発もなにもなく、
代わりに総隊長さんがいた。

「まったく、こんな場所で爆弾なんて使うものじゃないですよ。
それにこういうのは御神くんの方が対処し易いんですから、
もうちょっと訓練頑張りましょう？」

ふふ、と総隊長さんが笑い、そんな事を言う。

しかし、あの女は？と思う。

「……あの女は？」

「死にましたよ。あんな強力な爆弾を体内で起こされたんですから、
もう粉々で塵も残ってませんよ」

……それはやはり組織に口封じされたということだろう。

俺はそのまだ名しか分からない組織に対して、酷い嫌悪感と
怒りを覚えた。

すると総隊長さんが言ってくる。

「……君にはいつかちゃんと事情をお話しますから、
とりあえず今だけは時間を下さい」

「……………分かりました」

俺は、部隊の事情も考え、渋々ながらも納得した。

「御神くんの友達には事情を話してください。」

彼らも知りたいでしょう。彼らは第1会議室にいますので」

「……………いいんですか？」

「私が、許可します」

俺はなぜかは追及せずにゆっくりと、そして丁寧に
総隊長さんに感謝の意を込めて礼をした。

俺は今、部屋の前にいる。

その部屋の入り口ドアには、『第1会議室』とある。

俺は、入るのに緊張してきた。

皆は俺をどう思うだろう？

もし怖がられたとしても、俺はあいつらだけは殺したくない。

俺は覚悟を決め、ドアを開けた。

「グバッ！」

……なんの音だろうか？

この声は、俺？

あれ？なんだか天井が正面にある。

なんか地面に落ちる。

痛い。

「……………って！ 何をするんだよ！」

俺は前にいる、俺を殴り飛ばした張本人、不知火と紫に言う。
そう、ダブルパンチだった。

不知火と紫は口を揃えていう。

「「琴雪を泣かせた罰！」」

すると後ろから弱い声が聞こえる。

「もう、大丈夫だから、私が悪かっただけだから……」

琴雪だ。前にできて不知火と紫を止める。

そして必然的に俺と目が合う。

俺は謝ろうとする。

「あんな、琴雪、その……」「ごめんっ！」「……は？」

いきなり琴雪が謝りだした。

「ごめんなさい！ わ、私、怖くて、一瞬でも、哀君のこと怖いとお、おもちゃって！ほんとに、ご、ごめんなひゃい……」

琴雪の目は謝罪の言葉を紡いでいくたびに、どんどん涙がたまってい
いく。

そんな琴雪を見て、俺はそのまま琴雪を抱いていた。
背中をさすりながらいう。

「もういいんだ。もう、気にしてないから。
俺のほうこそ悪かった。」

もう、お互い様だ。もう謝らなくていいから。

……これからも、よろしくな、琴雪」

「哀、君……アイ君！」

琴雪は俺の腕の中で泣いた。
俺はそれをずっと抱いてやる。

その時の俺は、もう皆に隠し事をする気はなかった。
皆に知ってもらって、理解してほしかった。

……もしかしたら、一番慰めてほしいのは……

第十八話 皆を信じるコト（後書き）

主人公、すこし精神的に成長？しましたかね？
というか本当に中学生ですかね？

第十九話 理解（前書き）

なんか感想がないよ！

あと短いしか書けないよ！

第十九話 理解

俺は全てを皆に話した。

俺が、つい最近まで『外』にいたこと。

そこで、能力が暴発して人を殺したこと。

それを紫に見つかって、そのまま『HEAVEN』に入ることになったこと。

俺の能力の希少性と秘匿性が分かり、部隊配属になったということ。そして、任務中にまた人殺しをしたこと。

さらには、先程のこと話した。

「……これが俺が隠してきたことだ。

皆、俺が怖いと思ったら離れても良いんだよ……」

皆は沈黙する。

それはそうだろう。

友達が実は人殺しだったなんて……。

するとまた不知火と紫が動く。因みに今度は琴雪も混ぜて。

なんだ？と俺が思っているといきなり、
きがんとすべしやる
トリプルパンチ！！をくらった。

「グバハあつ?!」

俺は殴られた頬を押さえて床で悶える。

「あんたね！ また何かウジウジしたこと考えてただろ！

私たちはそんなこと気にしないから！」

と不知火。

「まったく、私はいつも、常にアイのことを理解しているつもりよ？
そうじゃないと部隊に入れさせたりしないわよ」

と紫。

「……哀君、もう何も気にしないって言ったじゃないですか。
私はもう、哀君がどんな事をしても、ずっと一緒にいますから！」

と琴雪が言う。

……そうか、俺が間違っていた。

俺は気にしすぎて、逆に皆を信じきれなかった。
ふと3人の後ろにいる聊爾と目が合う。

聊爾もフツと笑う。

皆は、こんなことで友達を捨てる訳ないのに！

俺は、改めて他人を信じなくなった。

「……皆、ありがとう」

と俺は皆に感謝する。

もう裏切りたくないという思いを込めて、感謝する。

不知火は、

「バカヤロー、今更かよ！」

と言ってくれる。

紫は、

「ふふ、アイに感謝されるなんて、なんだか嬉しいわ……」

と言ってウフフと悶える。

……なんか怖い。

琴雪は、

「もう、私達から離れないで下さいね……。　（特に私から）」

顔を真っ赤にして言う。

最後になにか呟いたがよく聞こえなかった。

すると聊爾が手を打ち鳴らす。

「よし！ 皆！

もう話は済んだな！　俺もお前の事は気にしてねえから！
じゃあ、行こうぜ！」

俺や3人は首を傾げる。

「……何処へ？」

すると聊爾は顔を前に傾け、ハアと溜め息をついてから言う。

「……大会の訓練」

「「「あ!」「」」

「あつて、お前ら……」

俺達は、急いで訓練室へ向かう。

……もう、いつの間にかもうすぐ昼だし……。

「そういえば、紫と哀は部隊に秘密裏に所属って言うてたけど、訓練室には行ったことあるの?」

と琴雪が聞いてきた。

「ああ、前に何回か、な」

ここに来たのは、実は転入した日以外にもある。
だが、この話はまた今度。

俺達は地下の訓練室に向かう。

皆が集まる。

俺の前には俺以外、紫、琴雪、不知火、聊爾がいる。

なぜこうなったかつて?

……それは、大会に向けての訓練の時に、

俺の能力は強すぎるから、1対4でやろうと皆が言ったのだ。
因みに、ハイトは今日は用事があるらしいから休みだ。

というか、理不尽だ。
無理だな。

しかし、皆は以外と残酷だった。

無慈悲に試合開始を告げる聊爾の声。

その瞬間、氷柱の束と岩石の雪崩がいつきに俺の目の前まで来た。

……まじで理不尽あんど無慈悲あんど手加減なし。

第十九話 理解（後書き）

何度もしつこいようですが、作品途中でも良いですから、感想をください！

第二十話 模擬戦1対4！（前書き）

バトルシーンは以外と楽に書ける……のかな？

第二十話 模擬戦1対4！

俺は能力を使う。

俺の体の前全体に空気を放出し、すばやく後ろに移動する。
目の前に落ちていく岩と氷。

……あんなの食らったら死んじゃう。

俺は後ろに走り続けながら皆に聞く。

「そついえば、本当の能力使っていいんだっけ？」
すると皆がこう返す。

「……いいよ！ 面白そうだし！」

4人とも良いみたいだ。というか面白そうって……。
よし、それじゃあ久しぶりに使ってみますか。

俺は地面に手をつく。

それをみて何か感じたのか不知火がこちらに岩石を飛ばしてくる。
さすがだな、やはり大地の使い手だ……。

しかし、

「もうおそいよ……」
『ランドナバーム 大地噴火』……なんちゃって」

俺は不知火の能力を真似し、溶岩を噴出させる。その中に岩石が入って融ける。

溶岩の奔流が皆に襲い掛かる……前に聊爾が空間を割ってそこに溶

岩を流し込んだ。

すると不知火が驚いた様子で言ってくる。

「なんだよ、今のは！　どうやってやったんだよ？」

「正確に言うと、不知火の『ランドナバーム大地噴火』とはちよつと違う」

不知火は不思議そうに首を傾げる。

俺はそのまま続ける。

「俺がやったのは、不知火みたいに地中深くにある溶岩をそのまま持ってくるんじゃないくて、

俺が触った地面を間接して奥の地面を溶岩化させた。

まあ、これは何回もやってると地盤が崩れちゃうけどね」

「なるほどな、じゃあそれはもう使えないって分けた！」

俺が説明を終えると同時に聊爾がそう言い、こちらの後ろに回る。どうやら空間を渡ってきたらしい。

これは模擬戦なので武器は使用しても良い。

勿論、大会でも良いらしい。

聊爾は模擬戦用の刃が潰された刀でこちらに攻撃してくる。

「おっと！」

俺はそれをよける。

と同時に風を操り、聊爾を吹き飛ばす！

しかし、聊爾は刀を咄嗟に地面に突き刺し、それを耐え凌ぐ。どうやら俺の風は予測していたらしい。

すると、琴雪のものらしき氷柱が飛んできた。

俺は避け切れなかった。

この立ち位置とタイミングではかわせないとふんだ。

しかたなく、俺は『切り札』をだした。

前々から思っていた。

俺の能力を応用すれば、どんな攻撃も消せるのではないかと。

俺の能力は何度も言っているが応用が無限に広がる。

だからこそ、俺はいつもどんな応用ができるかを考えている。

俺は能力応用をした。

皆が驚きと好奇心にみちた顔をしている。

なぜなら、俺が飛んできた氷柱を、俺の肌に当たった瞬間に蒸発させたからだ。

俺は考えた。

俺の能力は物理法則など普通に無視する。

俺は、自分の周りだけに神経を集中させ、触れたものは全て蒸発するように能力を使った。

これがあれば、まさしく核が来ても放射能を無害な物質に変え、無効化することが出来る。

この能力は本当にとんでもない物だったらしい。

……後で総隊長さんに聞いたんだが、俺の能力は秘匿性が更にあがり、
国のお偉いさんには『核にも負けない』というキャッチコピーが宣伝されたとか……。

それはともかく、俺は氷柱を消した後、琴雪に近づいた。
風で高速移動し、後ろに回る。

これは学校の順位決めの時と同じ手。
だがそれは通じなかった。

俺の手刀は、琴雪の首に当たった瞬間、凍りついた。

俺は驚く。やはり、皆は俺と戦ってどんどん能力を応用していつて
いる。

俺は肌にふれた『氷』のみを蒸発させるようにし、攻撃するが、大
量の氷が襲い掛かってくる。

いくら肌にふれた氷を蒸発させると言っても、相手の物量が多けれ
ばこちらが押し負ける。

俺はそのまま、吹き飛ばされた。

……その先に、紫がいた。

紫は綺麗で滑らかな動きで俺に攻撃を繰り返す。

……はつきり言うと、格闘戦はやはり紫が上だった。

経験の差、というやつだった。

俺は遂に倒され、紫に肩を掴まれる。

「これで私達の勝ちね……」

その瞬間、俺の体になにかが入ってくる感触。

紫の能力と気付いた時にはもう俺は、気絶していた。

「ん……」

俺は目が醒める。

ここは……ベッドの上。

さっきのは夢だったのか？　だとしたらどこから？

と俺が考えていると、目の前にいつの間にかあったドアが開く。

……そこには、裸の紫がいた。

その豊満なモノが露になる。

「グハア！　紫！　な、な、なに、何を……」

俺はこちらに近づいてくる紫をなるべく体を見ないように見る。
紫は色気を込めた流し目でこちらを見て言う。

「何って、私はいまこんな格好で、ベッドにいるのよ？
分かってるんでしょ？　ア・イ？」

そして俺は……その後、紫に……

「ぎゃああああああー！」

目が醒めた。

「はあ、はあ、はあ」

俺は周りを見渡す。

ここは、部隊の治療所。
ベッドの上。

目の前にある扉。

俺は荒く息をしながら前を見る。

……すると、すぐに扉が開く。
そこからは、紫が出てきた。

「ぎゃああああああー！」

俺はその日一番の叫びをあげた。
すると紫がこちらに寄ってくる。

「何よ、アイ。いきなり叫び声なんてあげちゃって。
何か人に見られちゃいけないことでもあったの？」

と、わざとらしくこちらを見る。

「別に、そんなわけないだろ……」

すると紫が顔を赤くして俺を指差して言う。

「そういつ前に、その、り、立派なモノをどうにかして……」

俺はなんだ？と首を傾げるが、その答えはすぐに分かった。

「うわあー！」

俺は下半身を素早く毛布で隠す。

……やっぱりあの夢が原因だろう。

俺は紫に聞いただす。

「おい、紫。

あの夢はお前が見せたのか？」

「……確かに私は、アイが私についての夢を見るように、脳に働きかけたけど、
どんな夢をみるかはアイが私のことをどう思っているかで決まるはずだけど？」

「……………」

俺は一瞬で喉が干上がった。

俺が紫のことをどう思ってるかって！

嘘だろ？ 俺の精神本当はあんなことを思ってたのかよ！

しかも紫に見られたし！

俺は恥ずかしくて死ぬかと思った。

「まあ、アイのアレを見る限り、どんな夢を見たかは予想つくけど
……フフッ」

当の本人である紫は嬉しそうに頬を紅潮させ、俺は恥ずかしくて頬を紅潮させていた。

……まじで、嘘だろ……………

第二十話 模擬戦1対4！（後書き）

……哀は紫にもフラグを立てたようです……。
というか、立たせられた？

第二十一話 去年の大会（前書き）

凄いシリーズ。

第二十一話 去年の大会

俺はその後、普通に復活して、訓練を続けた。
それから何回も皆で集まって訓練をした。

皆で訓練をすると時間が経つのが早い気がして、あっという間だった。

……途中からハイトが訓練に加わったけれど、結局能力は教えてくれなかった。

そしてあっという間に1ヶ月が過ぎた。（省略と言うな）

訓練をしている内に、段々皆の能力がどんなタイプなのか分かってきたのだが、

なんと言うか……なぜか前衛タイプが多い。

俺は言わずもがな中衛タイプ。だって風使いつてことになってるし……。

そして、遠距離タイプが琴雪。氷はある程度遠くまで作れるし、
なによりこの中で一番体術がダメだったからだ。まあ、本人には言わないが。

そして、前衛が、聊爾、紫、ハイト、不知火だ。

聊爾は基本は空間を渡り、刀で攻撃するし。

紫は接近しないと能力が使えない。体術も一番強いし。

ハイトは、自分で前衛が良いと言って来た。そのほうが都合が良いらしい。

不知火は、無闇に前にいると、岩石などの餌食になるからだ。

そついう分けて、超攻撃タイプの布陣ができたのだ。

因みに言うと、大会は、『個人戦』と『チーム戦』の二つある。

チーム戦はそれぞれの学校から6人のチームを作り、色々な仮想フィールドで戦う攻略戦だ。

個人戦は、その代表の中からそれぞれ1人ずつ選ばれた選手がバトルロワイヤルをするというもの。

なぜバトルロワイヤルかというと、普通に『HEAVEN』内の学校の数が少ないからだ。

ちなみに俺が個人戦に出場する事になった。

皆によると、やっぱり俺が一番強いかららしい。

……俺はそうは思わないのだが、みんながそう言うので出る。

さて、俺達は今、大会の場所に来ている。

と言っても、場所は内の中学の校庭なのだが。

ここの校庭が一番広いかららしい。

結構な見物客が来ている。勿論ほとんどが能力者だろう。

中学生のレベルがどれ位か見たいのだ。この大会には全中学校がでるし。

『UnInstal』のスカウトも来ている。

因みにスカウトに混じって、飛騨さんが来てるのは……気のせいに違いない。

というか久しぶりの出番だな飛騨さん。

俺は皆と共に選手控え室に行く。

「というか、今回人多すぎ！　なんで全校に人が揃ってる訳？」

聊爾が言う。

俺が聞き返す。

「揃ってるって？」

「それは、去年の時は、1年だった事もあるかもしれないけど、ちらほら団体戦に6人揃ってないところがあったのよ」

紫が隣で言う。なんか鬱陶しそうだ。

「そういえば、去年勝ったのはどこなんだ？」

俺が聞くと、ハイト以外は皆悲しげな表情をして、俯いてしまった。俺はハイトに視線を向けると、ハイトも、さあ？と言った表情をしていた。

するとしばらくして琴雪が言う。

「その、ね。　去年にね、ちょっと事故があってね……」

すると不知火が顔を上げて言う。

「ちょっと、琴雪！」

「いいんだよ。言っても、良いでしょ？　奏華……」

すると不知火は「いいよ……」と言ってまた顔を俯かせる。

「ちょっと私達には辛い記憶なんだけど、団体戦で事故があったの。能力者同士で能力のぶつかり合いになって、誰かが怪我したりすると、

大会本部が処置をとるんだけど、それが間に合わなくて、私達1年の部のチームを率いてた、1-Sの第1位、不知火 総哉という人が死んじゃったの。

原因は大量出血によるショック死。

あの時本部が間に合ってれば……！」

琴雪が珍しく真面目に悔しそうに言葉を詰まらせる。

しかし俺は気付く。

「ちょっと待て、不知火って……」

「そうだよ。奏華の双子の兄。あの時……」「もう良いよ！」……奏華……」

不知火はいつになく悲しそうな笑みを浮かべて言う。

「もうその事は、いいから。早く控え室に行きましょう……」

そのまま、不知火は先に行ってしまった。

「琴雪、あの時って？」

俺は失礼と思いながら、どうしても聞きたかった。

不知火の兄の事を。

「あのね、能力者との戦闘で事故がおきたって言ったけど、その言い方はちょっと違うの」

「？」

俺は首を傾げる。
だが琴雪は続ける。

「総裁が死んじゃったのは、相手に攻撃されたんじゃない。
私達を守るためのよ……」

「なっ……！」

「そう、総裁の能力は『血液循環^{ブラッドループ}』という能力で、
まさしく血液を操る能力。その自分の血液を凝固させた盾や矛は、
すごい力だった。

それでね？ その力を使って、私達全員を守ったのよ……。

相手の能力が暴走して、雷が私達に大量に降り注いだ。

それを、完璧に防御したのよ。けど、雷に当たった血液は変出して、
体内に戻せなかった。

そして大会本部は暴走が起こったことを隠蔽するためにこれを事故
とした」

俺は言葉が出なかった。

不知火の兄は事故ではなく相手の暴走のせいで死んだ。

俺が何を言っただけで良いか分からないと、琴雪が言う。

「けどね、奏華はちゃんとその事を乗り越えて今ここに居るの。
だから、哀も安心して良いよ」

「はかな。安心できるはずがない。」

俺の心は、この事実に対して大きく揺れ動いていた。

第二十一話 去年の大会（後書き）

どうでしたか？

奏華に双子の兄がいたこと判明。

結構悲しくないですか？

自分でもそう思います。

第二十二話 暗闇

俺は、結局何も出来ずに皆と控え室に行った。

そこには、先に行くと言っていた不知火が1人、椅子に座っていた。

「あ、皆来たんだな！」

不知火が、さっきの事を気にしていないという素振りで俺達に気付く。

だけど俺は気付いていた。

不知火の目が、心なしか赤く充血している。

（まったく……1人で無理しやがって……）

いつも元気な不知火だが、今はそれが偽りだとすぐに分かる。

俺は何を言って良いのか迷う。

すると、急に不知火の眼光がきつくなる。

その視線は、俺達の後ろにある。

俺達は後ろを見る。

そこには、1人の茶髪の痩せ細った男が立っていた。

不知火が、心なしか何かを押し殺した声で言う。

「何で、お前がここに来てんだ……」

俺達の後ろにいる男は、俺達にはまるで興味が無い、といった感じで間を通って不知火の前に出る。そして口を開く。

「よう、不知火の妹。なあに、唯の挨拶だよ」

「ふざけるな！本当に何をしに来た！死にたいのか！」

いきなり不知火が怒鳴りだす。

男の口調からして知り合いらしいが、それに不知火の事をわざわざ『不知火の妹』と言った。

まさか、とは思うが、俺は皆に聞く。

「おい……まさか、あいつは……」

すると聊爾が答える。

「ああ、あいつが……」

聊爾の顔が苦虫を噛み潰したかのような苦しい表情になる。

「あいつが、総裁が死ぬきっかけを作った雷使い、一条 裕だ」

…やはり俺の予想は正しかった。

この状況で来るということは、精神的に不知火を掻き乱すつもりか？
それとも……

「ああ、俺が来た理由は別にあるよ。ちょっとお前に謝る事がある
てな」

「なんだ？ 1年前の謝罪なら必要無い。私はお前を許さないから」

すると一条はクックククと薄ら笑いを浮かべて言う。

「そうじゃない。俺が謝りたいのは、俺が嘘を吐いていたからさ」

「嘘？」

不知火が呟き、不知火や皆は訝しげな表情を浮かべる。

その表情を見て、満足したように一条は馬鹿にしたような笑みを浮かべ、言う。

そこから発せられた言葉は、俺を含めて皆を愕然とさせるにはお釣りがくるぐらいだった。

「実はあの暴走事件、俺は別に暴走してねーんだよ。ぜえーんぶ、でっち上げの嘘なんだよ！」

その瞬間、皆は驚愕し、不知火はショックでフラフラと目を見開き揺れている。

そして更に一条は言葉を紡ぐ。不知火への素敵な^{サイアクのコトバ}プレゼントとして。

「俺は、あの時、どうにかして大会一位、そして同年代の中で一番強い能力者、という

『栄光』を手に入れたかった。だから、調べたのさ！

あの忌まわしい能力、『血液循環^{ブラッドループ}』の場合、その能力によって出した血は

高熱によって、人体に有毒な成分が発生するという事を！

だから俺は暴走に見せかけ、大会では禁止されている殺傷レベルの能力開放をした。

そしたら俺の予想通り、あいつ、不知火は自分の血を一瞬だけ致死量分取り出したよ！

その後アイツが倒れた時はスーっとしたよ！

はははははっ！」

「もう、やめろ……止めろおおっ！」

そして瞬間、不知火は一条に殴りかかったが、一条がその瞬間不知火に言った。

「良いのか？ 俺を殴って？」

「……どういう事だ？」

不知火は、どうにかして自分の怒りを抑えているようだが、すぐにも殴りかかる様子だ。
一条は不適に笑う。

「こんな時、試合前に相手チームのリーダーを負傷させたなんてい
ったら、後ろにいる

お前らのチームメンバーにも迷惑掛かるんじゃないの？」

不知火の体がビクツと震える。

そうだ、こんな試合の一ヶ月前でも怪我させまいとピリピリしていたのだ。

今、相手チームのメンバーを、しかもリーダーと言っていた一条を負傷させれば、

理由なんて聞かれず、今回の大会の出場不能はもちろん、もしかしたら学園

に多大な責任と迷惑を押し付ける事となって停学、最悪の場合退学になるだろう。

しかも、そんな理由で退学になれば、入学させてくれる中学なんてないだろう。

別に『HEAVEN』内は義務教育なんて無いのだ。

……悔しいが、一条がそれまで計算しているとすると、不知火の性格からして引き下がるを得ない。

しかし俺の中には、大切な友達とその兄が、たった一人の本当にちっぽけな自尊心のために馬鹿にされ、拳句の果てに屈辱的に殺されるという事実に対する悔恨と憤怒の他に、何かどす黒いモノがあった。

ソレは、以前にも何度か感じた気持ち。

全てを壊そうとする破壊的な衝動。

俺は、またそれに耐えられず、意識を闇に落とした。

……暗い、真つ暗な中に浮かんでいる感覚。

それは、いつに無くはつきりと、俺の意識は感じ取っていた。何かが見える。

………あれは、俺？

小さい子供がいる。それは見間違っはすも無く、昔の俺だった。まだ5歳になるかならないかの頃。

ここは、どこだ？

俺の記憶には無い場所。

どこかの山村のようだ。俺はそこで女の子と遊んでいる。

同年代ぐらいの女の子。顔はもやがかかった様に見えない。声が聞こえる。

「ねえねえ！ * # %ちゃんはおおきくなったらなにになるの？」

聞き取れない。俺が言っている言葉。

名前が入るだろう場所にノイズがかかっていて、名前の長さすら分からない。

分かるのは、相手の女の子に言っているであろう言葉だという事だけ。

「わたしはね、おおきくなったら、アイくんのおよめさんになってあげる！」

その女の子は笑顔で言う。顔が見えないのに笑顔が分かるという、矛盾。

俺は嬉しそうに答える。

「ほんと？ やったあ！」

すると急に視界がぼやける。

その場所が一変、違う場所に移り変わる。

そこは、炎で赤く染まっていた。

その中にいる、俺と女の子。

今はなぜか10歳前後に見える。

俺泣いている。

「どうして、どうしてこんな事になっちゃったんだよっ！」

それを女の子が優しく包み込む。

「大丈夫だから、アイくん。ずっと、私達、一緒だもんね？
神様、どうかアイくんだけでも助けてくれますように……」

そして、記憶は途切れた。

なんだ？記憶？

だが俺の記憶にはあんなの……無い。

すると急に暗い中に光が戻る。

……ここは、どこだ？

俺はあたりを見回す。あの記憶？も気になったが、ここは現実らしい。

すると、気付く。

この部屋は、血なまぐさかった。
俺は恐る恐る前を見る。

……そこには、
バラバラの、『一条』があった。

しかし、なぜか俺の心はスッキリしていた。
だが、気になる事がある。皆はどこだ？
あらためて部屋内を見渡す。
そして俺は驚愕した。

崩れた壁の下敷きになっている聊爾。

窓が割れて、そのガラスで血まみれになっているハイト。

壁に寄り座り、だらりと死んだように力が抜けている琴雪。

俺の足元にうつ伏せに倒れている不知火。

そして、俺を止めるように俺の腰を掴んだまま、顔を蒼白にしている紫。

その光景に、俺は、俺の精神は、耐え切れなくなつた……。

「あ、ああ、あああああああああ……！！！！！！」

第二十二話 暗闇（後書き）

……いきなり超シリアスです……。

私は作品に過剰に感情移入する性質なので、
こつこつと書いてると、心が暗くなります。
みなさんは、どうですかね？

第二十三話 『H・C・R』計画（前書き）

これからシリアスになるでしょう。

第二十三話 『H C - R』計画

俺は、叫び続けた。

もしかしたら俺は、だれかにこの状況を見つけて貰い、自分に贖罪をしたいのかもしれない。

しかし、それは叶わなかった。

「まったく、うるさいですよ？」

俺はハッとして後ろを振り向く。

これは、前と同じ状況。

一ヶ月前、俺に殺人容疑がかかった時に、手を差し出してくれた声。そこには、総隊長もとい、無骸零がいた。

「総隊長さん？ どうしてここに……」

「それは、この大会は凄く有名なものだから、いつもお忍びで遊びにきてるんです。

それでたまたま御神君達に挨拶でもしようと思ったらこの状況、ということですよ。

あ、因みに誰も気付きませんよ？ この部屋の周りは音の概念は消しましたから」

「……総隊長さん、いえ、無骸さん！ どうか、どうかこいつらを助けてあげて下さい！」

俺は必死になって頼み込む。未だ俺の腰にしがみついたままの紫を見ながら。

総隊長という肩書きを持つ人ではなく、無骸零その人自身に。

しかしその願いは遮られた。

「それは無理ですね」

「な、なんでですかっ！　なんで、助けてあげられないんですかっ！」

俺は間髪入れず叫ぶ。

もう俺はこうする事しかできなかった。目から何か垂れるが気にしない。

すると、俺の顔を見て、総隊長さんは困ったように苦笑いを浮かべ、言う。

「いやあ……だってその子達、みんな気絶してるだけですよ？」

「……………は？」

思わず間拔けな声を上げてしまう。

だってそうだろう、助けてくれないと言ったとおもったら、その理由が気絶してるからなんて。

俺はもう一回注意して皆を見える。

すると、俺の腰にしがみついている紫、よく耳を澄ますと、

……なんかスヤスヤと音が聞こえる。

足元にいる不知火だって、「う……ううん」とか唸ってるし。

「……………総隊長さん」

俺は腰にある紫をそっと傍にあったソファに寝かせて言う。

総隊長さんは満面の笑みでこちらを見る。

「なんですか？」

「……騙さないで下さいっ！」

「うわっ！ いきなり大声上げないで下さいよ。紫君が起きちゃいますよ？」

「そんな事より、よくもからかいましたね？」

すると総隊長さんはハハハと笑って言う。

「いや、だって、敵の狙いが君の能力暴走なんだから、まずは冗談でリラックスしようと思って」

「いや、この状況でリラックスって………て！ 敵ってなんですか！」

「まだ気付いてなかったの？ ほら、君の方もさっさと立ち上がってよ。」

もうネタバレしてるんだよ？」

俺はなんの事だと思い、再び辺りを見回す。

すると、俺の前にあつた血だまりから、バラバラになったはずの…

…一条が立った。

「な、なんでお前……死「死んでねえよ」………なんでだ？ なにが起こったんだ？」

俺は自分が気絶していた間に何が起こったのか分からなかった。

一条は答えようとしなかったが、代わりに総隊長さんが全て分かっ

ているといった感じで答える。

「御神君が能力暴走になりそうな間に、そいつは何かで君の能力を封じた。」

そして一瞬の事で混乱している他の5人を気絶させたという所かな？」

「へえ、その通りだよ、無骸さん……。」

本当はこのまま俺は隙をみて逃げる予定だったんだが、まさかあんな直々に来るとはな」

俺は何が起こったかは理解できたが、一つ分からない事があった。

「しかし、それでは一条はどうやって俺の能力を、しかも暴走しているものを回避したんですか？」

すると総隊長さんはゆっくりと苦しい顔で言う。

「……そろそろ潮時か。丁度『実験』の当事者もいるんだから話そう。」

私は、ずっと推測していた。

それは、テロ組織『HUMAN』の拠点を攻めたときに入手した、俺と一部の人間しか見ていない書類。

……これをHC-R文書と言う。
それに書かれていたこと、それは、神の名を騙った悪魔の計画。

そこにあつた計画とは……『Homunculus Plan』。
人が神の所業を真似て作った異形の生物、ホムンクルス。
『HUMAN』では、人口的に生命を誕生させるという計画があつた。

そしてそれを実験素体とした付随計画、『Code - Replay Plan』。

知っているか？

近頃の若い能力者は勿論、情報規制がされているからあまり知られていないのだが、

第3次世界大戦終結直後の初期の能力者の中には、
極稀に、『重複能力者』という、複数能力を使う者達がいた。

……『Code - Replay Plan』とは、
その重複能力者達という存在自体を『再生』するために作られた計画。

まあ、私が今の意味を持つ結論に辿り着いたのは、一ヶ月前の事があつたからだが」

俺はその事実を聞いて、ただただ呆然としているだけだったが、最後の言葉で思い出す。

そう。あの時も俺は嵌められそうになった。

そしてその女は、自分を『HC - RO』と言っていた。

そして俺は一条を見る。

一条は、総隊長さんの話を聞いてニヤニヤ笑っていた。

そしてようやく言葉を発する。

「お〜お当〜たりいつてか？ さすが無骸零だな。その洞察力と組織力には感服するぜ」

俺はさつきから気になっていた事を言う。

「……一条、お前は何なんだ？ 『HUMAN』の構成員か？」

「んー？ 半分正解だ。というかお前には話しても良いって命令だからな。」

話してやるよ。

俺は『H C - R 1（ホームクルス・コードリプレイe in）』だ。真正正銘、その無骸零が話した人工生命体で、それでいて重複能力者だ。

俺の能力は『ライトニングレイ雷電閃光』と『アンチセフト能力無効』だよ。すげえとおもわねえ？」

……俺は驚愕した。能力の詳細は知らないが、能力を無効するらしき能力と雷を併用できるなんて、

「化け物め……」

そうだ。こいつらは人間では無い。

俺は総隊長さんを見る。

すると総隊長さんは俺の視線に気付き、答える。

「一条裕、部隊の総隊長直々に、つかまえるよ……」

「へっ！ やれるもんならな……」

第二十三話 『H・C・R』計画（後書き）

実はの展開。

なにか物語の設定がごちゃごちゃしてきましたが、
分からない点がありましたらどんどん聞いてください。
遠慮しなくて良いですよ！

第二十四話 戦闘！対『HC・R1』アインス（前書き）

なんかこの小説、どんどん読む人が少なくなってるみたいです。

この、駄文の真髄ともとれる小説を読んで下さる

皆様、本当に感謝です。

第二十四話 戦闘！対『HC-R1』アインス

「やれるもんならな！」

一条、いや『アインス』は動いた。

能力の名前に負けない、まさしく雷の速さで消えたのだ。

俺は本能に従い咄嗟に前に飛ぶ。

その瞬間、俺が元いた場所に雷が奔る。

「ちいつ！」

俺は体に風を纏う。雷には遠く及ばないが、これで身体能力強化ができた。

俺は室内を見渡す。

右も左も、果ては天井までも雷がバシバシと奔る。

これではまるで話に聞いた事のある『縮地』だな、と思いつつ、近くにきた雷を避ける。

雷は常時火花を散らしているので、雷の速さは見えなくとも、攻撃は確実にかわして行く。

「これも、訓練の賜物かな……」

「気を逸らしていいのかよっ！」

その瞬間、一筋の雷が俺に迫り……そして消えた。

「なっ！」

「茶番はここまでですよ？」

総隊長さんが今まで雷があつた場所に手を翳している。

「畜生！　ならこれはどうだ！」

その時、アインスは俺にラッシュを繰り出してきた。

「おっらららららあー！」

「クッ！」

俺はそれを最低限の行動でガードする。

しかしそれが罠だった。

俺は風の揚力で後ろに飛ばうとして、一瞬ガードを緩めた。

だが次の瞬間、アインスの拳が俺の鳩尾に入った……。

「ガハッ！？」

何だ？何が起きた？

俺はガードこそ緩めていたが、それは一瞬で相手のリーチから離脱する

用意があつたからだ。

だが、その時、そう、俺が能力を使おうとしたその瞬間、能力が発動しなかった。

俺はなにが起こつたのか分からないまま倒れ伏した。

床に倒れたまま俺はアインスを見上げる。

「お前……何をした？」

するとアインスは俺を見下して言う。

「忘れたのか？ 俺の能力」

…… あいつの能力は、『ライトニングレイ雷電閃光』と、あと一つ……

……… そうか、あと一つを使っただけか……。

くそっ！ 油断していた。雷の攻撃を止め、肉弾戦に切り替えてきた時に

気付いていればよかった！

「後悔はしたかい？ じゃあ、死んどけよ！」

そして次の瞬間、アインスは俺めがけて雷電を放つ。

だが、またそれが消える。

「私の事も忘れてもらっては困りますね！」

それは総隊長さんだった。

やはり総隊長さんは強かった。俺の能力も、充分強いらしいのだが、圧倒的に経験が違う。

能力の使い方やそのタイミングまですべて完璧だ。

今はアインスと総隊長さんが肉弾戦を繰り広げていた。

アインスが隙を突こうとしてまたラッシュをするが、

総隊長さんはそれを簡単に全て避け、アインスに足払いをする。

アインスは空中に飛び、雷を展開させ後ろに下がり、一時的に距離をとる。

まさしく熟練の戦いだった。目にも止まらぬ速さで繰り広げられる

目の前の戦いに、

こんな場合でも畏敬の念と、自身の不甲斐なさが感じられた。

しかし、俺の気持ちは一瞬でかき消される。

なんと総隊長さんが雷を食らってしまったのだ。

まさか！

「お前！ まさか『アンチセプト能力無効』を！」

「ああそうさ！ 能力が無きゃなんもできねえコイツに食らわせてやったのさ！」

「どうだよ『総隊長さん』！ お前はこんな痛み味わった事ねえだろ！」

「いつも能力に守られてばかりで苦しみなんでないだろ！ なんとか言えよ！」

「グウツ！」

アインスはなぜか怒鳴り散らしている。

まさかアインスはなにかあったのか？ いや、それよりもあれをなんとかしなければいけない！

俺はダメージがやっと引いた体で立ち上がり、アインスに攻撃を仕掛ける。

もう手加減なんてしない！ 俺の全能力を使って、アイツを倒す！

駆け出した。

こちらに気付いたアインスが攻撃を止める。

「今です！ 離れて下さい！」

俺が叫ぶと一瞬で距離をとる総隊長さん。
俺は集中する。

そして俺は、相手が放つ雷を受け止めた！

「なんだよお前、自殺でもしたいのかよ！

ははははははは……はは………は、何だよ！ 何なんだよお前！」

アインは驚愕に顔を染める。

俺は、雷を受け止めた瞬間、その物質を解析し、そのまま腕の中で球体にして回しているのだ。

それを見た総隊長さんはやれやれと言った感じで言う。

「まったく、やっとその能力の使い道が見出せましたか……」

そうだ。この応用が俺が見出したもの。

相手の能力を瞬間解析し、球体状にして安定させて自分の力として使う技。

だがその事にも気付かず、アインスは焦って、必死に見たことの無い能力に対して

抵抗をしていたが、それも無駄だ。

俺はその雷さえ、俺の体に当たった瞬間取り込み、プラズマとして手の中の球体に押さえ込み、

そして更に圧縮していく。

そして相手の攻撃が途切れたところでソレを放つ。

「これで、終わりだ……」

俺は自分の能力で作り出した独自の物質、超圧縮プラズマ球体を、光速で打ち出す。これにも雷の力を使っている。

その明るい光を放つ球体は、アインスにあたる。

その瞬間、それは破裂し、中に溜まっていた膨大なエネルギーと共に超高压電流が流れる。そして部屋の中が昼より明るくなる。

「ガアアああアアああアあああああ！！！！！」

アインは断末魔の叫びといってもいいような叫び声を上げる。

そして、その体から焦げ臭い煙をだして、床に直で仰向けに倒れた。

「……忘れたのか、アインス。どんな物質も状態に関わらず俺の味方なんだよ……」

俺は意識があるかないか、定かではないアインスに向けて呟いた：

………

第二十四話 戦闘！対『HC-R1』アインス（後書き）

補足説明、『^{アンチセプト}能力無効』で、

何故最後のプラズマ球体を防げなかったかというと、

この能力は、相手に触れてから自分の意思で発動し、1分だけ能力を発動させなくなるものなのです。

もしこの他に疑問などの質問ありましたら、感想に書いてください。

第二十五話 仲間と共に……（前書き）

短すぎる！

こんな場面なのに短い！

これはやばい。

第二十五話 仲間と共に……

アインスとの戦いの後、部隊が事件の事を秘密裏に処理し、俺と、起きた皆は部隊のビルの総隊長室にいる。

そこには、総隊長さん、俺、紫、琴雪、聊爾、不知火、ハイト。それと小部隊長の飛驒さん、紫の弟の明がいた。総隊長さんが皆揃ったのを見るとゆつくりと口を開いた。

「今、皆さんに集まって貰ったのは他でもありません。

御神君だけは教えましたが、他の人にも関係の無い話では無くなっ
てしまいました。

私が話したいというのは、飛驒君、明君、それに紫君達も知っていた事です。

そう。H・C・R文書についてです」

その言葉を聞いた途端、部隊所属の3人は驚愕し、聊爾達は首を傾
げていた。

「皆さんの中にはいままで関係無かった人達がいますが、説明させてもらいます」

そう言つて、聊爾達に俺が教えられた事実を全て教えた。

『HUMAN』による人工生命体と重複能力者の再生。

その話を聞いた時、皆の顔は信じられないと言っていた。

「あの……それで私達に何をしろと……？」

琴雪が総隊長さんに聞く。

「……言いにくいが、今回のアインの騒動で君たちもこの事件の関係者となってしまった。

私達は君たちを保護させてもらう。

そして、これは苦渋の末に判断したことだが……

来るべき決戦の日には、君たちにも協力して欲しいんだ」

「なっ！ そんなのダメです！ 皆は、まだこっちに来ちゃいけないのに！」

俺は総隊長さんの言葉に息を詰まらせながらも言う。

そうだ。これは俺達の問題だ。皆を巻き込むわけにはいかない。しかし、それは本人達によって拒まれた。

「……私にできることなら」

「分かりました。私は助けになってみせます！」

「俺もやってやる！」

「僕もいいですよ。皆さんのためになるなら」

皆が次々に承諾していく。

「ダメだ！ お前ら分かっているのか、ここからは殺人の世界なんだよ。」

お前らはそれを分かって「そんなの分かっているよ！」……「なっ！」

琴雪が叫ぶ。自分の思いを必死に伝えようとして。

「そんなの、皆分かってるよ！　だけど、だけど、皆は哀くんの仲間なの！」

私たちは、自分の為にそうしたいって言ってるし、これは私たちの本当の気持ち。

もう1人で背負わないでよ。私たちだって助けたいの！」

俺は何も言い返せずにうなだれる。
すると紫がこちらに来た。

「……アイ」

「なんだ……」

「皆は、あなたの仲間であり友達でしょ？
だったらアイも皆を信じてあげなきゃ」

「……俺は、いつだって皆を信じてる。
だから、皆！」

俺は叫ぶ。この思いを。

「俺は、お前らを信じたい！　だから！
お前らの力を貸してくれ！　俺を信じてくれ！」

「当たり前だよ、哀くん」

「何を当たり前の事をいつてんのさ！」

「そんなの最初っから分かっているに決まってるんだろ！」

「僕も前からそう決めてましたよ」

皆は笑って、俺に返してくれる。

……何も心配する必要なんてなかったんだ。

俺は皆がいるだけでがんばれる。信じあっていける。

なにを疑ってたんだろう俺は。

こんな事、最初っから俺も分かってたのにな……………。

俺は部隊の皆にも目を向ける。

飛驒さん、明、総隊長さん。

そして……紫。

「私たちもアイの仲間よ。

まあ、分かりきってるでしょうけど。フッフ」

俺は紫の笑みに、思わず顔を綻ばせた。

「ああ。そうだなっ！」

俺は仲間を信じ、決戦の日を迎えようとしていた。

「皆！ これからもよろしくな」

「……………おうっ！（はい！）……………」

また一歩、新しく踏み出せた。

第二十五話 仲間と共に……（後書き）

主人公。

また新しく何かを見つけたようです。

性格も最初と結構変わってますし。

もし決戦の時を書くのだったら、長めになると思います。

第二十六話 調査と訓練（前書き）

すぐ決戦ではありませんよ？

- 今はまだその刻ではない - b y 作者

第二十六話 調査と訓練

「……それで、総隊長。ホムンクルス達に対しての対策は？」

飛驒さんが言いはじめた。

俺や皆は総隊長さんを見る。

「はい、そのことについてなんですが、つい今さっき新しい情報が入りました。

『HUMAN』の新たな研究施設の目星がついたようです。皆さんには、そこを調査してほしいのですが……」

「分かりました。それで、誰が行くんですか？」

明が答える。

総隊長さんはコクリと頷いてから言う。

「これは、とても危険で、秘匿性の高い任務です。

しかも、未だ『UnInstaller』部隊に登録していない、君達4人は行けません。

なので、調査として、紫君と哀君に入ってもらいましょう」

「なんで俺達2人だけ？」

俺は総隊長さんに聞く。

すると総隊長さんは当然のように言う。

「調査に人員を引き裂く訳にもいきませんし、かといって、能力が高く

自由に動ける人は貴方達2人しかいないんですよ」

「明は？」

「僕はあちらの4人に、体術を教えなければいけないので」

そうか。あいつらは能力は高いが体術はあまりやったことが無い。明なら適度に鍛えてくれるだろう。そういうことなら。

「分かりました。紫と一緒に入ってきます」

「私も全然構わないわ。寧ろ大歓迎よ」

「はは、頼もしいですね。」

しかし油断はしないで下さいよ？
もし誰か居たならば捕まえるように」

「「はいっ！」」

すると横のほうから何か聞こえる。

「いいな……私も哀くんと一緒に行きたかった……」

琴雪がそう言っていたが、しょうがないんだ。
だからそんな目で見るな……。

「……因みに何時いくんですか？」

俺はどうにかして琴雪の視線から外れるために聞く。

「いや、今すぐですよ？」

「ええー！ー！」

「だって、早く行かないと逃げられる可能性がありますし」

「……分かりました」

「了解。ほらアイ行くわよ」

紫は渋々了解する俺の手を握って連れて行く。
琴雪がああー！とか言ってるけど、よく分からん。

俺達はその後即行で制服に着替え、出発した。
外には車があった。

俺達はそれに乗る。

すると運転手がそれを見て出発させる。

どうやらここから少し離れた所にあるらしい。

そんな事を思っていると紫が擦り寄ってきた。

「ん？ どうした紫？」

「ふふ アイの近くにいたいだよ」

「てっ！ お、お前！ こんな時に何言ってるんだよ！」

「まあ、良いじゃない？」

そんなこんな事が車内では起こっていた。
道のりはもうちょっと続く。

一方その頃……

琴雪SIDE

「では皆さん、こちらに来てください！」

ここは訓練場。明君が真ん中のほうで手招きしている。

……明くんは多分小学生高学年ぐらいだと思っけどやっぱり私達より強いんだよね……。

私達4人は明君の所に向かう。

「まずは、皆さんの体術の技術から見ていきますので一人ずつ来て下さい。

まずは、聊爾さん」

「応！」

聊爾くんは相変わらず元気な声で前に出て行く。

「では、これから試合を始めます」

そう明くんがいった瞬間に、聊爾くんは何の躊躇いもなく右の拳をだした。

私は明くんに当たったと思ったが、そこには何もなかった。

次の瞬間、聊爾くんは足元を崩して倒れてしまった。そこには、聊爾くんの陰になって明くんがいた。

「振りが大きいですね。もうすこし小回りを聞かせるようにしてください」

明くんは冷静に指摘する。

聊爾くんはすぐ起き上がる。

「いてて……やっぱり部隊に入ってるだけあるな。凄いぜ！」

そうなのだ。聊爾くんは普通の男の身長より高い、大柄なのに対して、

歳の違いもあるだろうが明くんは見た目は華奢な体をしている。やっぱり凄いと言っただけはある。

でも一つ心配な事がある。

多分私達4人の中でも一番まともな聊爾なのに、私なんかが体術で勝負して大丈夫かな……

「はあ……なんだか不安になってきたよ……」

考え事をしていたらいつのまにか奏華の番になってた。

……また速攻で倒されてしまった奏華。悔しがっているけど……。

「もうダメかも……」

私の不安は大きく積もるばかりだ。

琴雪SIDE

END

御神SIDE

俺達は今、『HEAVEN』の外にある、支部に来ている。
何処かというのは企業秘密。
そこで支部長の中年の人のよさそうなおっちゃんから話を聞いている。

「その建物の地下に研究施設が隠れていることが確かとなりました。
何が研究されているかは分かりませんが……
本部から来たお二人とも、お氣をつけてください」

そう言われて、目標の建物への地図と、その建物の見取り図が渡される。

話によるとスパイを投入して調べがついたらしい。

「行こうか、紫……」

「分かってるわよ、アイ」

俺は紫と一緒に、研究施設に調査をいれる。

任務の前に来る独特の重圧感がくるが、2人ならなんでもない。

俺は妙に頼もしい紫と一緒に、その目標に向かって進んで行った。

第二十六話 調査と訓練（後書き）

哀と紫で行く調査で起こること。
それに、琴雪の思う訓練の不安。
それを書くのが難しい。

幕間（前書き）

また『HUMAN』サイド。

幕間

「リーダー、例の研究所ですが……」

ある高層ビルで女が言う。

いかにも秘書風といった感じの女だ。

その言葉に対して、中年らしき男の声が返る。

「ああ、確か『Uninstall』にばれたんだろう？
まったく、あちらも我等と同じ事をしてくるとは……」

「まったくです。やはり『HEAVEN』は腐っています。
あとその研究所は放棄したので。

因みに先程、
その『HEAVEN』へのあの計画、
やっとドライの最終調整に入ったと研究所から……」

「そうか、あと一步で始められる。
そして我等が世界を正す。この能力者に対する世界の反応を変えて
みせる。

……では、頼むぞ。博士にも、フィアをもう少し早めに作れるよ
うに頼んでくれ」

「分かりました」

そう一言言つて、女は出て行つた。

男は一段落ついたと言わんばかりの溜め息をついて、椅子に座る。

「……ヌル、アインス、ツヴァイ、ドライ、フィア。

非常時でヌルが欠ける事になったが………これでこの計画も最終段階」

男は何気なしに呟く。

「『H・C・R』計画。ホムンクルスとはよく言ったものだ。……これで世界が変われば良いのだが……」

場所が変わって研究所。

「ほう。ほうほうほう。これは興味深い！
今までのコードナンバー012より更に進化するとは！
やはりホムンクルス！ 謎が深まるばかりだ！」

老人はそう言うと、後ろを振り向く。
そこには、手術台と言うべきものがあつた。
その上には、布一枚被せられていない、美しい体を持つ女がいた。
十人に十人が振り向きそうな美貌を持っている。
しかし、その瞳は光を映していなかった。
それはまるで、壊れた機械、いや、人形と言うべきものだった。
だが老人が驚くのは他にある。

「いやいや、これは流石の私でも驚いた」

そう呟きながら手にとる資料。
今はもういないヌルが送ってきた、部隊の写真付名簿。

老人が見ているページには、名前が書いてあった。
そこには写真があり、その写真の脇には『佐屋 紫』と書かれていた。

そして、その写真に写っている美貌と、ドライは、完全に完璧なま
でに、

双子のように同じだった。

幕間（後書き）

…… ホムンクルスの謎を追え！
次週をお楽しみに！

第二十七話 電撃戦！？（前書き）

……毎日更新って案外疲れるんですね。

けど長い休みに入りましたし、もしかしたら一日二話なんてことも……。

第二十七話 電撃戦！？

SIDE 琴雪

「きゃっ！」

私は今、明くんと模擬戦をしていた。

模擬戦といっても、体術だけの。

皆は、後ろのほうで、明くんと模擬戦のお陰で息を切らして倒れている。

そして私は今尻餅をついた所。

「いったたたた……」

お尻をさすりながら立ち上がる。

するとすぐ前に厳しい顔をした明くんがいた。

「……琴雪さん、これは酷過ぎますよ？」

能力ではなくまずはこれから始めたほうがよさそうですね……」

「へっ？ いや、私はその……体術はちよつと苦手で……」

「そんなもの理由になりません！

これから始まるのは本当の意味での殺し合いなんですよ？」

明くんが怒鳴ってくる。

そうだ、私は勘違いしていた。

心の底で甘えていたのだ。

私はその事実を改めて感じ、うな垂れた。

明くんは私を見てハアと溜め息をつき、言う。

「しょうがないですから。今から体力を作れ、と言っても無理ですから。」

あなたの持っている武器の訓練をしましょうか」

「へっ？ 武器？」

私は思わず変な声を出してしまった。
そして気付く。

「あ！ これですね！」

私は腰についた二つのホルスターを手取る。

そう、前々から出番が無く、空気と化していた私の能力の他に使える力。

銃だ。

拳銃程度の大きさの銃が二つ。

私はしばらくこれを使うことが無かった。

だが、体術ができない私には大きな味方となるだろう。

「そうです。その双銃の上手い使い方を徹底的に仕込むから、覚悟して下さい？」

と明くんに黒い笑みで言われた。

「は、はい……」

私は少し怖かったかもしれない……。

琴雪SIDE END

御神SIDE

「おおー！」

俺は驚きに大声をだしていた。

それは、『HUMAN』の実験施設と教えられたビルが、とてつもなく大きかったからだ。

「もう少し静かにしたほうがいいわよ？
もうここは敵陣なんだし」

「おっと……」

俺は紫に寤められて我に返る。

しかし、本当に大きいビルだ。

部隊のビルも高層ビルだし、そういうビル自体見慣れていない田舎者でもないのだが、

目の前にあるものは今まで見てきたなかでも大きかった。
というかうらやましい。

このビルを部隊にくれ！と言いたいくらい。

俺と紫は、勿論監視カメラの穴をかいぐぐって此処まで辿りついた。

「……情報によると、このビルには地下があるらしいわ。

そこの地下で実験が行われているらしいわよ」

「じゃあ……行こうか」

因みに、言い渡された作戦は驚きのものだった。

だいたいの人^{じゅうぎ}がこういうシチュエーションでは、

侵入作戦があるだろうと思っっているだろうが、それは違う。

紫は何も言わなかったが、俺だって内心呆れていた。

そう、この作戦は、たった15分で地下までおり、有力書類を持ち帰り、

そのついでで研究装置を破壊するという、『電撃戦』だった。

……俺達はまずは、ビルの裏手に回り、警備員を気絶させる。

そして裏の扉から中に入る。

お互いで360度全てを見渡しながら俺は能力を発動させる。

俺の周り、紫の周りを除いた全ての物質が削られていく。

風を使って、長い年月でできる『風化』と『掘削』をしているのだ。

俺は、紫と自分の体を風を利用して宙に浮かせる。

そして、もろくなっている床を突き破り地下に入る。

その瞬間、生暖かい空気が肌にふれた。

俺達は床に降り立つ。

そして、その匂いに顔を顰める。

「なんだ？ この匂いは？」

その匂いは、腐敗した肉のような匂いだった。
周りを見渡す。

そこは、機械だらけの部屋だった。

右を見ても機械、

左を見ても機械、

そしてその中央に位置する手術台のようなもの。

すると、いつの間にか横で機械をいじっていた紫が言う。

「ダメよ。このデータは全て抹消されているわ。

どうやら向こうにいち早く感ずかれたらしいわ」

「そうか……」

どうやら向こうもバカではないか。

いち早くここを放棄したらしい。

しかも、上にあるビルは関係ない所らしい。

どうやら地下を貸していただけのようだ。

俺はどうにも残念で、手術台に腰掛けた。

そして気を抜いた次の瞬間、

こちらを見ていた紫の顔が驚愕に染まった。

なんだ？ どうした？

俺は何故か熱くなっている自分の体を見る。
そこには、真っ赤で大きな華が咲いていた。
そしてその中心からでる一本の……手？

俺は後ろを振り向く。

そこには……………紫がいた。

紫？は俺の体から手？を引き抜く。

すると何故か意識が遠のく。

そしてそのまま、俺は意識を失った。

第二十七話 電撃戦！？（後書き）

うちの主人公は何回死にかければ気が済むんでしょう？

第二十八話 戦闘！対『H C - R3』ドライ（前書き）

戦闘です。

第二十八話 戦闘！対『HC・R3』ドライ

くそ、体が熱い。

それで目が醒めた。

今までは、意識を失うなどして痛みはほとんど無かったが、今回ばかりはそうもいかないようだ。

体から『生』が抜け出ていく感触。

今は熱いが、段々冷めていく体。

俺はそれと同時に湧き上がる激しい痛みに悶えていた。

致命傷を受けた時は、痛みはほとんど感じずに死ぬらしいが、そんな事は無いようだ。

そんなことを考えていると、段々さつきまでぼやけていた視界がハッキリしてきた。

目の前には、戦闘をしている、同じ顔の人間。
だが違う点もある。

一つは圧倒的な戦闘能力の違い。

俺の知らない紫は、人間には到底できない動きを
いとも簡単に行っている。

それに対して、紫はいくら訓練されているとは言えども、それが人間の上限。

そして二つ目の違い。

それは眼の光。

知らない紫は、まるで人形のように、光のない眼をしている。

「くそつ、今すぐ、行く、ぞ……紫……」

うまく言葉が紡げない。
それに気付いた紫。

「!? 動いちゃダメっ! アイ!」

「うるせえ……………ガハアっ!」

俺の口から何か鉄の味がする赤い体液が出てくる。

……………こりゃヤバイかもな……………。

その時、その部屋全体に、声が響いた。

それは、知らない紫が発したもので、くしくもそれは、俺を庇ってくれる紫と同じ声だった。

「余所見をしていて良いのか? オリジナル?」

そして、赤が舞い上がった。

それは、一瞬の出来事だった。

俺を少しでも気にかけてしまった紫の背後に迫った影は、紫の肩の付け根を、文字通り『貫いた』。

「いつ、きゃああああ! あああ! 痛い! 痛い! あああ……………」

その手? は俺の腹に風穴開けたのと同じ要領で、紫の右肩を貫き、そして千切った。

俺の目の前に倒れる紫。

その様子は、いつもの上品で、優しい大人のものでは無かった。
ただの女の子。

そう。いくら部隊にいるからといっても、いくら大人びていても、

まだ俺達と同じ中学生。

その子は、こちらを見る。

「痛いよ……アイ……」

その泣き顔は、俺の記憶と合わさった。

能力暴走時にフィードバックした俺のものらしき記憶。

その時見た、泣き顔。

それは紫そのものだった。

俺は、もう、この子を泣かせたくない。

この子が笑える世界を作る。

それが俺の夢であり目的。

例えばこの身が朽ち果てようとも、俺は、この世界にぎじょうを守る！

「……紫、俺が、守ってやるから。あの時できなかった事を」

「え……？」

「……能力、『マテリアルコントロール祖体制御』発動。

イメージ、『再生』。対象、能力使用者の傷全て」

なぜかスラスラとでた単語。能力名。

そして能力発動する感触。

それと同時に戻っていく傷跡。

「いくぞ……」

するとその様子を見ていた知らない紫が言う。

「その能力は記録にありますが、まさか再生を任意で行えるようになるとは。」

それと私の製造名は『HC-R3』。ドライと呼んでいただけで結構です」

「そうか。やっぱりお前はホムンクルス……しかも3体目。そこまで進んでいるか……。」

おい。お前はなんで紫と同じ容姿と声をしている？」

「その質問には答えられません。そうですね……もしこの戦闘で万が一あなたが勝つような事があれば、博士に回線を繋ぐようにしろと命令されているので。その時に」

「成る程、勝てば良いんだな……。」

その瞬間、ドライは吹き飛んだ

否、俺が吹き飛ばした。

風を強い竜巻ほどでたたきつけたのだ。

しかし、空中で体勢を整えて壁に足を着くドライ。

その瞬間、なにかが飛んできた。

「チイツ！」

俺は咄嗟に横に飛んだ。

そして元いたところを見ると、床が凹んで潰れていた。

「能力『重力加担』。
グラビテーション。

この不可視の攻撃にあたるとあなたは潰れますよ?」

「おいおい、見た目に似合わない凶悪な能力だな……」

俺は、能力を右手と左手に集中する。

もう油断はできない。いくら紫の容姿をしているといっても、まったくの別人。

俺は相手の隙をつきながら、紫に近づく。

今までいた床がどんどん潰れていく。

しかし、それを避ける。

そして、紫とドライの間にくるように立つ。

「……できればこれは使いたくなかったよ」

「?」

「くらいな……『崩壊』」

俺は右手を伸ばして空気を間接的に操る。

ドライの周りの物質を捕らえる。

そして俺は、その原子を、『崩壊』させた。

原子の崩壊、これは核分裂を表す。

核分裂を無限にしていくそれは、膨大なエネルギーをためていく。

そして俺はそれを、全能力を使い、掌握する。

額から汗が流れる感じがする。

一歩間違えば紫も危険に晒してしまうのだ。

目の前では、いきなりの事に反応できないドライがいた。

「なんです……これは……こんなもの、データに……」

そして俺はそのエネルギーから、掌握を止めた。

その瞬間、膨大なエネルギーは拡散し、放射能を撒き散らす『核爆弾』となった。

俺は瞬時に、左手に用意していた能力を使う。

「っ！ 間に合え！ 『変化』！」

そう叫ぶと同時に、俺と紫の周りを囲む、放射能とエネルギーを一切通さない絶対領域を作る。

そして、部屋内で拡散するエネルギー。

それに巻き込まれるドライ。

そして、爆発が起きた。

ドガアアアアア！

轟音と共に、閃光が出て、そして、地下が崩れた……。

第二十八話 戦闘！対『H C - R3』ドライ（後書き）

地下が崩れた。

紫、哀、ドライはどうなったのか？

ドライの秘密とは？

紫と哀の関係とは？

第二十九話 身代わり（前書き）

……タイトルどおりの内容。

第二十九話 身代わり

琴雪SIDE

私達訓練組は今、哀くん達が偵察任務に行った所へ急行している。
勿論、皆と明くんがいる。

訓練中に、偵察任務のあった地下が崩れたらしい。
最新の構造で、ビル自体はどうにか支えられているらしいが、いつ
倒れるか分からない。

そして、崩れた地下からの連絡も一切途絶えているらしい。

急いで走っていた車が止まる感じがする。

私はいてもたってもいられなくなり、車からいそいで出て、部隊が
集まっている所にいった。

そこは、ビルが見た目少し傾いて、地下は完全に地上から丸見え、
といった、

素人目から見てもとても危険な状態になっていた。

私はそこにいる、部隊の小隊の隊長らしき人に詰め寄る。

「あのっ！ 哀くんと紫ちゃんは？」

無事なんですか？ 今どこにいますか？」

「なんで君みたいな女の子がここに「僕が連れてきました」……佐
屋隊長！？」

隊長が驚く。

明くんは私達が思っている以上に立場が上らしい。

「僕達は姉と御神さんと面識がありますので、
因みにこの人たちは近日新しく部隊配属になった子たちです」

「そうでしたか。」

……現状は、芳しくありません」

目の前の人が俯く。

「どういうことですか!？」

「……何らかの原因で地下崩壊後、無線は一切繋がりませんし、瓦礫も複雑に組み合わさっていて、
取るに取れない状況です。もし下敷きになっているなら、そろそろ危ないでしょう」

その言葉を聞いてハツとする。
でも、きっと大丈夫。

哀くんは、強いし、あの能力もある。瓦礫なんかには負けるはずない。
……けど、それじゃあ何で出てこないんだろう?
もしかしたら、敵との戦闘で……

私は最悪の場合は極力考えないように、哀くんの無事を祈った。
できることが何も無くて、歯痒かった。

琴雪SIDE END

御神SIDE

「紫……大丈夫か？」

俺は暗闇の中、声を出す。

どうやら俺達がいた場所は瓦礫が上手く組み合わせり、無事だった。しかし、それで外にまったく出られないようだ。

ビルは幸い崩れていなさそうだが、無理に瓦礫を消すと大惨事を招くかもしれないので、

まずは紫を見つけることにした。

俺は、能力を使い、光を灯す。

掌の酸素を真空放電させ、淡い光を作る。

すると、見えた。

手術台がまだあり、その向こう側に倒れている。

「紫！　大丈夫か？」

紫に駆け寄る。

しかし、その瞬間見えたものに驚愕した。

紫は気絶していて、その右肩から先は、なくなっていた。そこからは今だに血が零れ出ている。

「紫！」

俺は駆け寄り、抱きかかえる。

その体は青白くなって、やけに軽かった。

しかし、耳をすますと小さい息遣いがきこえる。

どうやら最悪のパターンは避けれたようだ。

だが、紫は右手を失い、周りには目を背けなくなるような血溜まりがある。

右腕はとつくに瓦礫の下敷きだろう。

このままでは死んでしまう。

……俺は守りたい、紫の笑顔を。

そのためなら、何だってする。

「ごめんな、紫。お前が起きてたらきつと止めようとするんだろうけど……」

決めた。

紫は俺が治す。

紫を静かに寝かせて、傷口が見えるように服を千切る。

そして露出する無残な傷跡。

肩に穴があき、そのまま無理矢理千切られた粗いもの。

俺はその傷口の入り口付近にある血を調べる。

「能力発動……紫との血液相性率67%。

これより右腕を移植する」

内臓移植などは聞いた事があるが、右腕そのままは聞いたことが無い。

だが、俺の能力ならやれるはずだ！

「……能力発動、細胞レベルでの右腕の『切り離し』。対象、自分」
その瞬間、焼け付くような痛みが右腕を襲う。

「ぐっ、あああぐ……」

そのまま俺の右腕は、細胞レベルで、綺麗に俺の胴体から引き離された。

俺はそれを左手で取る。

そして、それを予め、粗い細胞を取り除いた紫の右肩の断面に合わせる。

「……紫、ちよつとの間我慢してくれ……」。

能力発動、細胞レベルでの、右腕、右肩の『接合』。対象、紫」

そう言った瞬間、俺の持っている自分の右腕から能力が流れ込むのを感じる。

そして、合わせた部分が淡く、オレンジに光り輝く。

「あああああ！ うああああ！」

紫が反射で飛び起きようとするが、それを抑える。

「大丈夫だから、紫、もうすぐ終わるから……」

そういつて抱きしめる。

「接合、終了」

やっと終わった。

俺の肩の綺麗な傷はとくに血を止めた。

接合部分は、何分も、何時間も経ったか分からない程集中して、直した。

最後に点検をしたが、神経、血管、筋肉などを、俺のほうを変化させて繋げた。

これで、紫は右腕を取り戻した。

後は……血か。

自分の指を噛んだ。

そこからあふれてくる血。

それが固まらないように、血のなかの血小板だけを排除する。

そして、俺の指を紫の傷口にあてる。

「能力、発……動、血液を限りなく新鮮なまま『操作』させ、対象の体内に循環させる。対象、紫」

ヤバイ、くらくらししてきた。能力の使い過ぎだろうか？

それとも血を与えすぎているのだろうか？

まあ、どっちにしても問題は無い。

これしきの事で紫を助けられるなら……。

「血を、紫の一定値まで送る。俺の血は気にしない。循環速度、倍とする」

その瞬間、猛烈な目眩を覚えた。

血を多く与えすぎたのだ。それも俺の致死量を軽く超える勢いで。

「これで……紫は………大丈夫……」

そして俺は、意識を再び暗闇に落とした。

第二十九話 身代わり（後書き）

そんなことできるの？という
質問。

主人公は全てが規格外なんです。

因みに次の話は過去話です。

第三十話 過去の一部（前書き）

過去の一部ですが、ここでも何が起こったのか分かりません。

第三十話 過去の一部

ここは……またあの暗闇……
俺は……どうなった？

「……く……」

なんだ？
声？

「……くん！」

声が大きくなってくる……

「アイくん！」

「うわあ！……紫？」

なんだか変な夢をみてたような気がする。
ここは、広場のベンチ。
周りは山が見える。山村？
隣には紫ちゃんがいる。

「まったく。今日はあなたの家であなたの10歳の誕生日会をやるのに、
主役がもう疲れて寝ちゃってどうなのよ？」

「……ごめん……何か変な夢見てる……」

「どんな夢よ？」

「……何だっけ？」

「ハア、まったく。」

それより、はやくアイの家行きましょっ！」

「わ、分かったよ」

機嫌が凄いい紫と一緒に、うちに行く。

所々に見える、木造の古い家。

ここは、四方を山で囲まれ、第三次世界大戦どころか、第二次世界大戦も生き抜いた

とても古い山村。近頃、都市の周りは能力者とかいうので危険みただけど、ここはとっても平和だ。

その家々を見ながら歩いていく。

もう日が暮れそつだ。鳥が遠くで鳴いている。

その中で、一層大きい家。僕の家だ。

今は、お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんと僕の五人暮らし。

それと、今日の僕のお誕生日会は、

紫の家の人たち（紫のお父さん、紫のお母さん、紫の弟、それに紫）が来る。

昔からうちと紫の家は仲が良いのだ。

家の中では、畳の上に大きい机があり、その上には、お母さん手作りの料理とケーキがある。

「わあ！　すごい！」

そして、みんなが揃う。

「「「「「「お誕生日、おめでとう、アイ！」「「「「「

みんなが声をそろえて言う。

僕は手作りケーキの上にある十本のロウソクを吹き消す。

その後は、紫やみんなと喋りながら料理を食べた。

とっても嬉しかった。

僕の誕生日のためだけでもここまで祝ってくれるみんながいてくれて良かった。

……なのに、

「どうして、どうしてこんな事になっちゃったんだよっ！」

叫ぶ、が、それも炎の前では何も意味を成さない。

燃えている。さっきまでいた家が。

目の前には、何かによって切り裂かれた無残な死体。

もう誰が誰だかわからない、『六つ』の死体。

……六つ？

「紫っ！　明っ！　どこ？　どこにいるんだ？」

紫はさっきまでそこら辺にいた。

明は病弱だったけど来てくれたからここにいるはず。

すると後ろから何かに包まれた。
それは、紫の手だった。

「ごめんね……こんな事、嫌だよね。
大丈夫。私が何とかするから」

紫は僕の額に手を当てる。
すると何か暖かいものが入ってくる感じがする。

「大丈夫だから、アイくん。ずっと、私達、一緒だもんね？
神様、どうかアイくんだけでも助けてくれますように……」

その瞬間、僕の体から何かが抜け出す感触がして、なぜか眠くなってくる。

ボンヤリとした視界の中にいるのは、紫、その少し向こうにいる明。
その光景を見て、意識が途切れた。

「はっ！」

俺は起きた。辺りを見る。

そこは、薄暗い、砂煙漂うところで、隣には眠る紫がいる。

「夢か……」

どうやら意識を失っている間に夢を見ていたらしい。
自分の内側に目を向ける。

……能力が、体、脳、臓器など必要最低限血を供給しているらしい。
だが一時的なもの。もうすぐ大量出血で死ぬだろう。
紫はもう大丈夫なようだけど。

俺はなんとなく、瓦礫に向かって呟く。

「みんな、紫をはやく、光がある場所に。日常に戻してやってくれ
……」

その言葉は、反響するが、何も起こることはなかった……。

第三十話 過去の一部（後書き）

……最近どんどん駄文になってきている。
その証拠に、日間ユニーク数が激減？してきている……。

全登場人物能力表（前書き）

今まで登場した能力者の説明。

全登場人物能力表

「今回は、今まで登場した人物と能力をどんどん紹介していきます」

「タイミング悪いわよ、アイ」

「そこはほっとけよ、紫。じゃあ、主要メンバーから紹介！」

「あら？ ハイト君はどうするの？」

「……発表無しってことで。次に出てくる可能性があるかもしれないし」

「それにしても今話は会話が多いわね。いつもは作者の文才の無さというか、基本すら分かってない書き方で、説明が長ったらしくて、読む人減っちゃったのに」

「……紫、それを言うな。作者もそれを理解してこんなになってるんだ。」

まあ、気を取り直して、行きます」

主人公 ミカミダイ 御神哀

能力、『マテリアルコントロール』
『祖体制御』

効果、全ての物質を元となる粒子単位で自由に『操作』や『分解』できる。

これを利用して、細胞単位で体を『破壊』したり『破裂』させたりできる。

哀が切れたり、瀕死の重傷を負うと、能力暴走。相手をバラバラのグシャグシャに
しなきゃ気がすまない。

制限、制限質量最高1tまで。同時にはそれまでしか操れない。制御下に置くには、

自分の皮膚が、身に着けている物に触れている物質で、
それでいて自分が意識して能力を使おうとしなければ発動しない。

しかし意識してからの能力発動までのタイムラグは限りなく0秒。

「はつきり言うと、やっぱり『核に勝てます』は嘘じゃないわね」

「……作者によると、やっぱり能力自体は別物だけど、強さは『一方行』を意識してるらしい。

……『一方行』って誰？」

「私に聞かないで。じゃあ次行きましょう」

サヤユカリ
佐屋紫

能力、『マインドイーター』
『精神喰人』

効果、人間、動物などの精神、記憶、深層心理を自由にできる。
ただし、余程強い思念ならば、能力は効かない。
無論、物の記憶は読めない。

制限、手のひら以外、少しでも外れたら何もできない。

つまり、手のひらのみが効果範囲。

手袋などを着用しているなど、間接的に触れても、
能力は使えない。

「手のひらだけっていうのが弱点ね」

「いや、けどお前が見せた夢は凄かったぞ……」

「ふふ。夢の中で私と随分お楽しみだったんじゃないの？」

「……次行くぞ」

ススカゼコユキ
涼風琴雪

能力、『アブソリュートゼロ
絶対零度』

効果、自分の触れているものから、周囲50mの任意の物質の

熱振動を完全に停止させる。温度の調整ができ、すぐ溶ける

0 から絶対零度（-273.15）まで調節可能。

たとえ100でも一瞬で凍りつく。

能力を使おうと思えば、意識しなくても周囲15mの物は
勝手に凍りついていく。

制限、もちろん、周囲15m以上離れれば無理。

アラギリヨウジ
荒祇聊爾

能力、『ロストメビウス
空間歪曲』

効果、空間を断ち切ったり、曲げたり、境界を開いたり、あと、境界同士を無理矢理繋げて移動したりする。応用技として、曲げた空間が元に戻ろうとして放つ衝撃波も攻撃に使う。

制限、制限距離2・31kmまで。遠距離に空間を開く場合には、それまで。

自分の周囲10mの空間をいじるには時間がかかる。無意識では発動しない。意識してからタイムラグは2秒ほどと長い。

シラスイソウカ
不知火奏華

能力、『ランドナバーム
大地噴火』

効果、自分が触れている地面から周囲10mの地面や、その奥にあるマントル、溶岩、マグマを自在に操れる。なお、周囲10mと言うが、深さは測りきれないほど深くま

で操る。

制限、暑い。

ハイトクラウド

能力、『?????』

効果、まだ計り知れない。

御神は、この能力が使われた生徒を見たが、首筋に切り傷があつた程度である。

制限、まだわからないが、能力射程は軽く50mを越すと思われる。

△ガイゼロ
無骸零

能力、『アンインストール完全削除』

効果、森羅万象全ての概念を完全に無かつたことにする最強の能力。やろつと思えば、地球も消せる。

制限、未だ不明。射程も分からない。

飛驒燃故 ヒタネンカ

能力、『直線狂走』 バーニングロード

効果、自分が向いている方向の直線状なら、一瞬で走っていける。

制限、瞬間移動ではないので、体力はそれなりに消費する。
途中で曲がることは勿論無理。

佐屋明 サヤアキラ

能力、『夢想破壊』 シンキングストップ

効果、相手の記憶、深層心理にある概念から、
一定の事柄を一時的に破壊する能力。
例えば、相手から立つ方法を一定時間奪うなど。

制限、『精神喰人』 マインドイーターと同じで、効果範囲は手のひらのみ。

如月明日香 キサラギアスカ

能力、『永久復活』 リザレクション

効果、任意の相手の体力のみを、完全に回復することができる。

制限、しかし、体力のみであって、失血などした場合は直せない。

軽い怪我程度なら、回復力が高まるなどである。

例えると、ベホマはできるが、状態以上系は回復できないのである。

マジシャン
奇術師

能力、『インザミラー
左右反転』

効果、任意の対象物を中心として、自分を対称移動させることができる。

制限、不明。

H C - R O (ヌル)

能力、不明。

効果、変装系？

制限、不明。

HC-R1（アインス）

能力、ライトニングレイ『雷電閃光』、アンチセフト『能力無効』

効果、雷電閃光は、雷を操る程度の能力。

無から雷を放つこともできるので、物質の電子を操っていると推測される。

能力無効は、触れた相手を任意のタイミングで能力を一定時間使えなくさせる力。

制限、能力無効は、一定時間というのが短い。

HC-R3（ドライ）

能力、グラビテーション『重力加担』

効果、周囲10mの任意の場所を最大直径5mほどの範囲の重力を自由に操れる。

制限、重力は最大10倍までしかできない。

全登場人物能力表（後書き）

長いですね。

すごい手抜きがありますが気にしないで下さい。
もう完璧に消えた人もいますね。

第三十一話 互いの思い（前書き）

……とりあえず、読んでください。

第三十一話 互いの思い

琴雪SIDE

「私が行きましょう」

今、瓦礫の上にいるハイト君はそう言った。

そしてハイト君は今、能力を使おうとしている。

……ハイト君の能力がどんな物かは知らないけど、きっとできるよね？

「……ハイトの奴、大丈夫だよな……」

聊爾君が呟く。

「大丈夫だよ、きっと」

「……では、これから瓦礫の破壊作業に入ります！」

その瞬間、ハイト君の両脇の瓦礫が一瞬にして真っ二つになって、
どンドン目で追いきれない速さで瓦礫を斬っていく。

そして、遂には唯の砂になってしまふ。

その、何か分からないものの速さに私達は、呆然とした。

ハイト君は私達が驚いていても冷静で、周りの瓦礫をどンドン細かく砂にしてい^く。

はつきり言^うと凄^い。

瓦礫を斬^っているのに、凄^い速さで砂になっている。

私達にはできなかった事。

考え事をしている内に、もうほとんどの瓦礫は片付いていた。音もほとんどしなかった。一体どんな能力何だろう？

「終わりましたよ。大きい隙間が出来ましたから、そこから救出作業に入ってください」

そう言うところらに来た。

全然疲れてなさそう。あんなに能力使ったのに。

「あの、ハイト君。ありがとう。哀君達を助けてくれて」

「いえいえ、私のできる事はこれぐらいなので。では私は向こうで休んでいますので」

やっぱり疲れているんだ、と思いながらも救出作業を見守る。

「見つかったぞー！」

瓦礫の中から声が上がる。

そしてその中から運び上げられる二つの影。

1人は、紫ちゃん。右腕の肩の部分の服が破れて、血がついているが大丈夫だろうか？

そしてもう1人、哀君。しかし、嬉しかった私の目の前には、残酷な事実しか無かった……。

そう、右腕が無かった。それも、傷口は自分で塞いだのか、普通の肌が張っている。

「哀君……」

もう少し私がちゃんと訓練して、二人についていけば良かったのだ
ろうか？

……そんなもの傲慢だと言えないて事は分かってるけど、そう
思ってしまう。

2人がこちらに運ばれてくる。

紫ちゃんは、特に以上はないそうだが、哀君は、致死量以上の血を
失っていて、意識があるのは
一重に彼の精神力のお陰らしい。

2人は、私達の前を、担架で運ばれて素通りして行った……。

琴雪SIDE END

御神SIDE

「う……………」

重いまぶたを開く。

「…………知らない天井だ……………」

冗談を言ってる場合じゃない。多分ここは部隊の救護棟だろう。周りを寝ながら見ると、包帯やら何やら色々あるのが分かる。

ベッドから起き上がるが、左腕に違和感を感じる。訝しげに思い、左腕を見ると、そこには太い点滴が打ってあった。それを口で啜えて抜く。中身は血だった。多分、重度の失血だったのだろう。

ベッドから降りて、裸足で部屋を出る。今着てるのは、病人の着るような服だ。

やけに頭がはつきりするが、原因は分からない。

ここ救護棟は病院と同じようなものだ。

勿論病室も多数ある。

俺がいた部屋は誰もいなかったので、紫は別の部屋だろう。

意識ははつきりしているが体はダルイという、何か変な感触を覚えながら、病室を見ていく。ほとんどの部屋が空室だ。

ここは大規模戦闘や、災害などがあった際に使われるものなので、今はほとんど患者はいないのだろう。

適当に歩いていくと、一つの病室があった。

病札には、『佐屋紫』と書かれている。

ドアを静かに開けて入る。

中は、俺のいた部屋と同じで、普通の病院の個室の様なものだった。

ベッドの上には、こちらを見ている紫がいた。どうやら俺が来るより前に起きていたらしい。

ベッドにゆつくりと近づく。

「紫……」

「……哀、先に言っとくわ。ごめんね」

「？」

いきなり紫が謝ってきて、何だ？と首を傾げていると、次の瞬間、

「ぶごハッ！」

思い切り、顔面を殴られた。しかもグーで。

間違えるなよ。頭じゃない、顔面に。しかも鼻に思い切り当たった。

「痛あああ！ 何するんだよ、紫！」

「こんなのもう何度か無かったっけ？ 言っただよね？ 私達を信じなさいって」

「……………」

「この腕。ちゃんと自由に動くけど、私の目は誤魔化せないわよ。これ、アイの腕でしょ？ しかも私の記憶によると右腕を無くしたのは私。」

「……けど、あの約束を思い出してくれたんだね。それは嬉しいよ、アイ」

「……紫、俺はお前を守る。例えどんなものがいたって、お前は守

りきる。

だから、その腕は純粹にお前を助けたかっただけだし、一つの覚悟でもある。

そんな腕でもいいなら使ってくれ」

すると紫は目を見開いて驚いたあと、少し頬を赤くしながら言った。

「……そんな事、言われなくても分かってるよ、アイ。

この腕は、アイの腕。私なんかの為に使ってくれたもの。

だから、そんな私はこれからは、いいえ、これからもアイの側に立ち続け、そして助けても、いい？」

「そんなの、当たり前だろ……」

嬉しい。素直にそう感じられた。

紫が俺の、無い右腕の痕を撫でる。

そして、何か目から零れ落ちてくるものを耐えて、言う。
今まで言えなかったことを。

「紫………」

「アイ………」

「「愛しています」「

第三十一話 互いの思い（後書き）

……遂に来ました。

実は真のヒロインは紫でした。

……実は、でもないかもしれませんが、
これから色々あります。

第三十二話 皆と……再会？（前書き）

今回は短い。

第三十二話 皆と……再会？

俺と紫は、そのまま救護棟の食堂に向かった。

多分皆はそこに集まっているだろうと紫が思ったらしい。

……いた。みんなが集まっている。総隊長さんはいないが、多分仕事だろう。俺達に構ってくれる時間も無いと思う。

琴雪がふとこつちを見てきて驚く。

「哀君！ 紫ちゃん！」

「おう。今帰ったよ」

琴雪がいきなり泣き付いて来て、聊爾、不知火とハイトが後から来る。

「哀君。よかったあ」

「えーと……」

「琴雪、哀が困ってるぜ？」

聊爾がからかう様に言つと、顔を真っ赤にして離れる琴雪。

「もう大丈夫なのかい？」

「ああ、紫も俺も、な」

「それは良かったですね」

「ええ、ありがとう」

俺と不知火、ハイトと紫で受け答えしていると、不知火が真剣な顔つきで言った。

「それで……あんたの右腕は、何があった？」

その瞬間、皆が黙って沈黙が生まれる。

……やっぱり答えなきゃ、駄目だよな……。

「これは任務中、ホムンクルスの三番目に会って戦闘になった時、俺が気を抜いたせいで右肩から貫かれ「違うわっ！」「……紫！」

「それは、違うわ」

「どういうこと？」

琴雪が不安そうにこちらを見ってくる。
紫は続ける。

「本当は、右肩をやられたのは私。

……なのに、哀は自分の腕を自分で切り落として、私の傷口に能力で完全に接合したのよ……」

「そんなっ！」

「……………」

不知火が思案顔で言う。

「……それはあんたの意思かい？」

「……………ああ」

「……ハア、なら私達は口出しできないよ。本人の意思なんだから」

「でも、でも！」

溜め息をつく不知火に対して琴雪が必死になるが。

「琴雪、これは哀自身が決めた事だ！俺達は口出しできない」

聊爾の一喝により琴雪が頂垂れる。

「……皆、これはしょうがないんだ。でも、ありがとう、皆」

「まったく、仕方ないですね……」

では、いつまでもこうしている分けにもいきませんし、とりあえずはご飯、食べましょうか？」

その空気をぶち壊したハイトの一言で、皆が笑いながら席につく。

俺はハイトにしか聞こえないように礼を言う。

「ありがとう、ハイト」

「いえいえ」

その後、朝飯を食堂で食った。

因みに俺は勿論？右利きなので、琴雪と紫、どっちがご飯を食べさせてあげるかで

口論になったが、結局ジャンケンで紫が勝って、今食べさせてもらってる。

「……そういえば、アイの能力では、その腕はどうにかならなかったのかしら？」

「紫、それは無理だよ。

いくら俺でも、細胞、神経、血管、骨とかの配列をゼロから完璧にはできない。

だから、紫には俺のを使っただよ」

「そう……。でもこれからはどうするの？

そのままじゃ絶対に生活に支障がでるわよ？」

すると前に座っている琴雪が提案する。

「あのさ……実は私の親、一応医者やってて、義手ならあるけど…

…」

「本当かよ、幸運だな。じゃあ、後で紹介してもらっていいか？」

「いいよ！でも、私の親がめついいから、いくら哀君でも最新の義手だったらお金掛かるよ？」

「大丈夫。なんか異様に金が貯まってるから」

「それならいいけど……」

そんな感じで俺の義手付けは確定した。

……機械鎧オトメイルみたいのだったら格好良いのに……

昔見てた漫画、アニメを思い浮かべる。

まあ、そんな事ないか……。

食べ終わった後、琴雪達には部屋に戻るようにならわれて、俺達は戻った。

琴雪曰く、本当は残りたいのに、訓練があるらしい。

それで、今は紫の部屋に来ている。

……別に、何もしてないよ!?

どっちもまだ本調子じゃないんだし!

けど、普通に帰ったら……って、あー!!

……この頃俺、妄想激しい気がする。

第三十二話 皆と……再会？（後書き）

……主人公がどんどんハガレン！？に近づく！
次は左足いつとくか？

すみません、不快感を感じたならば取り消します。
しかし、義手をつけるのは本当なんで。

主人公の性格が……オワタ

第三十三話 義手

そんなこんなですぐ退院できた俺と紫。

元々、紫は俺の血を輸血したから特に異常は無かったし、俺自身もちやんと点滴をしたし、輸血して普通通りだ。

外傷とかは俺が直したからな。（皮膚その他を上手く引き伸ばして）

で、退院してすぐその日に、琴雪が両親に俺を紹介したいらしい。

それで今は、琴雪の両親がやってる病院に行く途中。

「でもさー、琴雪の親が医師なんて聞いたこと無かったよ？」

不知火が言う。

琴雪が苦笑いで答える。

「別に話さなくてもいいかなーと思って……

前も言ったけど、お父さんとお母さんは、いくら私の友達でも平気で金を取ろうとするし。

けど、根は優しいからね？」

「分かったよ。けどさ、義手ってどんくらいするわけ？」

「……多分、普通の付けるだけなら、最新の型で百万円くらい。

それに、神経と機械回線を繋いで、普通の手と同じように動かせるのなら、

最新の型で軽く一千万円は越すと思う……」

「うそお！　ちょっと御神！　あんたそんな金あんの？」

「いや、一応俺もSランクで、更に秘匿性がすげえ高いし、それで、いきなりの部隊入隊で更に上乘せ、そして極めつけは能力犯罪者への対応。合わせて一億ぐらいいは溜まってるけど……」

「……随分部隊はその能力が好きなんだね……」

「……言つとくけど、俺が金せびつたんじゃないからな」

そんな感じの会話を続けていると、すぐに琴雪の両親が働くという病院が見えた。
結構大きい病院だ。

「あれが、お父さんお母さんがいる病院だよ！」

「佐屋私立総合病院……って、私立なのか？」

「そうだよ。けど近所の人達がいつも通ってくれるからね。それに総合だからどんな患者さんでも来るしね」

「じゃあ、行こうか」

俺達は病院へ入ると、琴雪が受付にいつて何か話す。すると奥の扉が開いて、そっちに行くように言われる。

俺は、皆に待つといってくれと言って、扉の部屋に入る。扉を閉めると、奥から声が掛かった。

「お前さんが琴雪の言ってた奴かい？」

「はい。右腕全体の義手をお願いしたいんですが」

そう言いながら振り向くと、そこには、向かい合うように並んだソファの

向こう側に座った、少しだけ紫に似ている中年のオジサンがいた。多分父親だろう。

「右腕全体か。じゃあ、どんなのが良いか要望いつてみなよ。

ゴムの安いやつから、機械神経内臓型、果ては、部隊の人が欲しいが、

武器を内臓した裏製品も扱ってるよ」

「ぶ、武器内臓って……」

「聞いたところによれば、お前さんも部隊の人間らしいじゃないかなんならどうだい？ グレネード弾を三発まで装填可能なランチャ

ー内臓の最新型まであるよ」

「いや、そこまでは……」。

俺が欲しいのは、見た目がちゃんとした腕に見えて、機械神経内臓の最新型の義手を付けて欲しいんです。

それも、任務に差支えが無いくらい使い勝手が良いやつを」

すると何か思案顔をしてから言う。

「なら、良い型があるよ。ついてきなよ。

最近できた、琴雪にも秘密にしてるものがあるんだ」

そして、いきなり立って、後ろを向いたと思うと、そこにあった本

棚の中の

一つを奥に押し込む。すると、本棚が横に動いて、別の部屋への扉が開く。

「すご……初めて見た……」

中に入ると、そこには一つの義手がクリアケースの中に収められていた。

機械丸出しの、まさしく俺が創造していた機械鎧のような見た目をしているが、

よく見ると、もつと複雑で、精密に作られている事が分かる。

なんか、一言で表すと、『ターミターの機械丸出し版の、もつと機械が多いver』である。

「何か格好良いですね……」

「おお、この良さが分かってくれるとはね。

これは機械丸出しで、君の要望の内一つは潰してしまうかもしれないけど、後の性能が完璧でね、

ぜひ君に使って欲しいんだ。頼む、買ってくれないかな？」

「……そうですね、元々俺は使い勝手がよければなんでも良いですから、これをお願いします」

「そうか、買ってくれるか。

……じゃあ、早速付けてみるか？ 代金はその後で良いから」

「はい。よろしく願います」

これで、義手の種類が確定した。

……けど、何か忘れてる気がする。
何か琴雪に忠告されたような？

まあ、まずは付けてもらおう。

第三十三話 義手（後書き）

主人公は結局、ハガレンを真似るようではいい、すみませんでした。

ですが次で義手の性能が発揮されるでしょう。

第三十四話 手術？（前書き）

……痛そう。

第三十四話 手術？

「いったああああああ！」

ヤバイ、意識が飛びそうだ。痛みだけで。

いや、訂正しよう。

痛みだけではなく、目の前の惨劇を見ているだけでも大抵の人は気絶するだろう。

今、何が起きているか、それは極簡単な事。

俺の右肩に、右腕（機械だけ）義手を接続している手術をしているのだ。

それに、この義手は唯の義手ではなく、

神経と機械神経を接続し、普通の腕と同じように動かせるものなので、

手術の時は痛みがあるらしい。

なので、俺が今気絶しそうなのはその痛みのせいなのだ。
しかもここまで痛いとか予想外だろ。

だって腹に風穴開けられるより痛いんだぜ……。

「やばい！ 慣れてるっ、せ、せいでえっ！

中と、半端につ！ 気絶！ できねーーーーー！」

焼けて焦げて蹴られて殴られて刺されて撃たれて骨引きずり出されて凍ってレンジでチンみたいなあーーーー！

「はははっ！ まだ手術は続くからじっとしててねえー？」

さて次いくよおー！？ 覚悟はいいかい」

……ようやく痛みが治まったと思ったら、視界の隅で何か出してるよ。

「次はこれだから！ よろしくっ！」

今顔の前に突き出されたのは、銃身？はAK、だけど先端についてるのは、く、釘打ち機っ！？

「ふっふっふ、これはあ、かの有名なアサルトライフルAK47と同じ速度で連射できる改造品なんだ！」

「え、ちよつと、ねえ、連射って、な、何を……？」

「それは、お楽しみだあよっ！ じゃあ、逝ってみようか！」

「え？ そ、それって、それって絶対手術で使うものじゃ……って！ やめて！ 嘘だろ！ ああああ！ 嘘だあー！……！」

「さよなら」

「グぎやはアアああガアアああアアががががががk j f ア m f 裸L f ぽ x j f @オS f s k f s m f 死！」

あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

焼けて焦げて蹴られて殴られて（ry

「紫、琴雪、皆、ごめ、俺、もう逝くわ……」

視界が黒く染まった。

「あつれえ〜？ もう気絶しちゃったのか？ まあ良いか。
じゃあこのまま続けるか」

その後、病院中には、爆音やらなんやらが何時間も続いた、らしい。

「っは！ ここは！」

身を起こす。

ここは……手術台？

周りには………（恐怖の）AKやら、四連グレネードランチャー
？やら、弾が空の機関銃やらがあった。

「ヒイツ！？」

何か寒気がしてきた。

……この寒気は手術中、ずっと裸だったせいだろう。そうに違いない。

と思って、なんか頭に引つかかっているものを無視することにした。
それで俺は両手を使って、すぐ隣の台においてある服をきる。

って、両手？

自分の右手にゆっくりと視線を向ける。

そこには、あの機械だらけの義手があり、それと付随して、悪夢が流れ込んできた。

「あああああ！　いったああああ！　うそだろ！　幻痛！？
っ！　か何なんだよ！　あの手術は！」

そんな感じになり、手術室をでて、琴雪のお父さんのところに行く。

「ちょっと！　あの手術なんなんですか！？」

すると、彼は背中を向けながら喋った。

「ああ、あれは普通に、君の義手をつける手術。

因みのいうと文句などの苦情は受け付けない。君を手術して義手つけたのは私だよ？

結果だよ。過程はどうでも良い。

それより使い心地はどう？」

俺が言おうとしたことを牽制され、止められてしまった。

「それは……すごいいいです。違和感もあんまりないし。
それは感謝します。

……で、値段はいくらですか？」

「おおっ！　早速本題に入ってくれたね。

では、その義手のオプションの使い方説明書とその義手をセットで、
なんと！　初回診療額で——！　なんとっ……………」

……これは二割引してくれそうな雰囲気！？

「お値段占めて一億円になります！」

「……はい？」

そういえば、忘れてた。

琴雪の忠告。

『お父さんとお母さんはがめついから』

あゝあ、ちゃんと最初に聞いとけば良かったな……。

第三十四話 手術？（後書き）

主人公の性格が結構崩壊してるような？
そんなことないか？
でも……

第三十五話 ヤバイ機能（前書き）

……どんどん、というか最近
いきなりシリアスを抜けてきました。

第三十五話 ヤバイ機能

「はあ……」

「元気だして。親を説得できない私も悪かったから」

今俺達は、病院を出て、しばらく行ったところにあるレストランで皆で居る。

一億円（全財産）という法外な値段を払ったばかりなのだ。で、溜め息ついてたら琴雪がそう言ってくれたのだが……

「いや、いいよ。義手を付けてくれたのは事実だし、それに、あの子は、ちゃんと製品に見合った金額を提示してるんだろ？」

「うん。それは絶対に保障できるんだけど……」

そうなのだ。琴雪の話によると、確かにあの子は金を取り捲り、それをぼったくりや、がめついと言われているが、実際そうではない。

そう、あの病院は一応私立病院なのだ。

なのに、新型の義手義足などを作ってるから費用が馬鹿高い、が、それに見合った機能をつけているので、別に取りすぎ、というわけではないのだ。

……あの手術はもうやりたくないけどな。

「それにさ、結構親切な所もあるだろ。」

特に一年保障期間と、軽い故障なら直せるマニュアル本をタダでく

れたんだし」

「まあ、哀君がそう言うならいいけど」

「それにしても、あの爆音はなんだったの、アイ？」

「ヒイツ！ き、聞かないでくれ……」

「そ、そう。なら別にいいけど……」

突然感じた寒気に身を震わせていると、向かい側に座ってる聊爾が言ってきた。

……因みに言うと、6人席で、片側の真ん中俺、右に琴雪、左に紫だ。

向かい側の真ん中に聊爾、右に不知火、左にハイトだ。

「まあ、とにかく何も無く無事に手術できてよかったんじゃないか？あとさ、少し提案があるんだけど……」

「何だ？」

「その新しい義手さ、やっぱ何か機能あるんだろ？」

「一億もするんだから何かはあるだろ、絶対。」

「だからそれを見ようぜ！」

「けど俺は、別に機能はいらないって言ったけど……」

「そうか、そういえばこれは薦められたものだったから何が機能が分からないな」

「だろ？ だから、ちょっと部隊の訓練場行って見てみようぜ！」

すると不知火が疑問の声をあげる。

「なぜ訓練場に行く必要があるのさ？」

「いや、だってそりゃあさ、一億もしたモンだぞ？
何か危険な物があっても不思議じゃねえだろ」

すると今まで黙っていたハイトも、飲んでいた珈琲を置いて
それに賛同する。

「まあ、確かにそうですね。何か武器があっても何ら不思議ではありませんよ」

「……確かに」

まあ、そんな分けで訓練場を借りる事にした。
しかもまた空いていた。

……他の奴らは訓練してんのか？

「じゃあ、とりあえずマニュアル本でも見ようか？」

「いや、それじゃつまんねえし！　ということで、
マニュアル無しで適当にやってくれ！」

聊爾がそう行つて、皆も俺を見るので、仕方なく機能を適当に使う
ことにする。

一応言っておこう。

俺の右腕は、ターミネーターのそれよりも、機械が多くついて、中身が見えない。

実質、外にある機械外骨格しか見えないのだ。

で、右手の手首の部分には、腕時計の様な形をした機械がついている。

これが、色々な機能进行操作、起動する機械だ。

因みにこれにはボタンが複数あり、デジタル画面には、右腕の詳細情報が並べられている。

「じゃあ、最初の機能行くぞー！ー！」

すると皆はいきなり俺から離れていく。

そして、俺は右腕を前に構え、ボタンの内一つ目を押す。

その瞬間、俺の右の手のひらから赤くてオレンジなユラユラしたものが爆発的に噴出し、

俺の目の前10mくらいが、焼き払われた。

それが収まると、右手からはプスプスとガスが切れる音がした。

前10mは地面が焦げて黒くなってる。

10mよりもっと向こうにいて、無事な皆は、ハイトを除いて啞然としていた。

因みにハイトは、「面白いですね……」とか言ってる。

「つーか、地面まで炭化させる火炎放射？ってどうよ……」

機能1、火炎放射。

「……これから思いやられる」

何せ、ボタンは軽く見積もっても、10以上はあるからだ。

皆は同時にこう思った。（勿論ハイトを除いて）

（（（（私達／俺達、大丈夫か？／かな？）（？）（？）（？）

そしてハイトはというと、

（ふふ、どんな兵器が出てくるか、楽しみですね）

第三十五話 ヤバイ機能（後書き）

何かハイトの人格が崩れ始めてるような……

第三十六話 決戦直前（前書き）

遂にきました。

いきなりの展開で、駄文丸出しですが、どうか最後まで見てくださ
い。

第三十六話 決戦直前

その後、機能について調べた所、最初に押したボタンはただ運が悪かっただけだった。

ということにはならなかった。

機能は、火炎放射機に、その他、幾つか実害がある機能はいくつかあった。

まずは、機関銃。

手のひらから機関銃がせり出し、そこから毎秒五発というものの凄い量の

鉄の塊を吐き出す殺戮兵器。

そしてまだある。

超小型弾道ミサイルを、緊急時の一発キリである。

因みに、火炎放射を見てすぐにマニュアルを見たところ書いてあったのだ。

さすがに弾道ミサイルなどを試射する分けにはいかない。

あと一つ。これがやばかった。まじで。

例えるなら有名な『スクイド』の主人公の決め技である、『抹殺のラスト リット』にそっくりなのだ。

多分あの人狙って作ったと思う。

右肩の付け根ギリギリから噴射される超高密度の炎を推進力とし、それを上手く操り、右腕で攻撃する、というものだった。

それを試してみたところ、琴雪の氷の壁三層と、不知火の土の壁三層を軽く破った。

琴雪と不知火は「能力以外で負けちゃった」と、落ち込んでる。

まあ、それ以外は別に特別なものは無かった。

強いて言えば、拳銃とか拳銃とか即席地雷とか手榴弾とかだ。

「これって、質量兵器のオンパレードだろ……」

「ま、まあまあ、良いじゃない。

これで能力以外にも凄いとこできて」

紫が慰めてくれる。

聊爾とハイトは兵器に興味津々だし、琴雪と不知火は落ち込んでる。紫に慰められながら溜め息ついてる俺も合わせると、この訓練場、とてつもない力オスになってる。

「でもな、紫。右腕じゃもう能力使えないんだ」

「え？ どういう事なの、アイ？」

「つまり、俺の能力は触れている物質を自由自在に操る事だ。だが俺の右肩の断面と触れているのは機械だ。

しかも、別々の物質同士では能力を渡らせる事ができない。

だから、もう右腕全体では能力は使えないんだよ。
それを武器で補うから、丁度良いと思うんだけど……………」

「……………そっか……………」

やっぱり、片手を失うのは辛い。

精神的にも、肉体的にも、そして、任務にも差し支えが出てしまう
かもしれない。

なにせ両手で操るものを片手だけで操らなくてはならないのだから。

そんな感傷に浸っていると、いきなり訓練場に赤いランプが出た。
それと一緒に鳴り響くブザーと、機械の声。

『警告、『H E A V E N』防御システムダウン。進入者通過確認。
人数不明。』

部隊員は、直ちに会合場所に集まり、総隊長の指示を仰げ』

「……………ッ!!!!!!!!!!」……………」

息を呑んだ。

最先端科学の粋を集めた『H E A V E N』防御システムがダウンし、
あろう事か

進入者を許してしまった。しかし、それ以上に大変な事がある。皆
も感じているようだ。

聊爾が呟く。

「外からの進入者……………ってことは、多分」

「ああ、『HUMAN』に違いない」

そう、ここは『HEAVEN』。外の科学力では決してこの防御システムを破る事などできない。

ならば答えは一つ。外に居て、尚且つ『HEAVEN』と同等かそれ以上の科学力を持った組織。

それは、『HUMAN』しかない。

俺達は、用意した制服に着替え、会場場所に集まる。

会場場所は、部隊の膨大な人数を楽に入れることができる大きい集会所だ。

俺達はそこに行き、先に来ていた明や飛驒さんの居るところまで、人ごみを縫っていく。

「飛驒さん！俺達はどこの隊になるんですか？」

「ああ！お前らは特別に編成された部隊だ。総隊長がこれから指示をするから、お前らもそれを聞いとけ！」

「分かりました！」

俺達は一番端に寄る。それと同時に部隊の整列する音が聞こえる。正面に総隊長さんが立つ。

「ではこれより、状況説明と、その緊急対応策を話す！聞き逃すな！」

いつももまして緊張している総隊長さん。

一体何が……。

『HUMAN』襲撃部隊SIDE

「たつくよお！ あの防御システムうざかったなあ！」

複数の男女が、一つのビルを目指してゆっくり歩く。ゆっくり、だが確実に。

その中の一人の男がそう愚痴る。

その外見は、以前御神が倒したものと同じ、『一条裕』のものだった。

「うるさいよ！ アインスコピー！ あんたは少し黙ってろっつもの！」

「んだとフィアア！」

ためえも少しはその言葉遣いどうにかなんねーのかよ！この性悪女！それとコピーは余計だっつもの！」

アインスコピーと呼ばれる男は隣を歩いている女をフィアアという。

「だ、だれが性悪女だ！ ほらドライ！ あんたも何とか言いなさいよ！」

フィアアにドライと呼ばれた女は、二人に向き、

「任務が最優先。言い争いは後だ」

と諭す。

「つくゝ！ ドライの裏切りもの！」

「まあまあ、フィーアさん。そんな怒らないで……」

「何よフュンフ！ あんたも裏切るの！？」

フィーアにフュンフと呼ばれた少年は俯き、呟く。

「え……えと、その、す、すみませんでした、フィーアさん……」

「え？ ちょ、ちよつと！ そんな泣かないで！ ごめん！ 私が悪かったから！」

フュンフの半泣き顔を見て焦るフィーア。

するとそんなフィーアに向けて鉄拳が二つ落ちる。

ガツンとかバキッ！とかいっても遜色ない音を響かせたフィーアは頭を抱える。

「いったあゝ。その、すみませんでしたお姉さま方！」

「まったく。私の大事なフュンフちゃんを泣かせるなら、私達はだれ相手でも暴れちゃうわよ？」

まったく同じタイミングで同じ言葉をフィーアに言う美女二人。どちらも同じ顔をしている。
それを見て、泣き止むフュンフ。

「ゼクスお姉ちゃん、ズイーベンお姉ちゃん！　ありがとう！」

「「いいのよ！　フュンフの為ならなんでもするわよ？」」

……こちらもちちらでカオスしていた。

アインスコピーとファイアが騒ぎ、それを普通に無視するドライ。
フュンフの笑顔に対して鼻血を出すゼクス、ズイーベン。

そんなカオスを築きながらも、足取りはみな一方向に、確実に、向
かっていた。

目指すビルは、『Uninstall』部隊日本の本部。

これから、未来の歴史に刻まれる事件が始まる直前だった……。

第三十六話 決戦直前（後書き）

まあ、普通に分かりますと思いますが、数字ですね。ドイツ語の。

アインス、1
ドライ、3
フィーア、4
フュンフ、5
ゼクス、6
ズィーベン、7

ってな感じで。

第三十七話 絶望の正体（前書き）

なんかどんどんg d g dになっていく本文。

第三十七話 絶望の正体

「ではこれより、状況を説明する」

総隊長さんの緊張した大声で、部隊が緊張の空気に包まれる。

「今から約20分前、『HEAVEN』外部接続口にある、防御システムが破られた。

物理的な攻撃にも、コンピューターウイルスを使ったサイバーテロにも

対応できる、世界でトップのスーパーコンピューター兼人工智能だ。アメリカが攻めてきても、少なくとも十年は持ちこたえる程のものだ。

それが、たった5分で破られた」

周りがザワザワと声を立てる。

「嘘だろ……」「たった5分!？」「そんなバカな事が!」

などと言っている。

「監視カメラに辛うじて映っている事から見ると、敵はたった6人だが、これは全て、『HUMAN』所属の能力者と思われる。

その能力者は、現在このビルに向かって来ている。

目的は分からないが、戦う事は免れないだろう。

そこで、指示をする!

突撃隊長代理、飛騨燃故!

今から敵と接触し、目的を探る、敵の能力の判別を任務とする!

支援隊長代理、佐屋明！

突撃隊の支援、及び万が一、敵から攻撃を受けた場合の対処を任務とする！

処理隊は、万が一戦闘を始めた場合のみ、敵を殲滅する任務とする！

そして、Sクラス能力者で固められた、今回出来た総隊長直属特別部隊は

後、私が指示をする。

以上だ！ 行動に移れっ！」

『了解！』

殆どの部隊員の掛け声が響いた後、どんどん人が少なくなり、遂には俺達のみとなった。

「なあ、紫が部隊長だったのに、明に任せてよかったのか？」

「大丈夫よ。あの子は部下には信用されてるし、実力もあるから」

「そうか」

すると総隊長が近づいてきた。

「では、君達にも特別任務を遂行してもらいます」

総隊長が任務内容を伝えようとしたその時。

真つ赤な砲撃が、会合場所の建物の半分をそのまま削った。比喻ではない。

なにかが分からない物質で構成された粒子の砲撃は、会合場所の建物の半分をそのまま消し飛ばしたのだ。しかし、まだ辛うじてバランスがある建物。

俺達は起こった事に驚き、そして本能的に恐怖した。

その時、その場所を去っていれば良かったのだが、見えたのだ。建物の外の地獄が。

建物が半分削られた事により、外が丸見えの展望台になった。

そこに広がっていた景色は、地獄絵図だった。

部隊が丁度出た時には、既に遅かった。

さっきの砲撃もそうだが、それが無くとも、部隊の殆どが壊滅状態だった。

まだ肉眼で微かに能力を使って抵抗する者も見えたが、すぐにその閃光は止む。

誰が生きているか分からない状況で、死体かどうか分からないモノを踏みつけながら歩いてくる6人。

その服は、普通の人を着るような、まるでここに遊びに来ているとでも言いたいようなものだった。

高校生ぐらいの少年が一人、小学生ぐらいの少年が一人、高校生ぐらいの少女が二人に、女性が二人。
肉眼で微かに見えた。

その中にも、知っている顔がいた。

「あれは！ アインス！？ それにドライも！」

そう、前に倒したはずのアイスや、瓦礫で行方不明になっていたドライがいた。

ということは、残りの4人もやはり

「ホムンクルスですか……」

「総隊長さん。どうすれば！ ホムンクルスが6人なんて！」

「落ち着きなさい。既に民間人は地下シエルターに収容済みですし、やはりやつらの狙いは我々と、『Un Instal』の壊滅、ですか」

総隊長さんはフウ、と溜め息をついて、言う。

「……あなた達では6人のホムンクルスを同時に一対一で相手するのは難しい。
私が行きます」

「！ そんな！ いくら総隊長さんが強くても、相手があの6人では！

何か良い手があるはずです！」

「いえこれ以上待つ時間はありませんし、そんな手は思いつかないでしょう。

だから、これは私が行くしかないんですよ。

私の能力は制限が激しいですが、上手くすれば相手を丸ごと消すことができます。

これしか手は無いんです。

もし私が負けたとしても、決して諦めてはいけませんよ。

だから、少なくとも1人は消します」

「……………」

総隊長さんがビルの断面の所に歩いていく。

俺達はそれを黙ってみている事しかできなかった。
今はただ、総隊長さんを信じる事しか……。

「無骸零、その必要はありませんよ」

沈黙に響く一言。

そしてその言葉と共に、総隊長は切り刻まれた。

何が起ったかを理解する前に、総隊長はビルの断面から落ちた。

「そ……そんな！ 総隊長さん！？」

俺は後ろを振り向く。そこに居る声の主に聞く。

「なぜだ！ なぜそんな事をした！」

「何故って、分かるでしょう？」

疑問に思わなかったんですか？ 番号。0～7まである中で、2だけ無い。

そして、意味も無く隠す能力。

更に、何の攻撃も無く突破された防御システム」

「まさか、お前が情報を……」

「フフ、そうですよ。私はツヴァイ。正式名称『HC-R2』」

俺の向いた先にいる奴を睨んだ。

そう。自分のことをツヴァイと名乗った、

ハイト・クラウドだったものを。

第三十七話 絶望の正体（後書き）

遂に出ました！

ツヴァイ！

二番です！ 分かっている人も居たと思いますがハイトです。
何か変な点があったら教えてください。

第三十八話 死（前書き）

どこかの打ち切りアニメのように、
作者でもムカツク程の終わり方です。

第三十八話 死

「嘘……」

「ハイト……お前が……ツヴァイ？」

「そうですよ。何回も言わせないで下さい。

私は『H C - R 2』です。『HUMAN』の人造人間ホムンクルスです」

ハイト、いや、ツヴァイはいつもの飄々とした感じで受け答える。

「……総隊長の無骸は厄介な能力でしたが、さすがに不意打ちではどうしようも無かったようですね。

あいつはもう死にましたよ」

「ツヴァイ！ テメエっ！ ゆるさねえ！」

聊爾が飛び掛るが、その攻撃がツヴァイに当たる前に、聊爾が地面に落とされる。

「がつ！？」

そこには、聊爾の頭を地面に押さえつけたドライがいた。よく見るといつの間にか周りがホムンクルスに囲まれている。

「……やるしかないか。聊爾！ 境界を使え！」

「ああ！」

聊爾は裂け目から自分だけこちらに移動した。

ドライは体勢を元に戻す。

「皆！ 絶対今此处で倒すぞ！」

「ああ！」

「うん！」

「アイの為なら！」

「任せな！」

その時、一陣の風が吹いた。

その元には、ツヴァイが静かに立って、こちらを向いている。

「まったく、人の實力さえ理解できないのですか。哀れですね」

その瞬間、血が舞った。

「あぐうつ！」

人の倒れる音。

後ろを振り向くと、バラバラになった岩石の盾の中で、不知火は服が切れ、体中血まみれになって倒れていた。

「不知火！ ツヴァイ、何しやがった！」

聊爾が不知火を抱きかかえ叫ぶ。

「五月蠅い羽虫が騒ぐなよ」

フィーアが凶悪な笑いを浮かべ、聊爾がそれに激昂した。

「んだと！ これでも、食らえ！」

フィーアの周りに境界の分かれ目が無数に開いていく。

しかしフィーアはそれを見て、どんどん笑いを深くする。本능が悟った。攻撃してはいけない。

相手は圧倒的な『ナニカ』を持っている。

俺は咄嗟に聊爾を止めようとした。

「聊爾！ 止めっ……」

「死ねええええええ！」

聊爾が小さい境界で囲んだ場所がどんどん陽炎の様に揺らいでいく。そして、次の瞬間、巨大な閃光と衝撃波が、轟音と共に俺達を襲った。

その衝撃波にやっとの事で耐え、その場を動かない俺達。

ホムンクルスはそれを、微風程度にしか思っていない様にしていた。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ、ハハハハハハハハ！ やったぞ！」

聊爾が我を忘れて叫ぶ。

しかし俺には見えていた。煙の中で佇む影を。

「チツ、まったくさあ、この服お気に入りに만だけどさ、どうしてくれんだよ！」

そこには、服が一部だけ破れた、無傷のフィーアが立っていた。

「まったくさ、羽虫は黙ってなって」

そう言いながら、フィーアは、驚愕でいる聊爾に一步で近づき、手を触れる。

「ッ！ 聊爾！ 離れ「もう遅いよ」！！」

その瞬間、こちらにも聞こえる音で、濁った音が聞こえた。

その音は、まるでマンガでしか聞かないような……

そう、骨が折れる時のものだった……。

「ぐっあ、あ、あああああ！ ああああ！ 何だよこれ！ テ

メエ何「黙れつつてんだよ」

ぎゃああ！ うぐ！ あああ！ ちくしょお！ があああ！」

次々に聊爾の体から聞こえるボキボキという生々しい音。

そしてフィーアが聊爾から手を離れた時にはもう、聊爾の体は至る所が内出血で青黒く変色し、

腹からは白い、『肋骨』が突き出ている。

そして聊爾は、ピクリとも動かず、目を開けたまま意識を失っていた。

「まったくよ。フィーア。てめえいつも殺し方エグくて、飯が不味くなんだよ。

この悪趣味女！ 性悪女！」

「うるさいアインス！ まったく！」

「……………さねえ」

「あ？ なんだよ御神い」

「ゆるさねえって言ってるんだよ！」

能力集中。目標アインス。
対象風。

「いくぞ！」

その瞬間、俺の左手から吹く風。
台風竜巻より強い風がアインスを襲う。

しかし、アインスはその場に留まって言う。

「へっ！ やっぱお前が一番手応えあるなあ！」

「ほざけ！」

こいつらの意表をつくには丁度いい。

俺はアインスに気付かれないように右手の機械を操作する。
そして、一つのボタンを押す。

その瞬間、俺の右肩の付け根から、高出力の炎が出て、それを推進力とし、

俺の体がアインスに近づいていく。

その速度は俺が風で飛ぶより何倍も速かった。

「行くぞ！ これでも食らえ！」

俺はそのまま、一瞬でアインスの懷に詰め寄り、鳩尾に機械の拳を思い切りぶつけた。

その瞬間、背中の炎は止まる。

「グハッ！ てめえ……………」

「お前が、黙れよ」

能力が使える左手で、アインスの頭を掴む。

次の瞬間アインスの頭蓋骨はバラバラに砕けちり、桃色の脳が姿を表した。

俺は脳を銃で撃ち砕き、文字通り脳死したアインスをそのまま地面に叩きつけ、後ろを振り向く。

「ダメっ！ アイ！ 後ろ！」

その時、紫がこちらに叫んだ。

調子に乗っていた？ そんな事ないはずなのにな。

その瞬間は、時がゆっくり感じられた。

「じゃあね」

声が聞こえる。

これは、ホムンクルス？

誰かは知らない。ツヴァイかもしれないしドライかも。

いや、ファイアかもしれないし、フンフやゼクス、ズーベンかもしれない。

でも分からなかった。

再生を施す時間さえ与えてくれなかった。

やはり、あの時感じた『恐怖』から逃げれば良かったのか？

あの絶対的な力から？

声が聞こえる。

ホムンクルスは、目的が済んだと言ってる。

紫と琴雪は、こちらに走ってきながら何か言ってる。けど聞こえない。

多分、紫と琴雪は無事に済むだろう。

でも俺は。

はは、走馬灯とかって、見えないもんだな、本当に死ぬときって。

そして俺は、黒い炎に包まれ、意識を落とした。

ホームクルス襲撃事件という名の虐殺は、
死者314人。

重傷者168人。

『HEAVEN』防御システム、最普及不可能。

日本本部の『UnInstal』のビルの半壊。

総隊長無骸零の死体は、瓦礫を掘っても掘っても見つからないらしい。

これほどまでの害を出し、

そして.....

そして御神哀の、この世界での生存が抹消され、終わった。

第三十八話 死（後書き）

まだつづく！

続きがあるはずだ！

これはバッドエンドではない！

新たな物語の始まりだ！

この、一真駄作（死んだ策）を読んできた人。

まだ続く気がします！ それを待っていてください！

まだプロット作り中のような帰がするけどそうでもない？

本当に終わり方がアレだったけど、感想に誹謗中傷書かないでください。

私はそういう罵詈雑言に弱い体質で、友達に冗談でも悪口言われるとテンションがガタ落ちして首吊りたくなってくるんです。

では、今まで見てくれ続けた皆様。

どうもありがとうございました。続編をお待ちください。

裏設定・ハイトの能力名『フラッターエッジ空刃切断』

ここでアンケート！

続編に参考にさせていただきます。

こんな感じがいいな！ というものを選んで、感想などのところに書きちゃって下さい！ ちゃんとした感想も書いてくれるとなお嬉しい

いです。

一、ジャンルかわってファンタジーな異世界トリップする。

二、超能力あり異世界にトリップする。

三、月日が経った元の世界で、実は死んでなかった宣言。

四、キャラは同じだけど、皆御神を知らない並行世界トリップ。

その他、何かあったら書いてください。アイデアじゃなくていいですよ。

・すみません。上の質問はとくに打ち切ってたのですが、間違えてまだ感想で書いてくれた人が居て気付きました。間違って感想に投票してくれた方、すみませんでした。

どうかこれからも、『まてりあるしり〜ず』をお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2600m/>

In The Material ?

2011年1月8日09時14分発行